

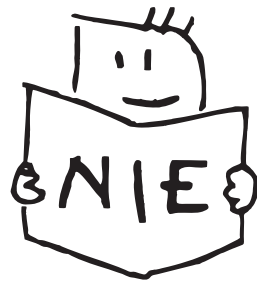
2011(平成23)年度

兵庫県

NIE

実践報告書

◇ 教育に新聞を ◇



兵庫県NIE推進協議会

N I Eで「違いを知る」から「対話」へ

兵庫県N I E推進協議会

会長 杉 本 健 三

N I Eを始めた高等学校が、生徒の様子を知らせてくれました。

活動初日に担当教員が、6社の看板コラムをプリントに貼って配布したそうです。「天声人語」「春秋」「正平調」「余録」「産経抄」「編集手帳」。さまざまな生徒の反応の中に、「先生、みんな書いてあることが違うやん」「なんで？新聞やのに」というものがあつたといいます。

察するに、生徒たちはどうも、どの新聞も同じことを取り上げていると思っていたようです。各紙コラムの内容が違うことに驚く気持ちの基にあるもの、それは新聞報道への無条件の信頼といえるでしょうか。新聞は正しい、正しいことは正解、正解は一つ…だからどの新聞にも同じことが書いてあるに違いないという考えの経路が見えるように感じました。

この「正解」の存在に慣れている心性は、正解をもとに進められる学校教育で育てられたものでしょう。というのも正解という名のスタンダードの共有がベースになって知識の伝授や価値観の伝達が成り立つからです。

ですが、世の中には「最適解」はあっても「正解」はありません。つねに世の中は流れて変化しており、1秒といえども時を巻き戻すことはできません。その時そのタイミングでのよりよい判断を繰り返していくことが求められます。ましてや、世界には多様な民族、宗教、生活様式、文化、国家体制があり、それぞれの利害をめぐって複雑に入り組んでいます。だからこそ、言語能力の育成に加えて、N I E活動の大きな意義の一つに、若い人たちの社会的な目覚めを促す力や多様性を受容する力の育成があると私は考えています。

関心が目覚めを生みます。そして多様性を認め合いながらともに現実的な最適解に向けて「対話」を継続する、それは日本がこれからも平和で豊かな社会であり続けるための必要条件ですし、背景が異なる世界中の人たちと一緒に生きていくための必要条件でもあります。「対話」は共通の目的に向かって互いの考えを粘り強くすり合わせていく行為です。対話が成立しないという絶望のふちにあるのがテロ行為ではありますまいか。

新聞は一覧ができるので関心が広がられます。さらに新聞には解説と分析が付されています。先生方が工夫して展開して下さるN I E活動の中で、児童・生徒・学生の反応が「先生、こんな記事もあつた」から「それってどういうことなんだろう」に進んでいくことを期待しています。

<目次>

N I Eで「違いを知る」から「対話」へ

兵庫県N I E推進協議会会長 杉本 健三 …………… 1

2011年度兵庫県N I E実践指定校 …………… 4

【小学校】

自分の命は自分で守る～「津波てんでんこ」新聞を通じて、東日本大震災から学ぶこと～

神戸市立本山第二小学校 教諭 木村 清弘 …………… 6

新聞を活用して、たがいにつながりあう子をめざして

～受信する力・活用する力・発信する力を育てる～

西宮市立南甲子園小学校 教諭 井上 敏雄 …………… 10

新聞に親しみ、伝え合う子の育成

小野市立下東条小学校 教諭 下山 晃宜 …………… 14

新聞を活かし、自分に生かそう～社会とつながり、人に出会えるN I E～

宍粟市立三方小学校 教諭 西村 一郎 …………… 18

新聞に親しもう

～各都道府県や世界の国々の記事を集めることを通して～

神戸市立成徳小学校 教諭 宮本 讓 …………… 22

新聞に親しもうとする児童の育成～低学年におけるN I Eを活用した授業づくり～

加古川市立陵北小学校 教諭 井上 博嗣 …………… 26

伝え合い、共に学び合う児童の育成～ことばの力を育てる～

豊岡市立福住小学校 教諭 河本 澄 田仲 渉 勝地 香苗

庄司 知樹 安原 奈美 松岡 勝美 …………… 30

新聞から人々の思いを読み取ろう～読む・考える・伝える～

淡路市立中田小学校 教諭 坂田 裕治 …………… 34

「考える力」を伸ばす授業づくりに向けた新聞活用の効果を探る

～学習に活かす新聞の幅広い活用場面とは～

たつの市立小宅小学校 教諭 石堂 裕 …………… 38

【中学校】

授業における効果的な新聞の活用について

神戸市立鈴蘭台中学校 教諭 米谷 浩実 …………… 44

新聞に親しむことから～新聞から世界を広げる～

尼崎市立南武庫之荘中学校 教諭 中嶋 勝 …………… 48

N I E実践校2年目の新聞を活用した様々な取組

明石市立野々池中学校 教諭 奥内 正浩 …………… 52

授業への効果的な新聞活用

神戸市立夢野中学校 教諭 山本 泰 ……56

新聞を活用した多様な学習活動の展開

須磨学園中学校 常勤講師 吉田 勝司 ……60

新聞を活用して 思考力・判断力・表現力を育てる

姫路市立白鷺中学校 教諭 佐伯奈津子 ……64

自分で考え、自分の意志で行動できる生徒の育成

～「伝え合う」力の育成を通して、「学びに向かう集団づくり」～

加西市立泉中学校 主幹教諭 山田 明 ……68

新聞のもつ力を様々な活動に活かす

高砂市立高砂中学校 校長 神尾 信作 ……72

【中学・高等学校】

N I Eを通じて、中高生の社会への興味・関心を高め、学力を身につける

武庫川女子大附属中学高等学校 教諭 田村 肅 ……78

新聞記事から討論テーマを探し、憲法を学ぶ

甲子園学院中学高等学校 教諭 鎌田 隆 ……82

【高等学校】

新聞を活用して「書く」力を身につける～読み手に伝わる文章を書くために～

県立柏原高等学校 教諭 北川 昌生 ……88

新聞を活用した総合的な学習の時間「探究入門」の取組

～対話と熟議による言語運用能力の向上と科学的リテラシーの育成～

県立三田祥雲館高等学校 教諭 宮下 巨樹 ……92

学校設定科目・特別活動における新聞を使った授業の実践

県立氷上西高等学校 教諭 能地 敬典 ……96

新聞を読んで「自分と社会をつなぐ」

県立武庫荘総合高等学校 教諭 川村 道雄 ……100

【大学】

新聞を通して社会とつながり、主体的に考える力を育てる

～大学での初年次教育での取り組み～

神戸山手大学 准教授 飯嶋 香織 ……106

新聞を身近な学習材に～大学におけるN I E活動の可能性～

関西国際大学 准教授 中西 一彦 ……110

【2011年度兵庫県NIE実践指定校】

規定枠19校、奨励枠4校、独自枠2校 計25校

(◆は継続校 ◇は新規校)

<規定枠>小学校7校

◆神戸市立本山第二小学校	神戸市東灘区
◆西宮市立南甲子園小学校	西宮市南甲子園
◆小野市立下東条小学校	小野市小田町
◆宍粟市立三方小学校	宍粟市一宮町
◇神戸市立成徳小学校	神戸市灘区
◇加古川市立陵北小学校	加古川市新神野
◇豊岡市立福住小学校	豊岡市出石町

<規定枠>中学校7校

◆神戸市立鈴蘭台中学校	神戸市北区
◆尼崎市立南武庫之荘中学校	尼崎市南武庫之荘
◆明石市立野々池中学校	明石市沢野
◇神戸市立夢野中学校	神戸市兵庫区
◇須磨学園中学校	神戸市須磨区
◇姫路市立白鷺中学校	姫路市本町
◇加西市立泉中学校	加西市満久町

<規定枠>中学・高等学校一貫2校

◆武庫川女子大附属中学・高等学校	西宮市枝川町
◇甲子園学院中学・高等学校	西宮市瓦林町

<規定枠>高等学校3校

◆兵庫県立柏原高等学校	丹波市柏原町
◇兵庫県立三田祥雲館高等学校	三田市学園
◇兵庫県立氷上西高等学校	丹波市青垣町

<奨励枠>小学校2校、中学校1校、高等学校1校

◆淡路市立中田小学校	淡路市中田
◆たつの市立小宅小学校	たつの市龍野町
◆高砂市立高砂中学校	高砂市高砂町
◆兵庫県立武庫荘総合高等学校	尼崎市武庫之荘

<兵庫県独自枠>大学2校

◇神戸山手大学	神戸市中央区
◇関西国際大学	尼崎市潮江

【 小 学 校 】

「研究テーマ」

自分の命は自分で守る ～「津波てんでんこ」新聞を通じて、東日本大震災から学ぶこと～

神戸市立本山第二小学校 教諭 木村清弘

1. はじめに

本校は、阪神淡路大震災によって大きな被害を受けた。校舎は全壊し、四人の児童の尊い命が失われた。

それ以来防災教育には力を入れており、毎年5年生は、11月に地域の方と一緒に防災学習運動会を実施している。

今年度は、防災学習運動会と前後して、総合的な学習の一環として、「自分たちの町は、自分たちで守る」を合い言葉に、災害に対して、どのように自分たちの町や自分の命を守っていくかを考え、調べ、まとめ、発表していった。

3月11日に起こった東日本大震災は、私たちにとって人ごとではなく、児童会である計画委員会を中心に、いち早く募金活動を行い、義捐金を日本赤十字社を通じて被災地に届けた。

新聞には、連日、東日本大震災のことが大きく取り上げられ、それらを読む度に、何かを子どもたちに伝えていかねばという思いが教師の間でも広がっていった。

2. 東日本大震災の何を伝えるか

教師として、「子どもたちに一番伝えたいことーそれは何か？」を考えた時、「命の尊さ」であると考えた。「命は尊い」ということは、誰にでも分かることである。

それでは、その大切な命を守るためには、

具体的にどう考え、どう行動すればいいのかを新聞を活用して考えていきたいと思った。

今回の東日本大震災では、阪神淡路大震災の3倍近い、約2万人にもものぼる死者・行方不明者が出ている。

何故、これほどまでに犠牲者が出たのか？東日本大震災の場合は、阪神淡路大震災と違い、地震そのものよりも、その後に襲ってきた津波による被害の方が甚大であった。

伊永勉災害研究所所長は、被害が大きかった要因の一番大きかったこととして、「逃げる意識」の問題を挙げている。

地震発生から津波が来るまでに30分～1時間はあったのだが、地震の片付けをしたり、大事なものを家に取りに帰ったりしているうちに津波に襲われ、亡くなった方が非常に多かった。

この逃げる意識の違いの象徴的な例が、児童・生徒から一人の犠牲者も出さなかった「釜石の奇跡」である。

3. 「釜石の奇跡」から学ぶ

児童・生徒から一人も犠牲者を出さなかった「釜石の奇跡」は大きな反響を呼び、9月には大阪市が、10月には文部科学省が避難時におけるモデルケースとして推奨するようにまでなった。

この「釜石の奇跡」は何故おこったのか、ここに簡単に説明しておきたい。

①まず、釜石市教育委員会と埼玉大学とが連携をし、8年前から地震や津波に対してのきめ細やかな教育カリキュラムを作成し、実践をしていた(このことは案外知られていない)。

②その内容であるが、理論と実践とに分かれる。理論編では「津波は何故起きるのか」「津波の速度は」「津波が発生したらどうしたらいいのか」といった内容であり、実践編では「津波てんでんこ」、つまり「津波の際には、てんでに(各自で)逃げて、命を守るべし」という避難スタイルをとることである。

昔から津波に襲われてきた三陸海岸沿岸では、「たとえ子どもであっても、親、兄弟にかまわず、地震が起こったら、自分一人だけでいいから、ともかく逃げろ」即ち「津波てんでんこ」の教えが生活の知恵として根強く伝承されていた。

この「津波てんでんこ」の教えを釜石では、市をあげて強力に推し進めていったのである。

結果としてどんな子どもが育ったかという

と、

- 自分の命を大切に子ども

- 状況判断ができる子ども

- 実践力が伴う子ども

が育ったのである。

こうした力が育った子どもたちが、犠牲者を一人も出さない「釜石の奇跡」を生み出したのである。

4. 「釜石の奇跡」と新聞報道

この「釜石の奇跡」を大きく取り上げたのが平成23年8月12日付の毎日新聞の朝刊である。「検証 大地震」と題して2頁にわたり特集記事を組んでいる。

この記事の特徴は、

「地震発生から津波襲来、子どもたちの判断で次から次へと逃げる様子を、マップや証言、写真を入れ混せて、タイムテーブル的に要領よくまとめている。」ことである。

小学校で新聞を学習に生かせないのは、未習漢字が多く、内容を把握できないことが大きな要因である。

しかしこの記事の場合は、リード文を手際よく紹介し、マップや写真を拡大するなどして教師が支援をすれば、子どもたちは内容が理解できるし、逆に「釜石の奇跡」を教えるのに、これほど最適な教材はないと言えるものである。

「釜石の奇跡」を取材したテレビ番組「津波てんでんこ」(日本テレビ7月25日放映NNドキュメント'11)との併用で、子どもたちの理解も深まり、「自分の命は、自分で守る」というテーマに迫れると考えた。

5. 授業化にあたって

授業をするにあたって、次のことを考えた。

(1) 単元構想

津波の怖さをほとんどといっていいほど知らない子どもの実態から考えて、いきなり「釜石の奇跡」から授業に入っても、一部の子どもしか興味関心を示さないことは明白である。

そこで、実際の授業では次のような流れを構想した。

①まず阪神淡路大震災と東日本大震災を比較する中で、東日本大震災の被害が広範囲にわたること及び津波の被害が大きいことを意識させる。

②国語の教科書に掲載されている「稲むらの火」を取り上げる。

- ③一枚の写真から津波の怖さを話し合う。
- ④津波警報での実際の避難率を予測させる。
- ⑤子どもの犠牲者が全く出なかった「釜石の奇跡」について学習する。

(2) 授業をする上での仕組み

授業をするに当たって、子どもが核心に徐々に迫っていくよう関連事項を配置し、その中で新聞を有効に活用していくようにした。

授業は道徳と総合とのクロス学習で考え、時数は道徳2時間、総合2時間、計4時間とした。

新聞に掲載されている写真やマップ、記事は画像化し、SDカードに取り込み、50インチの大型プラズマテレビで映し出した。

こうすることで、授業を焦点化し、子どもが一目で見て理解できるようにした。

6. 授業の実際

ここでは、新聞を活用した場面に絞って、実際の授業について述べていくこととする。

①阪神淡路大震災が都市部の災害であったのに対し、東日本大震災が広範囲にわたる災害であったことを子どもたちに理解させるため、3月17日付の神戸新聞の被害状況マップを見せた。

太平洋沿岸500kmにわたる被害に子どもたちは、あらためて地震の規模の大きさを感じるとともに、神戸の地震との違いを理解していった。

②「稲むらの火」モデル浜口梧陵については、国語の教科書で学習している。

そこで授業ではNHKの番組「お話の国」の「稲むらの火」を視聴し、五兵衛(梧陵)の行動について話し合った後、4月25日付朝日新聞の記事「広八幡神社」と10月16日

付毎日新聞の「稲むらの火 今こそ」という記事をコピーしたものを配布し、ノートに貼り付けさせた。

この記事によって、国語で学習したことやテレビで視聴した話が、150年経った今でも、梧陵の地元広川町で、実際の生活に生きているという実感を子どもたちは持った。

新聞は、取材し、「今」を伝えるリアリティーを持つ媒体であることが、子どもたちの反応や感想からよく分かった。

③次に地震直後の3月12日、毎日新聞朝刊に掲載された、津波が押し迫ってくる写真をもとに学習を進めていった。(2011年度新聞協会賞を獲得した写真である。)

この写真は、津波に飲み込まれた木々と、これから飲み込まれるであろう家々や車を冷酷なまでに映し出している。

子どもたち一人ひとりにカラー印刷をして配り、感じたことを書かせた。これによって子どもたちは、津波のこわさを徐々に実感として持つようになってきた。

④次に、東日本大震災発生時の実際の避難率を子どもに予想させた。

ここでは、神戸新聞4月18日付の夕刊のトップ記事を使った。

「発生当日 太平洋沿岸6県調査」と題して「津波警報でも避難者□%台」のリード文を大型テレビで映し出した。

ほとんどの子どもが30%台以上と予想していたが、□に入る数字が「2」と知るとどよめきが起きた。

津波の怖さをある程度学習している子どもたちにとっては震災当日の避難者2%台というのは、信じがたい数字であったようである。

新聞のこうした調査は、人々の防災意識の

無さを浮き彫りにするものであり、教育用語が言うところの「概念崩し」の役割を担う。

この学習を通して子どもたちが、「釜石の奇跡」の意味を考えていく素地ができた。

⑤「釜石の奇跡」学習するにあたっては、まず子どもたちに、「津波てんでんこ」の意味について考えさせた。

次に「津波てんでんこ」のDVDを視聴した。このDVDの中に登場する津波への心構えを説く5人組の戦隊ヒーロー「てんでんこレンジャー」は文部科学省の防災教育支援事業のモデル地域に指定された釜石東中が作成したもので、「津波てんでんこ」の精神を分かりやすく子どもたちに伝えている。

DVD視聴後、新聞のマップや証言をもとに、子どもたちが逃げた経路を時間を追って、みんなで確認していった。

子どもたちは、

①中学生が走る姿を見て、校舎の3階に避難していた小学生も一緒について走り出す姿を見て、「すごいなあ。」という感想を口々に話していた。

②校長が不在のため、副校長が「すぐに走れ。」と生徒、教師に指示。一番若い先生に「率先避難者となって走り出してほしい。」と頼んだことを知ると、子どもたちは、「津波てんでんこ」の意味をようやく理解していった。

③最初の避難所であるグループホームが危ないとみるや次から次へと避難場所を臨機応変に素早く判断し、移動する姿に子どもたちは感銘を受けていた。

授業の最後に、どうして先生も子どもも一丸となって、ひたすら逃げることができたのかをみんなで考えた。

子どもたちは、「日頃の訓練や学習があった

のではないか。」ということを感じ取り、積極的に発表していった。そして、「自分の命は、自分で守る」ことの具体的なイメージを一人ひとりが持っていった。

7. 授業を終えて

釜石プランを8年間にわたって支えてきた埼玉大学の片田敏孝教授はこう言っている。

「世間では『釜石の奇跡』と言われているが、釜石の子どもたちは、『釜石の実績』と呼んでいる。

なぜなら、それだけの学習を積み重ねてきたし、それだけの訓練をしてきたからです。私は、『災害ごときで、人は死んではならない』と常々言っています。『災害ごとき』と言うのは、地震や津波が起きるのは仕方ありませんが、それに対する備えを日々していれば、命は助かるのです。釜石の子どもたちが、それを証明しています。」

奇跡と呼ばれる裏には、周到な準備と、訓練があったことを、この言は示している。

今回の震災は、私たち日本人が、今後どのように災害に向き合うか新しい決断を迫っているようにも思えるが、釜石の奇跡から私たちが学ぶべきことは多い。

新聞は、日々被災地の情報を伝えてくれている。その情報を取捨選択し、それを分かりやすく子どもたちに伝えていくことで、子どもたちは、教科書にはない生きた学習をすることができる。

新聞を活用していくことで、授業が活性化し、子どもの学びがより深く広くなっていくことを今回の実践で感じる事ができた。

最後になるが、今後さらに研究を進め、よりよい授業を実践していきたいと願っている。

「研究テーマ」

新聞を活用して、たがいにつながりあう子をめざして ～受信する力・活用する力・発信する力を育てる～

西宮市立南甲子園小学校 教諭 井上敏雄

1. はじめに

本校では、～「学ぶ喜び」を味わえる授業の創造～という研究テーマを基に、その大きな柱として「表現力を高める」ことを大切に教育実践を行っている。

自分の考えを発表し合い、友だちの意見をしっかり聞いて自分の考えを練り上げ、より良い表現方法で伝えることは、今後、特に求められる力であると信じるからである。

また、本年度の学習指導要領改訂に伴い、国語科では、新聞記事を通して情報伝達の重要さと工夫に目が向けられていることもあり、本校では、昨年度に引き続き2011年度もNIE事業に参加し、6年生児童を対象に、新聞に親しみ、表現する力を高めることを目的とした各種活動に取り組んだ。

2. 実践の概要

①総合（1学期）：『ヒロシマを伝えよう』

〈ポスター型新聞・個人〉

修学旅行で訪れた広島で学んだことや感じたことを、事前に行った平和教育で得た内容をもとに、5年生に、ポスター形式の

記事で伝えた。「何を知り、何を感じ、何を考えたか。」を「どう伝えるか？」を意識することで、相手にわかりやすい記事を書いたり、効果的な資料を集めて編集したりできた。

②国語科：『新聞記事から意見の違いを読み取ろう』

〈新聞投書欄型記事作り・個人〉

教科書に載っている投書欄の二つの立場の記事を読み取り、どちらの意見も有意性のあることを知り、自分の意見を投書で参加するという形で記事を書いた。自分の意見を読者はどう読むかという想像力を働かせながらの作文は、書きっぱなしではなく、客観的に見直しをして、練り上げることの重要性を感じた。

また、発展として、「運動会では、リレーがよいか徒競走がよいか」など、身近で、どちらもあり得るテーマで、紙面討論をした。口頭による討論会では、意見を持ちながらも発表するのが苦手という児童も、紙面であれば堂々と論理性を発揮できるため、「新聞の投書欄を読むようになった。」などの感想を持った子達も多かった。



【神戸新聞 2011.11.20 朝刊 14/15 教育面より】

③理科・社会科：『学習を新聞でまとめよう』
〈学習まとめ新聞・個人〉

本校では、6年生に教科担任制を導入して10年が経つ。4クラスの担任が4教科を分担するという形で始まったが、研究・実践の末、最近では、算数は新学習システムの教師が入り、同室複数または少人数による授業を行い、4人の担任は理科と社会を2クラスで交換するという形に落ち着いてきた。

学年に理科担当が2名、社会科担当が2名いることになり、それぞれが創意を工夫する点と、情報を交換しながら、足並みをそろえていく点を明らかにすることが重要になる。その1つとして、単元ごとの学習のまとめを両教科とも、できるだけ新聞形式にして児童に作らせるようにした。教室に掲示することで学習の定着を確実なものとするとともに、各学級の学習ぶりがうかがえるものとして有用だった。

そして、掲示することは、人の目を意識

することであり、内容・表現とも意欲的に取り組むことができた。また、継続的に新聞づくりをすることで、レイアウトや色づかい等の表現力がどんどん高まった。

N I E活動に参加した縁で、神戸新聞社の『週刊まなびー』の紙面に代表児童の新聞を掲載していただいた。このことは、児童みんなが自分たちの学習活動が評価され、新聞づくりの値打ちをあらためて感じることでできて、非常にありがたい効果をもたらした。自分たちが当たり前に行っていることが、実はすごいことだよと知らされることは、何よりのモチベーションとなることが実感できた。

④総合（2学期）：『つながり合う社会をめざして(福祉)』

〈模造紙壁新聞・5~6人班〉

「みんなが住みやすい社会にするために、自分たちができることを考えよう」という投げかけから、体の不自由な人やお年寄り

に寄り添う活動を考えた。そのため近隣のデイサービスセンターを訪問し、お年寄りと遊んだり話をする中で、困っていることや願いを聞いた。また、センターの職員の方にインタビューすることで、その仕事の大変さと大切さを学んだ。活動から得た情報と思いを、班で出し合い、分担・協力して1枚の壁新聞としてまとめた。自分たちで取材した記事であるため、取材相手を気遣い、ていねいに扱おうという意識があったように思われる。

⑤総合（2学期）：『私が見つけた新聞記事を紹介します』

〈ニュース原稿風記事作り・個人〉

今年度のN I E活動のメインとなる活動である。7月から6紙朝夕刊が学校に届き、身近に新聞に触れる機会が格段に増えた。初めは、教室内に新聞を置き、どんどん読み、新聞に慣れることに重点を置いた。ただ、新聞に対する興味も個人差が大きかった。そこで、一人1つの記事を新聞から選び、それをニュースキャスター風にみんなに紹介する活動を企画した。

たくさんの記事の中から、自分が伝えたいものを選ぶというのは、案外難しく、また楽しい活動であり、新聞の読み方が格段に熱心になった。「なぜその記事を選んだのか。」「伝えたいことがらは何なのか。」「その記事を読んで、自分は何を思ったのか。」を必ず入れ込み記事にするようにした。

児童は、とまどいながらも、6年生なりの社会性を発揮し、正確にわかりやすく伝

えようと、テレビのニュース番組の構成や、アナウンサーの読み方などにも注目するようになった。

一つの記事から、記事の内容はもちろんのこと、取材された人の思いと、取材した記者の思いも感じる事ができた子も多かった。





残念だったのは、「お昼の放送・今週の出来事」として全校にテレビ放送しようという構想を持っていたが、時間的にできなかったことだ。

3. おわりに

NIE活動に取り組んでみて、全世界的な政治経済の動き・日本国内の重大事件・スポーツなどの興味のある出来事だけではなく、新聞には、地方の人々の活動や、個人の思いを表した投書欄などいろいろな情報が詰まっており、それを伝える記者と、印刷・配送に携わる人々の手によって伝えられていることが実感できた。

そして、発信者である新聞やメディアの情報を、受信者としての自分たちがどう受け止めるか、そして、その情報を次に伝える発信者になることで、社会の動きや人々の

思いに興味を持つことができたようだ。

もう一つの効用として、神戸新聞社に学習新聞以降も、「小学生のホンネ」に、自分のエピソードをプロの漫画家に、作品としていただいたり、ニックネームで登場させてもらったりしてずいぶん盛り上がった。関連して、西宮市の情報誌「宮っ子」にも、NIE活動の様子を写真入りで掲載してもらったりしたことで、受信者であり発信者であることを現実的に感じる事ができ、大げさに言えば、自尊感情が高まったようだ。

課題として、学校教育の中での情報教育・メディアリテラシーの重要性と取り組むための環境の整備不足が挙げられる。新聞を定期購読していない家庭も増え、テレビやインターネットなどの音声・画像の取っつきやすいメディアと、読み解きは難しいが、深く知り、保存加工のしやすい紙媒体の両方の良さや扱い方は、発達段階に応じて教育課程の中で位置づけ、環境も整えていくのも、これからの学校に求められることだと感じた。



新聞に親しみ、伝え合う子の育成

小野市立下東条小学校 教諭 下山 晃宜

1. はじめに

本校では平成22年度よりNIE実践校の指定を受け、取り組みを進めてきた。昨年度より図書室に新聞コーナーが設置され、子どもたちにとって新聞が身近に感じられる環境ができつつある。そのような中で今年度は「新聞に親しみ、伝え合う子の育成」を目指してNIEに取り組んだ。

2. 実践の概要

昨年度と同様に、4年生の児童を対象にNIEに取り組んだ。

4年生の児童は低学年の頃から読書に親しんでおり、文を読むことが好きな児童が多い。また、



総合的な学習の時間や社会科のまとめを新聞形式で行ってきている経験から、新聞作りを好む児童も多い。

このような児童の実態から、今年度は新聞を読む活動から、作る活動へとつなげていき

たいと考えた。

①身近な新聞記事を読んでみよう

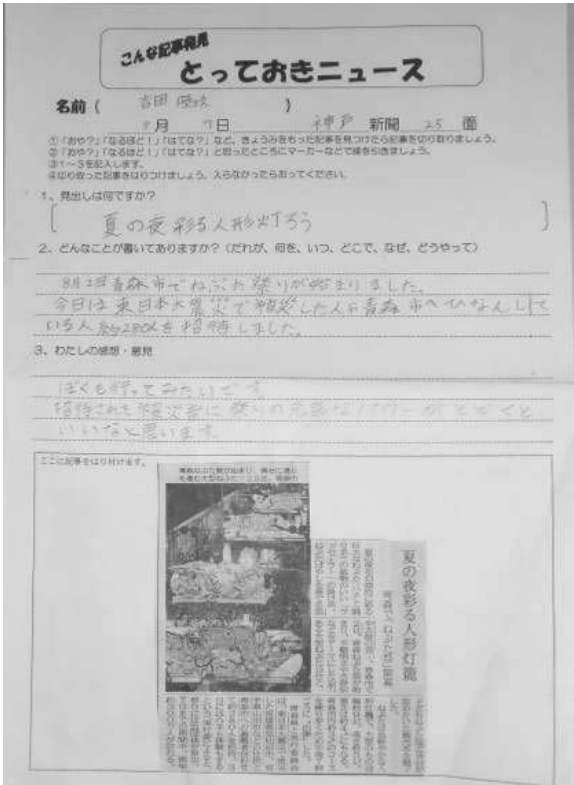
前述したように、昨年度より図書室に新聞コーナーが設置され、新聞に親しみやすい環境が作られた。読書が好きな児童も多いことから、図書室の利用率も高い。しかし、いざ新聞を読むとなると、「漢字が読めない」「言葉の意味がわからない」と敬遠しがちであることがわかった。さらに新聞を購読していない家庭が4年生児童の約20%いることもわかった。このように新聞離れが進んでいる現状をうけ、まずは新聞にふれる活動から始めた。

まずは自分たちの地域に関する記事や、学習に関連する内容などの子どもたちが興味を持って読めそうな記事を教師が選んで配布し読むことから始めた。

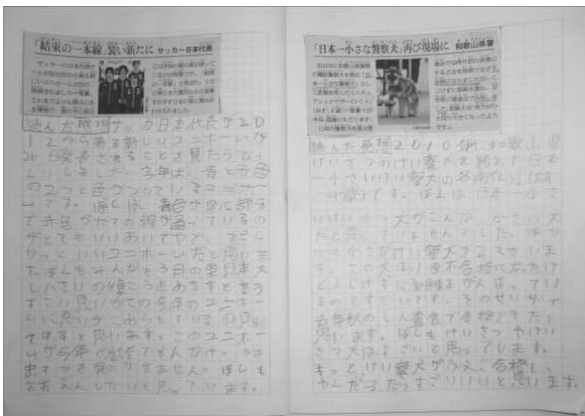
②新聞記事を紹介しよう

自分が興味を持った記事を友達に紹介する活動を行った。毎週1枚「とっておきニュース」と題して、気に入った記事を貼り付け、その記事を選んだ理由や記事が伝えたいこと、感想をまとめていった。順番に発表していく

中で、子どもたちが多くの新聞記事にふれることができた。



また、とっておきニュース以外にも自主的に新聞の切り抜きをノートに張り、まとめてくる児童もでてきた。



③ 新聞感想文を書こう

新聞記事を紹介する活動の延長として、新聞感想文コンクールに応募するための感想文作成に取り組んだ。

東日本大震災が発生してまだ日が浅かったこともあり、震災や節電に関連する記事を選

ぶ児童が多くいた。事前の取組みの成果か、作文を苦手としている児童も、熱心に取り組んでいたように思われた。また、記事の感想だけでなく、家族で話したことや家庭で取り組んでいること、自分の思いなどを表現できる児童も出てきたことは大きな進歩であった。また、一つの記事にじっくりと向き合うことができたことも良い経験となった。

④ 新聞記者から新聞作りを学ぼう

朝日新聞社西脇支局長の燧正典記者をお招きし、新聞を作成する過程や工夫、新聞の良さやおもしろさなどを教えていただいた。



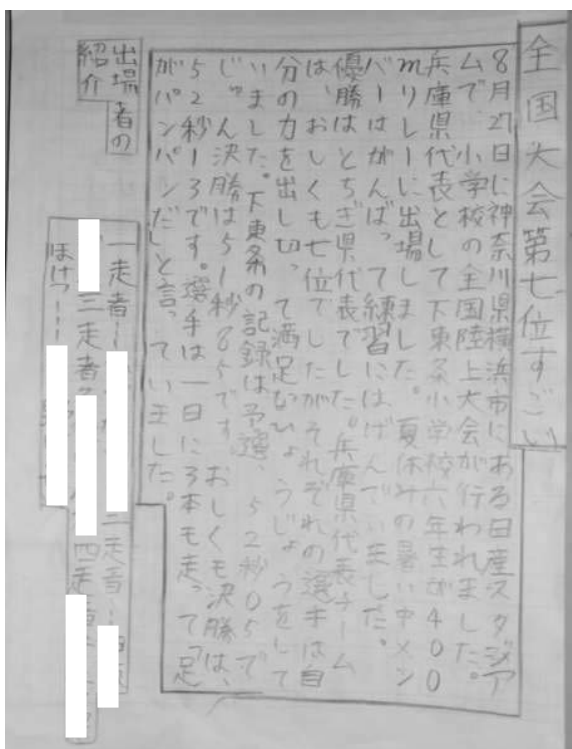
新聞記事を作成するうえで大切なことは次のとおりである。

- (1) 一面にはトップニュースを
- (2) 記事に見出しをつける
 - ・ 10文字以内で
 - ・ 言いたいことを簡潔に
 - ・ 見出しの字体や文字飾りを記事によって変える
- (3) 5W1Hを必ず入れる
- (4) 間違いがないように読み返す

- ・たくさんの人が読む新聞に間違いがあ
ってはいけない

実際に新聞を見ながら、子どもたちにもわかる言葉で丁寧に指導していただいた。

学習のまとめとして、教えていただいたことを生かして、本校6年生が出場した小学生陸上競技の全国大会を題材に記事を書いた。



児童が付けた見出しの例

- ・力を一つに！全国7位
- ・6年生 全国大会に
- ・横浜で全国大会☆

- ・下東条 全国7位
- ・全国7位に！先生「ほっとした」

児童の感想

・私は、燧さんのお話を聞いて新聞がとてもおもしろそうに思ったので、帰ってすぐに読みました。面白い記事もありました。これまでは全然読まなかったけど、新聞はすごくいいなと思いました。

・新聞の良いところは、テレビよりも詳しいことがわかることです。サッカーの試合だと、交代した選手やイエローカードをもらった選手が誰かなどまでわかります。燧さんのお話を聞いて新聞のことがよくわかりました。

・テレビのニュースだと放送される時間は少しだけで、見逃してしまうこともあります。新聞はいつでもどこでも好きなだけ読めます。新聞は、新聞記者の方が心をこめて作られていることがわかりました。

(一部抜粋)

新聞製作の過程などを説明するDVDを見てもうっ
た後、燧記者が見出しの付
け方などについて説明。
「しつもんドローえもん」
の記事の実際の紙面や、女
性アイドルグループが登場
する記事などを示し、「新

NIE
教育に新聞を

「教育に新聞を」(NIE)の活動に
取り組む県NIE推進協議
会の記者派遣
事業で、朝日新聞西脇支局
の燧正典記者が1日、小野
市小田町の市立下東条小学
校の4年生約50人に講演し
た。

**小野・下東条小で
記者の仕事紹介**

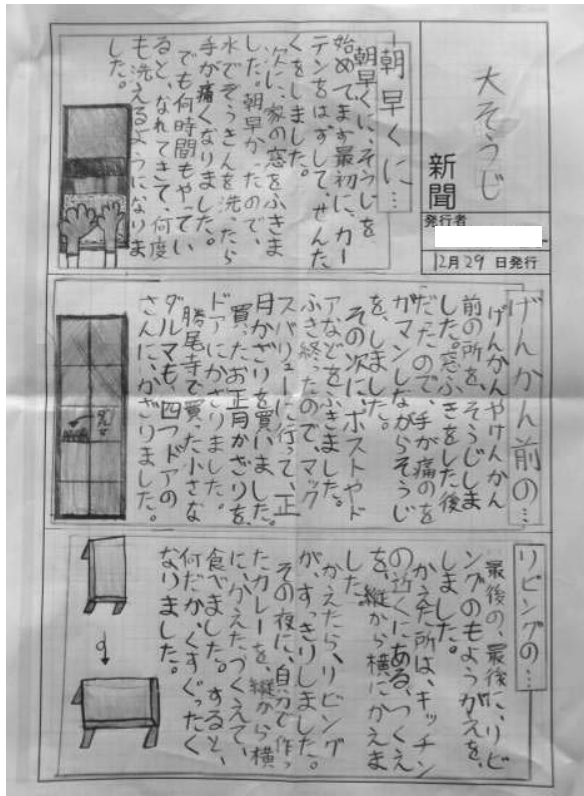
「児童から「有名人と会
ったことありますか」
「取材で一番心に残ったこ
とは」などと熱心な質問が
相次いだ。

⑤ 新聞を書こう

新聞記者の方に新聞づくりのポイントを教わってから、子どもたちの新聞づくりの取組みが生き生きと、そして内容も充実したものへと変わっていった。

○冬休み新聞

冬休みの出来事を紹介する冬休み新聞を作成した。絵や写真、旅行先のパンフレットを貼り付けるなどの工夫がみられ、楽しい様子が伝わるものが多くあった。

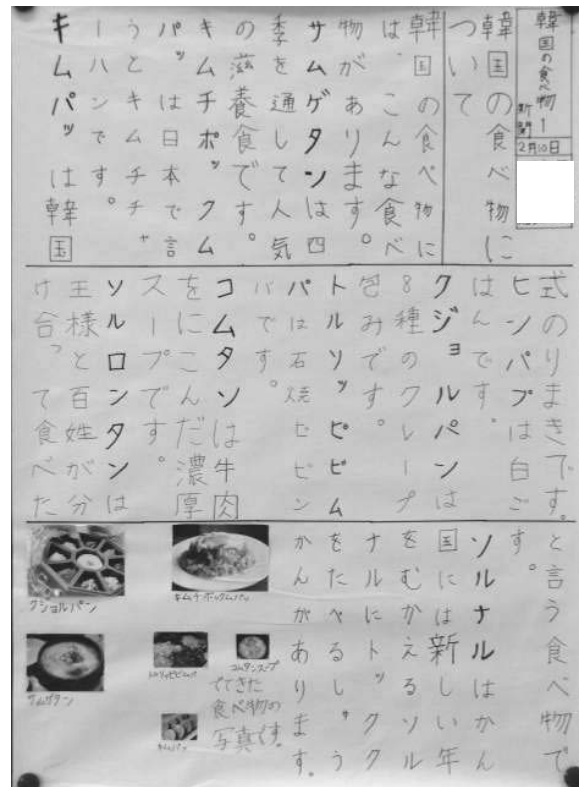


○韓国新聞

韓国釜山市の書鳴初等学校の児童が本校を訪問し、児童交流を行った。その際、簡単な韓国語を勉強したことをきっかけに、韓国についてもっと調べたい、知りたいという意見が児童から多く寄せられた。調べたことを壁新聞にまとめ、発表する活動を行った。

3. 成果と課題

2年間の取り組みをとおして、新聞を身近なものとして感じられるような環境づくり、授業づくりに努めてきた。その結果、新聞へ抵



抗を感じる児童は確実に少なくなっている。また、新聞を目にする機会が増えたことによって、自分を取り巻く社会の様子に気づいたり、関心が広がったりしていることも感じられた。しかし、読み取るという点においてはまだまだ課題が残った。

繰り返し取り組んできた新聞づくりでは、あちこちから「見出し何にする?」「最後は読み直さなアカンで。」など、学習してきたことを生かそうとする姿がみられた。

まだまだNIEの一端に触れただけであったが、その教育効果、可能性は多大なものであった。今後も言語活動の充実を目指し、伝え合う力を伸ばすため、新聞を活用した取り組みを継続していきたい。

新聞を活かし、自分に生かそう

～社会とつながり、人に出会える NIE～

宍粟市立 三方小学校 教諭 西村一郎

はじめに

本年度も「新聞っておもしろいやん」を体感させることを基本に、それぞれの教師が、クラスの実態や伸ばしたい力などを考慮し、継続と進展を意識しながら、NIEの実践に取り組んだ。

【校内研修】

今年度「言語活動の充実」を図る授業づくりを重点目標の1つとし、その中でNIEを柱にした教育実践の方向性を確かめた。

2年目のNIEの研究を進めていくのには、教師個々の創造性や実践力はもちろんのこと、多くの実践から学ぶことが大切である。そこで、研修の資料として以下のものを購入・紹介・作成し、研修資料として活用した。

『新聞活用の工夫 提案—NIEガイドブック小学校編』（日本新聞協会）

『NIE実践報告集』（県NIE推進協議会事務局）

『NIE実践アイデア集』（自主編集）

『学習指導要領とNIE』（自主編集）

さらに、兵庫県のNIE特任アドバイザーの平山順一先生を講師に招いて校内研修会を開き、これまでの実践を検証するとともに、今後のNIEの方向付けを行うことができた。



【1年生】

◆カタカナ探し◆

カタカナを学習した後、新聞からカタカナ探しをした。赤の○で囲み、ノートに書き写した。



◆4コマ漫画並べ替え◆

切り離したコマを並べ替え、起承転結のストーリーを作成する学習活動に取り組んだ。その後「どうしてそう並べたのか」について話し合った。難しいと感じる児童もいたが「楽しかった」「またやりたい」という感想が多く、次につながる学習活動となった。

【2年生】

◆新出漢字探し◆

新聞を使って「新出漢字探し」を実施した。この日学習した漢字は「国」「通」「新」「当」「明」「組」「間」「強」の8字。新聞を教室いっぱい広げて新出漢字を探した。

学習後、「もっとやってみたい」と新聞を持ち帰ったり、学校の新聞をじっと眺めたりする児童が見られるようになった。漢字から新聞に興味を向けられたように見受けられる。

◆動物クイズ◆

新聞から動物の写真を探し、記事や図鑑などを参考に動物クイズ



を作り「動物クイズ大会」へとつなげていった。クイズを作るためには、文章（記事）を読み取った上で自分で組み立てる必要があり、その過程が、子ども達にとっては楽しく、学びのある内容となった。

【3年生】

◆新出漢字探し◆

1学期末に行った時には、80字を越える漢字を小さく印刷し、黒板に貼り、見つけた漢字を取り除くというルールで取り組んだ。

児童「先生～“丁”が全然見つかりません」
教師「どこどこ何丁目って聞いたことない？」

丁って漢字は丁目の丁やで」

児童「あっ、住所や！」



“その漢字が含まれそうな文章や記事の種類”を連想できればいいのだが、3年生の児童にとってはハードルが高かったようだ。

◆新聞記事の紹介◆

子ども達が選んだ「花火師」「津波から命を守った」「たんこぶ」「パンを作る」の4つの紙面の内容を紹介することにした。「質問があっても、答えられるようにしよう」と伝えたので、子ども達は、読むだけじゃだめだという気持ちになってくれたようだった。



◆4コマ漫画を使って◆

新聞に掲載されている4コマ漫画を使った表現力（言葉）を豊かにする学習活動に取り組んだ。4コマ目の吹き出しを隠し、そこに会話文を入れる内容である。

- ①「節電もしかたがないね」
- ②「街の中が暗いのはさみしけどね」
「まあね」
- ③「でも、いい事もあるよ」
「何？」
- ④「
」
「それはいいね」

◆児童の考えた吹き出し（セリフ）

A 児	節電をすると、暗くなってお星様がよく見えるからだよ。
B 児	お化け屋敷ができるから、みんなを怖がらせるからさ。
C 児	花火をしたら、きれいでいいんじゃないの。

【4年生】

◆切り抜きコメント◆

4年生では、新聞はすべて5W1Hで内容が書かれていることから、国語の学習ともリンクさせて記事の要点を読み取ることを試みた。まず今年話題となった記事を教師がピックアップして、児童に、各紙より情報収集してワークシートにまとめさせていった。

このような取り組みの中で、家から記事を切り抜いてくるなど、新聞に興味を持って読んでみようといった児童も育っている。



◆都道府県探し◆

- ①今年新聞記事から都道府県のローカルニュースが載っている記事を探す。
- ②記事の見出しや概要をメモ用紙に書く。

③日本白地図にメモを都道府県ごとに貼り付け、どこの記事が多かったかを確かめる。



④今年のニュースの傾向を探る。



【5年生】

◆新聞スクラップ◆

新聞の中から、興味を持った記事を選び、切り抜き感想を書いた。

「写真が迫力があり、すごい一瞬をとらえているのに感心した。」

「昨日テレビのニュースでやっていた。」



◆説明文作り◆

国語科（説明文単元）の発展学習として、新聞記事からデータをピックアップし、記事を読み取った上で、分かりやすい解説を意識して説

項目	見られる (%)	ほとんど見られない (%)	変化
頭著に見られる	65.7	18.5	+5.9
〈新聞を進んで読む〉	0.9		
〈読む、書くことが増えた〉	1.4		
〈生き生きと学習する〉	2.1		
〈自分で調べる態度が身につく〉	1.6		
〈記事について友人・家族と話す〉	1.4		
〈新聞についての質問が増えた〉	1.4		
〈新聞活用に興味を示さない〉	14.6	59.7	+8.2
まったく見られない 無回答			

(2009年度「NIE効果測定調査」結果報告より)

明文を作成した。

◆スピーチ◆

世間の様子に関心を持つようになり、相づちを打ったり、補足したりするようになった。5W1Hを意識したスピーチ内容や豊かな感想発表になるように指導を重ねてきている。

◆自然学校新聞作り◆

自然学校の思い出を新聞風にまとめた。見出しや写真など割り付けも工夫した。全体的に見た目が美しく仕上がったので、子ども達はおおむね満足していた。

【6年生】

◆1分間スピーチ◆

社会の出来事に目を向ける習慣をつけること、人前で自分の考えを主張する能力をつけることを目的として取り組んだ。自分が日番でないときにも、関心を持って新聞を読み、ニュースを見ている児童も増えてきている。

◆討論会◆

新聞記事から引用したテーマについて、新聞記事を利用して調べた客観的事実を生かして自分の考えを深め、討論会を開いた。



調査をする時間や意見をまとめる時間の確保が十分に保障されれば、より議論が深まることになると感じた。

◆新聞記者派遣授業◆

読売新聞姫路支局長を迎えた授業は、東日本大震災に関係した新聞記事に小見出しをつける内容であった。

後日、子ども達からのお礼の手紙に答える形で、新聞の地域面に支局長の記事が掲載さ

れていた。



続

2011年(平成23年)11月28日(月)

教育に新聞を活用する「NIE」の一環で、穴粟市立三方小学校を訪れ、5、6年生を対象に新聞の構成や記事の書き方、見出しの付け方について出前授業をしました。真剣な表情で話を聞く子どもたちの表情に、こちらが照れくさくて舞い上がったように、理解してもらえないような授業ができたか不安でした。その子どもたちから心のこもった手紙が支局に届きました。

鷺の城の街で

「新聞の読み方、書き方が詳しくわかった」「最初の少しを読んだら、大体の内容が分かるからすごい」「新聞の秘密が分かって読むのが楽しくなった」「新聞を読んでいくなか、読んでみようかなと思うようになった」「つたない教え方だったにもかかわらず、子どもたちのさまざまな感想や意見が伝わっており、理解してくれたいと勝手に解釈させていたが、授業は、東日本大震災の被災地の小学校で給食に副菜が加わり、すべてそろうた給食が再開されたことを伝えたい記事を読みました。子どもたちの見出しのセンスの良さに驚かされました。実際の見出しは「給食 完全再開。子どもたちは「笑顔の給食復活」「戻った味と笑顔……と、同じ世代の子どもたちの気持ちになって考え、思いやる心がもった見出しだと感じました。」「子どもたちの手紙の最後には、「貴重な体験をありがとうございました」と、お礼や激励も書いてくれていました。いえいえ、こちらこそ教壇に立たせてもらい、新聞の使命に加え、分かりやすく伝える努力を借しなくてはならないことを改めて学ばせてもらいました。ありがとうございました。」(姫路支局長 田辺貴司)

児童から学び 初心に戻る

◆被災地に届け◆

新聞で被災地にぞうきんを届けるといふ記事を見つけ、家庭科の時間に、持ち寄ったタオルでぞうきんを縫い、被災地に届けた。



児童の感想

・毎日ニュースで被災地の事が流れていて、ぎえん金は送ったけど、他に何かできることはないかと考えて、ぞうきんを送れるということが分かり、うれしかったです。私たちは被災しなかったけど、同じ日本人たちが被災しているから、少しでも役に立てたらいいなと思ってぬいました。人の役に立つことは本当に大切だと思うから、こういう機会があったら、またやりたいです。

おわりに

実践を重ねる中で強く感じるようになってきたことがある。それは、NIEの系統性や構築性を練り上げていくことも大事だが、学習指導の過程の中で、「ここは新聞を使えるな」とか「この記事はあの単元の授業で使えそうだ」と目を付け、教材としてストックしておこうとする教師の心構えが大事なことである。

それは、特別難しいことではなく、自宅や職員室に届く新聞を読むことから始めればよい。その際に“目の付け所”つまり、“新聞を教育に活かそう”とするセンサーを働かせておけばNIEはスタートすると実感した。

新聞は、情報の宝庫であり、記事を通して、子ども達が出会ったこともない人にスポットライトを当ててくれる。子ども達にとって未知の知識や人の生き様を学ばせてくれる。

そんな『可能性の宝庫』である新聞の魅力の一部しか味わっていない2年間だったが、言語活動の深化、発展を目指す本校教育に大きな支えとなったことに間違いはない。

新聞に親しもう

～ 各都道府県や世界の国々の記事を集めることを通して ～

神戸市立成徳小学校 教諭 宮本 譲

1. はじめに（テーマ設定の理由）

子どもたちが社会に目を向ける場面は非常に限定的である。芸能やスポーツなど、自分が興味や関心を持っていることについてはよく知っているけれど（それはそれで素晴らしいことだが）、政治や経済など、そうでないことについてはほとんど知らないということがある。

そして、それらの情報を、子どもたちは、ほとんどテレビやインターネットから得ており、新聞から情報を得ることはほとんどないと言ってよい。新聞は子どもたちにとって、それほど身近なものではないのである。

一方、子どもたちは、4年生のときに全国の都道府県について、その名前、位置について学習している。その学習が単なる暗記学習になることのないように、各都道府県の特産物を見つけたり、「何でも一番」というようにその都道府県の全国で一番なことを調べたりして興味や関心を持って学習を進めてきた。

しかし、それでも子どもたちの都道府県についての知識や理解は皮相的なものにすぎない。各都道府県の名前や位置にしても、あるプリントではできても、別のプリントで、問い方が変わるととたんにできなくなるなど、まだまだ本物の生きた知識や理解にまでなっていないのが実情である。

日本の都道府県でさえこういう状況なので、事が世界になると、その知識や理解についての現実是非常に厳しいものがある。オバマ大

統領のアメリカは知っていても、コアラの国のオーストラリアは知っていても、サッカーワールドカップを開催した南アフリカ（共和国）は知っていても、それらの国がどこにあるのか、地図で押さえられる子どもはほとんどいない。世界の国々の名前にしても、位置にしても知っていることは極めて限定的なものに過ぎない。また、それらの知識についての個人差は非常に大きいものがある。

社会に目を向ける姿勢にしても、地理的な知識にしても、もちろん、これらはあくまで総体的な話で、世の中のいろいろなことに興味、関心を持ち、多くの知識を吸収している子どももたくさんいる。5年生という年代は今までに得た知識や経験をもとにして、いろいろなことに興味、関心を持ち、自分の知識や理解を飛躍的に高め、深めていくのに適した年代だと思われる。大事ななのは、そのとっかかりやきっかけである。

5年生では、社会科の気候の学習や、農業・漁業・工業などの産業の学習、貿易や通信の学習で都道府県や世界の国々をより立体的に学習する場面がある。

それらに加え、NIEの実践指定校になった今年度、子どもたちのこのような実態を踏まえ、都道府県や世界の国々について、新聞の記事からおもしろいと思った、関心を持った記事を集め、時事的なことを詳しく見たり調べたりしていく中で、新聞そのものに興味や関心を持ち、各都道府県や世界の国々に、

より興味、関心を持ち、その知識や理解を深めていくことができたならなあと考えた。

また、本校では、自然学校でハチ高原（但馬地方）に行くので、但馬をよく知るためにそこを中心として、兵庫県の各地域（摂津・淡路・播磨・丹波・但馬）についても記事を集め、詳しく見たり調べたりしていくことにした。

2. 具体的なとりくみ

（1）学習計画

- 総合的な学習の時間（全15時間）

記事を集める

↓

記事をまとめる、詳しく調べる

↓

記事を読み取る、発表する

この学習サイクルを繰り返す

- 9月、10月、11月に新聞各紙を毎月2紙ずつ、1紙について4部ずつとる。
（4部は学級の数）

（2）学習のながれ

① 記事を集める

- 毎日の新聞から自分がおもしろいと思った、関心を持った各国、各都道府県の記事（事件、事故、トピックスなど）を見つけて専用のカードに書き、集めていく。

〈写真①②③④参照〉

- カードには次のことを書く。
月日・新聞名・朝刊か夕刊か・何面か・見出し・記事（切り貼り）・感想

- 書いたカードについて、個人持ちの日本地図、世界地図に記事に出た都道府県、国に色をぬって位置や場所を確かめる。できる場合は、その都道府県、国の中のここというところまで確かめる。

- カードをグループで見せ合ったり、読み合ったりした後、それぞれのカードを、教室の背面掲示板に貼り、学級全体でも見たり読んだりできるようにする。

- 但馬地方の記事については、兵庫県の地図にその記事の場所を矢印で示して、記事を地図上に貼る。

- 担任のすること

- ◇ 新聞の紙面構成や順序（政治・経済、国際、スポーツ、地方など）について知らせ、必要な記事が素早く見つけられるようにする。

② 記事をまとめる、詳しく調べる

- 集めた記事に出てきた世界の国についてグループで一枚の世界地図に、その位置、場所にシールを貼る。〈写真⑤⑥参照〉
- 各都道府県、各国の記事の中で、グループで一つ（テーマ）を選んで、その記事の内容やその国についてグループで詳しく調べる。

- 次のような方法でテーマについて詳しく調べる。

インターネット、図書室の本、知っている人（先生）に聞く、他紙の記事を見る

- 担任のすること

- ◇ テーマの選び方について、適切な助言をする。

- ◇ 選んだテーマについて詳しく調べる方法や、必要な資料について、適切な助言をする。

③ 記事を読み取る、発表する

- シールを貼った地図を見て、気がついたことを出し合う。
- 実際には次のようなことに子どもたちは気がついた。
 - ◇ アメリカ、中国、ロシアの記事が多い。
 - ◇ 南アメリカ、ヨーロッパの国の記事はほとんどない。
 - ◇ 世界のあちこちでテロや紛争が起きている。特にアフリカ、西アジア、南アメリカが多い。
- グループで調べたことを学級全体場で発表する。
- 担任のすること
 - ◇ 発表されたことについて必要な補足、説明をする。

(3) 成果(◎)と課題(●)

- ◎ 新聞を見たり、読んだりすることへの抵抗感のようなものが無くなり、新聞に親しむことができるようになった。
- ◎ 記事を集めたり(作業を含めて)、その場所を(国については)シールに貼ったりすることで興味や関心を持って、楽しく学習に取り組むことができた。
- ◎ 学習を通して、その国、都道府県の位置や知識、理解についてその定着が図られた。
- ◎ 記事の内容を他紙と比べることで、新聞によって記に軽重があることや、切り口に違いがあることなど少しだが感じることができた。
- ◎ 東日本大震災や原子力発電所の事故について、その状況を学級の皆で理解し、復興への課題や問題点について考えることができた。
- ◎ その他の時事的なこととして、紀伊半島を中心とした台風12号被害、リビアのカダフィ政権崩壊、ギリシアの金融危機などその内容の他、その意義や問題点について少しだが学級で考えることができた。
- 記事を集めるのに「子どもたちがおもしろいと思ったもの、関心を持ったものを選ぶ」としたが、実はそこに合理的な根拠はない。用紙の大きさの関係で、子どもたちはスペースを多く取っている記事を選ぶのを避ける傾向があった。また、よく耳にする国の記事を選ぶという子もいれば、逆に全然知らない国を選ぶ子もいるなど、選ぶ規準は様々であった。その中で読み取られた南アメリカやヨーロッパアフリカの国の記事はとも少ないということにどれだけ説得力があるかについては、検証していく必要がある。記事の選び方については、例えば、新聞何日か分が出てくる国の総てを集めるとか、国際面のトップ記事を何日も集めるとかいろいろと方法は考えられた。
- やむを得ないことかも知れないが、時事的なことを扱うとしながらも、新聞をある程度ストックしたり、選んだテーマについて調べたりする中で、発表会のときには多少句を過ぎていたものもあった。
- 予定していた時数では、テーマについて調べるのに時間が十分でなかったことがあり、結果として、担任の補足、説明のボリュームが増えることとなった。

(4) おわりに

N I Eへの取り組みを一つの契機として、学級では朝の会で、その日見つけた新聞記事やテレビのニュースからこれと思うものをみんなに紹介し、それについて自分の感想を言

うコーナーが作られた。子どもたちが家庭や学校のことだけでなく、広く世の中のことに関心を持ち、積極的に考えることができるようになってきたことを嬉しく思う。

おおげさな言い方になるかも知れないが、新聞を広げてみることで、このことが自分の人生をより豊かに、より深いものにするということ子どもたちは、子どもたちなりに実感としてとらえられたのではないだろうか。もちろん、まだまだ子どもたちには、記事の内容が難しくて、読んでもなかなか分からない、理解できないことも多いけれど。

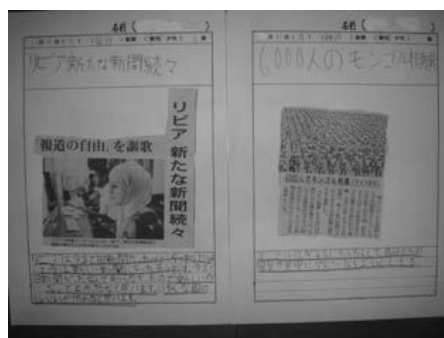
そんな中で、年度の終わりごろ頻りに新聞記事、ニュースになったT P P（環太平洋パ

ートナーシップ協定）について、学級で大いに議論できたことは大変印象的であった。その参加の是非について様々なとらえ方、考え方があることを新聞記事などから知り、それらを総合的にとらえる中で、自分なりの意見を持って多くの子どもが議論に参加することができた。

N I Eの取り組み、活動は今の教育に求められている子どもたちに「生きる力」をつけることに、よく合っている。継続して取り組んでいくこと、さらに具体的な取り組みを吟味していくことこれらについてしっかりと道筋をつけていくことが、これから大切なことである。



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥

新聞に親しもうとする児童の育成

～ 低学年における NIE を活用した授業づくり ～

加古川市立陵北小学校 教諭 井上博嗣

1. はじめに

本校は、加古川市の北東に位置し、南に日岡御陵、北には一級河川加古川が流れている河川沿いの学校である。校区には、人塚古墳や西条古墳群など歴史的な史跡が点在する古くからの地区と、県営団地などの新興住宅が立ち並ぶ地区とが混在しているのが特徴である。児童数は 343 名で、各学年が 2 クラスずつ、特別支援学級が 1 クラスの計 13 クラスの小規模校である。

NIE の実践においては、今年度が初めての取り組みであったため、どのように取り組んでいこうか模索している段階であったが、対象児童が 3 年生ということもあって、研究テーマを「新聞に親しむ子どもたちの育成」に設定した。中学年という発達段階においては、学習に対して「楽しい」という感覚をまず感じてもらいたいと考えたためである。また、デジタル放送の普及や家庭環境の違いによって、子どもたち一人ひとりが新聞との関わりについても経験値が異なり、実際にこれまで新聞を見たり読んだりした経験が無い子どもたちは、全体の約 30% と多かった。その子どもたちにとっては、本実践が新聞と触れる初めて

の場である。新聞に対して「大人が読むものである」とか「難しいことが書いてある」といった印象をできるだけ無くして、興味をもったり楽しさを感じたりする子どもたちの姿を目指し、今回の実践を試みた。

2. 実践にあたって

実践をおこなうにあたって、新聞の定期購読をおこなった。期間は、実践単元の時期を考慮し、冬季休業がある 12 月を外して 10 月、11 月、1 月、2 月の 4 ヶ月間を設定した。その期間中は、教室の後ろに新聞コーナーとして毎朝「小学生新聞（朝日）」を担任が整理して並べて設置し、子どもたちが自由に読めるように環境作りをおこなった。



新聞コーナー（教室後ろのロッカーの棚上に）

最初は、毎日新聞や読売新聞など「小学生新聞」以外の新聞も並べていたが、3 年生の子どもたちにとってそれらを自分の力で読む

ことは困難であり、また場所等の確保も難しかったため、小学生新聞のみを提示することにした。

新聞コーナーを設置してからまもなく、読書の時間や休み時間に新聞を読む子どもの姿は少しずつ増えだしたのであるが、様子を見てみると、彼らの関心のある内容は4コマ漫画やクロスワード、また芸能人についての情報などが中心であった。そこで、時間をもうけて新聞の構成（一面記事の役割）について教師から説明する場をもうけて、その後、朝の会などで日直が‘今日のニュース’を伝える活動を新たに設定した。最初は、初めての取り組みに対して子どもたちも抵抗があるように感じられたが、全員が当番でおこなう活動として設定したためか、それまで関心の無かった子どもたちも、次第に新聞を手にする機会が増えるようになっていった。

3. 実践の内容

(1) お店のチラシ調査 (3年生社会科: 10,11月)

3年生社会科でおこなう‘お店’の学習のなかで、お客さんを呼ぶ工夫としてチラシ(広告)の配布がある。今回NIE活動として新聞6紙を同時購読していることを利用し、以下の2点について子どもたちに問いかけをおこなって1週間の調査活動を実施した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○どの新聞が、チラシが一番多いのだろう ○チラシが多い日は、何曜日なのだろう |
|---|

	月	火	水	木	金	土	日	1週間計
神戸	5まい	16まい	3まい	13まい	17まい	27まい	12まい	93
読売	3まい	14まい	7まい	16まい	16まい	21まい	10まい	87
朝日	4まい	22まい	13まい	20まい	16まい	37まい	13まい	125
産経	6まい	12まい	4まい	9まい	15まい	21まい	6まい	73
日本経済	0まい	0	0まい	0まい	0まい	0まい	0まい	0
計	18	69	27	58	64	106	41	398

チラシ調査の結果 (期間: 1週間)

調査の結果から、一番チラシがたくさん入っていたのは「朝日新聞」、またどの新聞においても一番多くチラシが入っていた曜日は「土曜日」ということがこの調査活動からわかった。以下は、取り組み後の子どもたちのワークシートの感想である。

<学習後の子どもたちの感想>

・日本経済新聞は、経済という字が新聞の名前にあるので、きっとたくさんチラシが入っていると予想していたのに、1週間で0枚という結果だったので、すごくビックリしました。

・私は、たくさんの方が、仕事がお休みの日曜日が一番チラシが多いと思っていたけど、土曜日が一番多かったので残念でした。でも、休みの前の金曜日にも二番目に多いのは「なるほど!」と思いました。でも、火曜日にも金曜日と同じくらいたくさんチラシが入っているのは「なぜだろう?」とも思いました。

・1週間チラシ調べをしてわかったことは、どの新聞にも同じお店のチラシがたくさん入っていることです。調べている時に、ほかには入っていないチラシを見つけるとすごくうれしかったです。

子どもたちの感想から、今回の調査活動に

楽しく取り組むことができた様子うかがえる。また、この活動を通じて、同じチラシがいろんな新聞に入っていることや、休日後の月曜日はチラシが少ないこと、またお店が1週間の真ん中である水曜日に向けて火曜日にもたくさんチラシを配っていることについて関心をもった子どもも出てきて、学習を深めることができたように感じている。

(2) 漢字さがしゲーム (3年生総合：1,2月)



一枚の新聞の中から漢字を探している様子 (2人1組)

総合的な学習の時間のなかに「ニューズペーパー」(計7時間)という新たな単元を設定し、新聞を用いた学習活動をおこなった。上の写真は、2人1組になって制限時間内に課題の漢字(部首が‘さんずい’の漢字や‘オン’と読める漢字など)を探している場面である。できるだけたくさんの漢字を見つけることができた組が高得点になるゲーム形式でおこなったのであるが、子どもたちにとっては大変好評であった。また、2学期に学習した国語の部首の復習としても活用でき、良かったように感じている。

<学習後の子どもたちの感想>

・すごくおもしろかったです。さいしょ、新聞の字な

んて読めないと思っていたけど、ペアの子と協力して「これ部首‘さんずい’ちゃう？」とか言いながら赤ペンで○を入れていくのが楽しかったです。

・新聞の下の方にある広告の所にも、その漢字がのっていて、見つけれなくて残念でした。でも、19個も見つけれられたので良かったです。またしたいなと思いました。

(3) わたしが選ぶこの一枚 (3年生総合：1,2月)

同じく、総合「ニューズペーパー」の学習の中で、新聞に載っている写真記事の中から、自分が気に入った写真記事を選んで切り取り、友達に発表する活動をおこなった。



新聞から気に入った写真記事を探している様子


以下は、子どもたちのワークシートの一例である。

ニューズペーパー

名前()

わたしが選ぶこの一枚

↓しゅう道



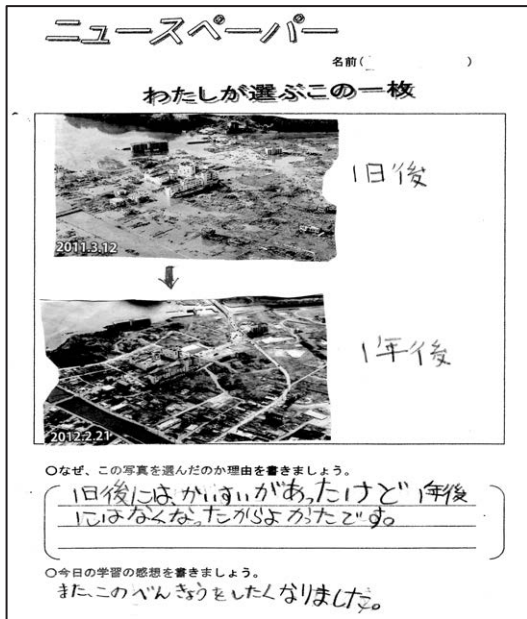
○なぜ、この写真を選んだのか理由を書きましょう。

中学本文の部活の中で一番死ぼう事こ
がー者多いなって天口らなかつた左もへと思
たからえらびました。

○今日の学習の感想を書きましょう。

しゅう道が中学校の部活の中で死ぼうじこが
多いなってせんぜん思ってもいませんでした。

このワークシートは、平成24年度から中学校で必修化される武道について関心をもった子どものものである。しかし、記事を読むと今まで柔道の授業などで中学生の怪我や死亡事故等が多くあったことを知り、驚いている様子が見えてくる。



上のワークシートは、東日本大震災の被害状況について関心をもった子どものものである。二つの写真は同じ場所から撮影してあるため、記事で書かれている変化が目に見えてわかるところが選んだ理由にもなっていた。

(4) 記者派遣の取り組み (全校生安全集会：1月)

また、NIE実践校ならではの新聞記者の派遣活動も今回お願いをして取り組んだ。毎年1月の避難訓練の後におこなっている安全集会の場に、時事通信社神戸総局の佐藤陽信総局長をゲストティーチャーとして招き、東日本大震災が起きた時の様子や現地での取材を通じて感じられたこと、また子どもたちにこれから感じてほしいことなど、全校生の前

で熱心に語っていただいた。



神戸新聞 朝刊より (2012年1月18日)

4. 成果と課題

今回の実践を終えて、成果として言えることは、3年生という中学年においても、小学生新聞を用いることによって十分親しむ活動が展開できるという点である。「先生、もうニューズペーパーの学習終わりなの？」と多くの子どもたちから質問があり、彼らにとって楽しい学習であったことがうかがえる。対して、課題としては、実践する時間数の確保である。今回は、総合的な学習の時間を使い7時間程度の単元設定をおこなったが、(1)で示したように社会科の授業やその他の教科の時間に組み入れて活用していく方が、時間数的な問題の解決につながるであろう。しかし、そういった取り組みは、「どの教科のどの単元で、この記事を使うのか」という教師側に事前の綿密な教材研究が要求されることであろう。そういった教材研究にかかる時間の確保も難しい部分ではあるが、多くの先行実践事例を実践者に伝えることによって、解決へと繋がる手立てになるのではないかと感じた。

「研究テーマ」

伝え合い、共に学び合う児童の育成 ～ことばの力を育てる～

豊岡市立福住小学校

河本 澄

田仲 渉

勝地 香苗

庄司 知樹

安原 奈美

松岡 勝美

I はじめに

本校は「すすんで学び、こころ豊かでたくましい子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、自分のよさを知り、自分の考えを持ち、明日に向かって一歩を踏み出す原動力を持った子どもの育成を目指してきた。本年度は、兵庫県NIE推進協議会の推薦を受け、全校でことばの力を育てるために新聞を取り入れた活動を進めてきた。NIEを進めるにあたり、次の4点を目標とした。

○新聞に慣れ親しむ。

○社会とのつながりを広げる。

○友だち・家族と感想を共有し、学び合う楽しさを知る。

○情報を整理し読み取る力をつけ、語彙力や表現力を伸ばす。

本年度は、1年目なので子ども達が新聞に慣れ親しむことに重点を置いた。

II 実践にあたって

1 新聞に親しむ

(1) 新聞閲覧コーナー

3階の多目的教室に新聞閲覧コーナーを設置した。毎朝、福祉ボランティア委員会の児童が配達された新聞をロッカーの上に配置する。その下のロッカーの中には1週間分、1カ月分と分けてストックし授業の資料としてすぐに活用できる状態にした。

新聞を並べて掲示することで一面記

事を見比べることができやすく、新聞社の記事の扱いの違いに気づくことができた。また、4、5、6年生の教室が近くにあるので休み時間には、新聞を閲覧する児童の姿が見られた。

(2) 全校朝会での新聞紹介

新聞に慣れ親しむ第一歩として、全校朝会で教師が子ども達に新聞記事の紹介をすることにした。第一回目の新聞紹介で、1日分の新聞をつなぎ合わせて子ども達に見せた。一日分の新聞をつなぎ合わせると、約7メートルにもなった。毎朝家庭に届く新聞がこんなに長くなることを知り、新聞の記事の多さに子ども達は驚いていた。教師が子ども達に紹介した記事は、教師が読んで心に響いた記事、いま世の中で話題になっている記事、季節の話題、地域の記事などである。紹介した記事を新聞コーナーに掲示すると、休み時間などにその記事を興味深そうに読む子どもの姿が見られた。また、全校朝会だけでなく各学年の朝会でも子ども達に新聞記事を読んで聞かせた。



琉球新聞を使って
「命」の話



季節を感じる記事
を集めて

(3) 朝の新聞タイム

毎週水曜日（8：25～8：35）の10分間の学習タイムを利用して全校生で新聞を読んでいる。学校で新聞に慣れ親しむことをねらいとして取り組んだ。低学年では、気に入った写真を見つけ、選んだ理由や感じたことを書いている。高学年では、複数の記事の中からお気に入りの記事を選び、感想を書いている。取組を継続していく中で、楽しみながら気に入った記事や写真を選び、自分の考えや感想を持てる児童が増えてきた。また、自分の興味ある分野について自主的にスクラップを準備する児童もでてきた。毎週新聞を読む機会があるため、子どもたちの新聞への興味関心が高まってきた。

低学年



高学年



2 新聞から学ぶ

(1) 但馬のニュース

自分たちのふるさとである但馬地区に関する新聞記事を見つけて記事の内

容を要約したり、感想を伝えたりする力の育成をねらいとして取り組んだ。方法としては、但馬欄から興味のある記事を見つけてその記事を切り抜き、5W1Hを意識して記事の内容をまとめる。次に、その記事についての感想を書く。最後に作成したプリントを各学年で準備した模造紙に貼り、1階の廊下に掲示する。模造紙には但馬の白地図を貼っておき、児童が見つけた記事がどの場所の出来事かわかるようにした。2学期は6年生と5年生、3学期は4年生が取り組んでいる。6年生は家族に自分の言葉で記事の紹介を行ったり、5年生は作成したプリントを友だちと交流してコメントを書いてもらったりする活動も行っている。今後各学年での取組を継続していきたい。



(2) 神戸新聞社 記者派遣

11月11日（金）、神戸新聞社から西井由比子記者を招き、新聞ができるまでの過程や、新聞の読み方を教えていただいた。4、5年生は普段から新聞の切り抜きに取り組んでいるため、興味を持って聞くことができた。



DVD「新聞ができるまで」を視聴し、新聞が作られる過程を学習した。新聞がたくさん過程を経て作られていく様子を児童たちは興味深く見入っていた。新聞の中にはたくさんの方々の思いが込められていることを感じる事ができた

・新聞の読み方



身近な但馬の記事から5W1Hを探す活動を行った。説明を受けながらより詳しく新聞の読み方を学習できた。また、実際に記者さんがいつも持ち歩いているメモや、新聞の原稿を書くパソコンも見せていただいた。



〈児童の感想から〉

- ・西井さんの仕事のメモは、読めないくらいので書いてありました。話を聞きながら、一生けん命メモをとられているのだなと思いました。
- ・1行が11文字だったなんて初めて知りました。

3 その他の取組

(1) ぼく、わたしの得意なこと

自分には得意なことがないと思いつているのか、どう答えたらいいか分からないのか、「得意なことは、なに？」とたずねても「別にないです。」とほとんどの子が答える。そんな時、朝日小学生新聞で「夏休みこどもミニ作文コンクール『ぼくの、わたしの得意なもの』」を見つけた。その作文には、笑うことや赤ちゃんを抱っこすることなど88人の得意なことが100文字で書いてあった。全校集会でその新聞を紹介し、その後、本校でも全校生一人一人に頑張っていること、得意なことをカードに書いた。カードには、本を読むこと、バレーボール、野菜作り、パソコン、そろばん、ものまね、新聞の切り抜き展…など様々な得意なことを書いていた。書いたカードは顔写真と共に階段の踊り場に全校生分掲示した。

いのか、「得意なことは、なに？」とたずねても「別にないです。」とほとんどの子が答える。そんな時、朝日小学生新聞で「夏休みこどもミニ作文コンクール『ぼくの、わたしの得意なもの』」を見つけた。その作文には、笑うことや赤ちゃんを抱っこすることなど88人の得意なことが100文字で書いてあった。全校集会でその新聞を紹介し、その後、本校でも全校生一人一人に頑張っていること、得意なことをカードに書いた。カードには、本を読むこと、バレーボール、野菜作り、パソコン、そろばん、ものまね、新聞の切り抜き展…など様々な得意なことを書いていた。書いたカードは顔写真と共に階段の踊り場に全校生分掲示した。



ぼくは、あそびをかんがえるのがとくいです。たからさがしや、こおりかくれんぼをしてあそんでいます。 1年生

私の得意なことは、新聞の切りぬきです。必ず金曜日には新聞を見ます。そして、夜になると新聞切りぬきをします。していると、ものすごく楽しいです。これからも新聞切りぬきをたくさんしたいです。 4年生

ぼくの得意なことは、サッカーロボットが、試合に勝てるようにブロックやセンサーをつけることです。二才のころから、レゴブロックを作っていました。どんどんむずかしいプログラムをやりたいです。 5年生

友だちや上級生・下級生の得意なことを読んで、「友だちの知らなかった得意なことがわかって、よかった」「同じことが得意でも、書き方が違うからおもしろい。個性が出ていると思う」など、友だちのことを改めて知ることができた。また、オープンスクールでは保護者や地域の方にも読んでもらった。

(2) 学年の取組

〈4年生〉

- ・毎週土日の新聞を切り抜きファイルに閉じた。
- ・朝の会で切り抜きのスピーチをした。
- ・新聞記事を使つての討論をした。(国語「アップとルーズ」)
- ・生活の出来事や社会見学のとめて新聞を作った。

〈5年生〉

- ・新聞を切り抜き、記事の内容(5W1H)と感想を書き、友だちと交流した。
- ・朝の会で、新聞の切り抜きを使つて、日直がスピーチをした。
- ・新聞を使った授業
理科「天気の変化」
国語「和語・漢語・外来語」
社会「情報化社会」

〈6年生〉

- ・週末に但馬のニュースを読んだ感想を書き、家の人にそれに対するコメントを書いてももらった。
- ・水曜日の朝学習で、『読売KODOMO新聞』を読み、感想や自分の考えを書く「ニュースウォッチング」に取り組んだ。
- ・社会科で学習したことを新聞形式でまとめた。



III おわりに

NIEに取り組んだ当初は、新聞を読まない児童が多かった。しかし、実践していく中で、子どもたちは、新聞にはさまざまな記事があることを知り、新聞に興味を持ち始めた。例えば、低学年では、新聞タイムのときなどに自主的に好きな写真を探し、集めている姿が見られた。高学年になると、気になる新聞記事を読んで切り抜き、記事の内容と感想を書いた。また、友だちの選んだ新聞記事を読み合い、コメントを書くなど、新聞を通して学び合いができた。さらに、学習のまとめに新聞を作ることで、小見出しを考えたり、写真や図を取り入れたり、読み手を意識した工夫をすることができた。

課題としては、数回で終わる取組もあったため、継続して行うことが大切である。家庭とも連携してファミリーフォーカスなどを行い、情報を整理する力やコミュニケーション能力をさらに伸ばしたい。また、新聞には、漢字や内容など難しい面があるので、児童にわかりやすく楽しいと思える活用方法を研修していきたい。

「研究テーマ」

新聞から人々の思いを読み取ろう ～読む・考える・伝える～

淡路市立中田小学校 教諭 坂田 裕治

1, はじめに

昨年度までの3年間を通して、新聞に親しみ、新聞を身近に感じられるような工夫を学校内でもしてきた。今回、3年目になる6年生には、新聞を通して人々の思いを読み取ること、情報から感じられることを中心に、また5年生、4年生は、継続して新聞に親しむことを目的に進めようと考えた。

2, 新聞をより身近な存在に

① 新聞閲覧コーナーの設置

新聞記事の写真や自分の好きな記事だけでも目を通せるように、4, 5, 6年生の教室がある3階廊下に新聞各紙が自由に閲覧できるコーナーを設置した。また、読み終わった新聞を各学年が利用できるように、4年〇〇新聞、5年□□新聞、6年△△新聞を学



級で管理するようにした。これでスクラップ作りなど切り抜き活用がしやすくなった。

② スクラップブック作り

5・6年生は授業前の時間を利用して、記事の内容を決めること、書いてある内容についての読み取り等を中心に週に数回スクラップブック作りに挑戦した。興味のある記事や友だちに紹介したい記事を切り抜き、コメントをつけ、ノートやファイルにとじていく。理科の授業でも自然環境に関わる記事をスクラップにした。

回数を重ねる度に以前にスクラップした関連記事に興味を持ち、継続して、記事の内容を追っていく子もいるなど、記事探しも上手になり、新聞をめくる姿も堂々としてきた。



③ 「ちょっといいお話コーナー」

今年度も学校に届いた新聞から、地域の身近な話題、他の小学校の活動紹介、生き物やスポーツ等子どもたちが興味を持てる記事を選び、そのコピーを掲示板に張り出した。

3. 新聞を活用した授業実践

【6年生の取組】

○新聞記事に対する考察

6年生にとっては3年目となる今年、子どもたち自身、取材の仕方や新聞を作る方法は、これまでも十分に学習してきた。

子どもたちは新聞のつくりについては十分習得していた。

そこで今年は、新聞の記事の中にある人々の思いを読み、感じ取ることを第一の目標とした。子どもたちにとって身近にあることやいろんな人々の思いが書かれているような事柄を選んで感想を書かせるようにした。

方法は、朝の時間を利用して興味、関心のある記事を選び、記事の内容でわからない語句を国語辞書で調べたうえで、記事に書かれていることやそれに対する感想を毎週にわたって書いた。



○「東日本大震災」に関する記事への考察

新聞記事の中にある人々の思いを読むこと、感じ取ること为目标にしてきた新聞記事への考察を少しステップアップさせた。東日本大震災関連の記事が毎日のように掲載されていたのは子どもたちも知っていたので、その記事の先にいる被災した人々の思いが書かれた記事や復興復旧に向けて尽力している人たちの思いなど、いろんな視点から東日本大震災を考えるために新聞記事を使った。改めて、東日本大震災の被害や状況のすさまじさを感じてもらおうとビデオを見せたり、震災の現状を話したりした。



それぞれに一つのテーマを決めて、新聞記事選びを進めることにした。関連する記事は、毎日のようにあり子どもたちは、記事の内容を振り返りながら進めた。

記事集めの進め方は、これまでの考察の方法を生かして、記事選び、語句調べ、感想を書くということで進めていった。

その後、学級内での発表も行った。

それぞれの思いをまとめた発表は、とても素晴らしいものであった。



○新聞記者派遣事業

「取材方法と新聞記者という仕事」

取材方法の復習、また記事を書くときの記者の思いや願いなどについてのお話を聞く機会を設けた。新聞記者授業をお願いして、まず取材とは何なのか、どのように取材を進めるのか、取材をするときに気をつけることは何かなどの点について教えてもらった。記者自身の体験から、どのように取材をし、それがどのような記事になるのかを聞いた子どもたちは、興味を持ってその記事を読んだ。

その後、実際にいくつかの質問を考え、新聞記者を相手に逆取材を行った。職業としての新聞記者という視点から、子どもたちは、取材し、興味のあること。子どもの頃の夢などを聞いたほか、実際に取材をしていたときの経験を話していただいたりした。



普段、実際に取材活動を行っている記者の方にいろんなことを答えていただいたこともあって子どもたちは大いに喜んだ。そして、取材についての疑問やそれまでに書かれた新聞記事についての質問を記者の方へぶつけ、その答えから新聞記者の報道にかける熱い思いを知ることができた。

また、同じ震災関連のことについて調べを進めている子どもたちが、ぶつけた質問の中に「阪神淡路大震災」のこともあった。その話になると、子どもたちも表情を変えて真剣に聞き入り、メモをとる姿も見えた。とても有意義な講話であった。



このほか、社会科の学習と絡めて、政治のニュースを扱って、国の仕組みや行政、司法、立法の仕組みの学習を進めた。行政と議員との関係性、議員の発言が自分たちに直接関係はないようでも、それが両親の仕事にどのように影響するのか、そこから自分たちの暮らしが変わるかもしれないということ、自分たちの身近なものとして実感させることができた。新聞に書かれていることとテレビのニュースとを合わせて政治や経済について意識して新聞を読むようになった。ということが聞けた。



【その他の取組】

- 4年生社会では、クリーンセンターや浄水場、消防署を見学した内容を壁新聞にした。見出しや写真の使い方を子どもたちなりに新聞から学び、それを参考にグループ新聞を作成した。
- 理科学習では、天気図と衛星写真、自校で継続的にとった記録温度計のデータとを組み合わせ、季節による天気図の特徴や気温変化の様子を学んだ。日々の天気図を比べられるように整理したことで、季節による天気図と特徴がつかみやすかった。
- 5年生は、子ども新聞を使って、ノートにスクラップづくりを進めた。スポーツ記事や社会記事を主に書いてある内容についてまとめ、それについての感想を書くという活動を行った。普段なかなか慣れない新聞に最初は、悩みながら、迷いながら進めていたが、慣れてくるとスムーズにできるようになり、記事選びもそれまでのものと関連付けて選ぶ児童もいた。

4. 終わりに

この3年、できるだけ新聞そのものを子どもたちの近くに置き、記事紹介を続けた。新聞に親しむために小学生新聞の学校での購読も進めた。また、新聞記者授業等を通して記者の仕事を理解し、記者本人との交流を深めていった。その取組が「新聞」という存在を身近に感じる一番の方法だったように感じる。

さらに未曾有の大災害が日本が起り、東日本の状況を毎日伝えてきた新聞の役割、阪神淡路大震災のときに新聞によって様々な情報を得ることができたことなど、いろんな方の話や授業を通して多くの新聞記事にふれたことで、「新聞に親しむ」という当初の目的は達成できたと

考える。また、教育課程にある様々な教科で活用できたことも大きい成果であったと考える。

今回の6年生は、3年間新聞に触れ、新聞を読むことを当たり前のようにしてきた。新聞に対する意識の向上、見方も変わってきた。これからさらに新聞の重要性を知り、どのように新聞を活用していくのか、またこれからの将来にわたって、新聞というものとどのようにかかわっていくのか、子どもたち自身が今回の3年間がどのようなものであったかを大人になっていくにつれ実感できるものと信じています。

また、私たち教師自身にとってもこの3年間は、新聞が様々な情報源としてどれほど価値のあるものであるかを再認識し、あらためて新聞記事に関してアンテナを高くするようになったのは、今後の教育活動に大いに役立つことである。

N I Eの取り組みは、3年間で終わりましたが、子どもたちの記事を読む力、考える力は少しずつ育ってきていると感じました。しかし、伝える力は、まだまだである。また、教師自身も新聞を十分に活用できていなかったところもある。

実際に、新聞が家にない家庭も増えてきている現状の中で、新聞の在り方をあらためて考えることも重要であるとともに今後どのようにして「新聞を読むこと」を勧めていくかということが課題である。またN I Eの取り組みについては、高学年が主に取り組んだという形で終わっている一面もある。

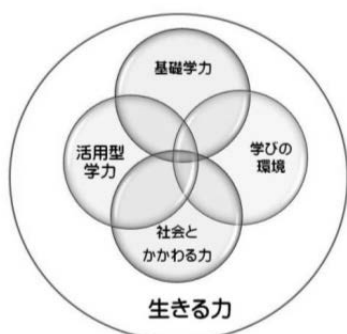
小学校全体でどのようにして系統だてて取り組んでいくことができるのか、ということをしつかりと考察して実践していけたらと強く思います。

「研究テーマ」

「考える力」を伸ばす授業づくりに向けた新聞活用の効果を探る
～学習に活かす新聞の幅広い活用場面とは～

たつの市立小宅小学校 教諭 石堂 裕

1 はじめに



左図は本校研究テーマ「未来を切り拓く子どもたちに確かな学力を育てる」のイメージモデルである。

この図が示すように、確かな学力の育成には、相関関係にある「基礎学力（読む・話す・聞く、計算等の基礎基本となる力）」、「活用型学力（思考力、判断力、表現力）」、「社会とのかかわる力（生きていく上で必要な人とのかかわる力や人権意識の高揚等）」そして「学びの環境（家庭での生活習慣、学習習慣、規範意識等の学ぶ過程で基礎となる力）」をバランスよく伸ばすことが大切であると考え、「新聞の活用は、子どもたちの社会的視野を広げ、活用型学力の育成に効果的である」との仮説を立て、実践に取り組んだ。

2 効果的な活用法を探る

①「思考を高める」場面での活用

ア) 社会科で行う人権学習の場合

連日、紹介される東日本大震災関連の記事。その中には、人権課題に関する内容がたくさんあり、子どもたちの人権意識を高めるための「気づきの芽」を伸ばすには最適である。

【事例】「風評被害について考えよう」（5年）

○学習のねらい

「私たちの暮らしをささえる食料生産（日本文教出版5年上）」の中で、日本の農業や漁業の工夫、課題、そして生産者の思いについて学習した子どもたち。その生産者が原発事故の風評被害によって、多大な被害に遭っている。さらに新聞記事によると、被災された方が宿泊を拒否されたり、避難先で子どもがいじめられたりしたらしい。風評被害をなくすためには、一人一人が風評被害について考え、正しい判断力を養わなければならない。



【写真1 風評被害に関する記事を読み意見交流】

○学習展開

- ・朝日小学生新聞を活用し、風評被害についての意味や被害の起こる原因をおさえる。
- ・風評被害に関する新聞記事（読売、神戸新聞など4記事）を提示し、経済的な被害の現実を確認するとともに、生産者側の辛い思いを理解させる。

- ・風評被害に苦しむ福島県在住の主婦の記事を紹介し、相手の立場に寄り添い、正しい判断をすることが大切であることを理解させる。

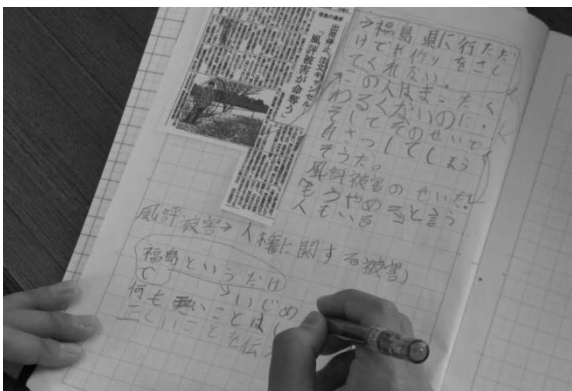


【写真2 小グループで記事からの気づきを整理】

○子どものコメント

原発事はAさんが悪いわけではないのに、宿はくを許可されないのはおかしいと思います。なぜ何も悪いことをしていない人が悲しい思いをしなければならないかと思うととてもつらいです。今日の学習で、当たり前のことだけど、正しい判断をすることが大切だと強く思いました。(授業後のふり返しカードより)

上の作文には、風評被害への憤りが表れている。また「当たり前のことだけど、正しい判断が大切」というコメントからは、子ども自身の強い思いが感じられる。社会科で身近に感じた地域であったことや新聞という信憑性の高い情報であったことで、効果的に子どもたちの心情に迫ることができた。



【写真3 記事を読み取り、整理されたノート】

○授業の成果

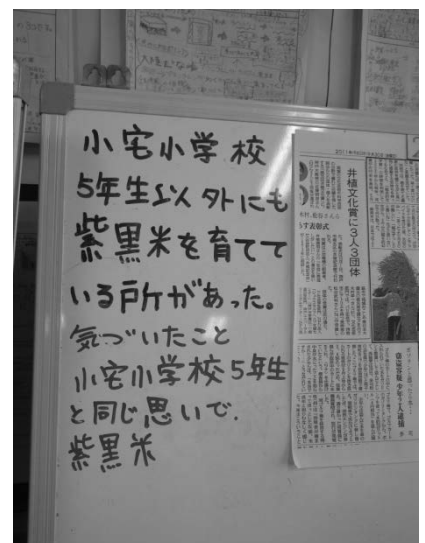
人権課題が身近にあることを気づかせるために、新聞記事を利用し「風評被害」を取り上げたことは効果的であった。また小グループを利用して意見を出し合わせたことで、どの子ども課題意識を持たないように思う。人権課題への気づきを高めるためには、どのように自己の生き方をふり返らせるかがポイントとなる。

イ) 思考活動が広がるきっかけづくりの場合

【事例】たつのの名産Sプロジェクト(総合)

古代米である「紫黒米」は、たつの市が平成11年より、市の特産にしようと進めている作物である。本校でも市の取り組みを応援しようとする総合的な学習の時間のカリキュラムに位置づけて、栽培から製品化までの取り組みを進めているところである。

10月末まで、子どもたちは、「紫黒米はたつのの名産＝「たつの」だけでつくっている」と信じて疑っていなかったため、読売新聞の記事を提示した。その見出しには「小野市の小学生が古代米の稲刈り」と書いてあった。記事を読む子どもたちの目に飛び込んできたものは、同じ紫黒米が県内の別の市で、しかもたつの市よりはやくから栽培していたという内容だった。そこで初めて紫黒米が他地域でも栽培されていることを知る。さらに子どもたちは2000年以上前

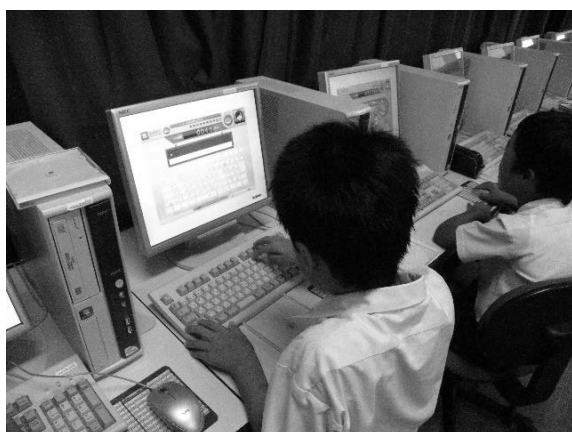


【写真4 ホワイトボードへの記述】

には、各地で栽培されていたことや、紫黒米が大きな品種改良をされずに現在に至ること、そして紫黒米より古い古代米に赤米があること等にも気づいた。

活動への視野が広がった子どもたちには、「〇小学校では、紫黒米からどのようなことをしているのか知りたい」という興味が高まってきた。そこで、小野市の〇小学校5年生に手紙を出し、収穫後の活動の様子をリサーチしたり、記事から「赤米」について興味を持った子たちは、インターネットを利用して、赤米について調べ始めたりした。子どもたちの活動はこれだけにとどまらず、赤米の写真から校区内で赤米を栽培されるおじいさんを見つけることになる。そのおじいさんから赤米の実物をゆずり受け、友だちに紹介することができた。

新聞記事の内容に基づいて、既存の知識を覆すきっかけに出会った時、子どもたちの探究心は、いっそう高まることが確認できた。



【写真5 インターネットによる調査活動】

②「学びをつなぐ」場面での活用

新聞記事には、学習に役立つ情報が満載である。学習活動と関連する記事を活用し、子どもたちの学びをつなぐきっかけとした。

さらに新聞記者派遣を活用することで、より子どもたちの学びをスムーズにつなぐこと

ができた。事例は次のとおり。

【事例】身近な人権課題の解消に向けて

(多文化共生学習)

○学習のねらい

本校5年生には、今年ペルーから来た子どもを含め、外国籍の子どもたちが複数在籍している。この子どもたちの人権が保障され、また外国籍の子どもたちにかかわる周りの子どもたちの人権意識が高まるように多文化共生にかかわる学習を構成する。

○単元の主な流れ (全10時間、☆は評価規準)

人権学習としてのねらい	
○身近な外国の方とのかかわりを通して、多文化共生についての態度を養う。	
ステップ	学 習 活 動
第 一 次	つかむ ① <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">がんばる外国の方に関する話題を集めよう</div> ○新聞記事をきっかけに学習の見通しを持つ。 (神戸新聞：多文化共生に関する記事活用)
第 二 次	探究する ④ <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">外国の方の思いにふれよう</div> ○日本でがんばる外国の方に取材する。 (県内在住のインドネシア、メキシコ、韓国の方) ○専門家話からインドの子どもの就労を知る。 ○多文化共生に詳しい新聞記者の話聞く。 ○取材して分かったことをまとめる。 ☆外国の方の思いにふれることができたか
第 三 次	伝え合う ③ <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">外国の方とのかかわり方について考えよう</div> ○発言シートづくりをする。 ○資料をもとに学習を深める。(深め学習) ○意見交流会をする。 ☆かかわり方についての考えを持てたか
第 四 次	いかす ② <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">学んだことを伝えよう</div> ○人とかかわり方に関する思いを綴る。 ○冊子を全校生に披露する。 ☆学んだことを生き方に生かす意欲を持てたか

○記事が読み取りづらい時は、G Tが効果的

神戸新聞に多文化共生に関する記事が連載された。西播磨地区で働く外国人労働者の記事である。一見、小学生には難しいと思われるが、この記事には、子どもたちが学ぶべき

人権課題が多くあった。そこで、2 学期の学習までに記事を書いた記者さんにお会いし、学習の意図を説明するとともに、ゲストティーチャー（以下G Tと記述）としてお話ししていただくことにした。このように記事内容が子どもにとって価値あるにもかかわらず、読み取りづらい時は、実際に来ていただき、話を聞くことで、理解しやすくなる。本单元でも具体的に話を聞いたことで、数多くの外国人がこの西播磨で働かれていることや、日本語の習得や生活に慣れることにはかなりの努力をされたこと、そして周りの日本人の支えが大切であることを理解しやすくなった。

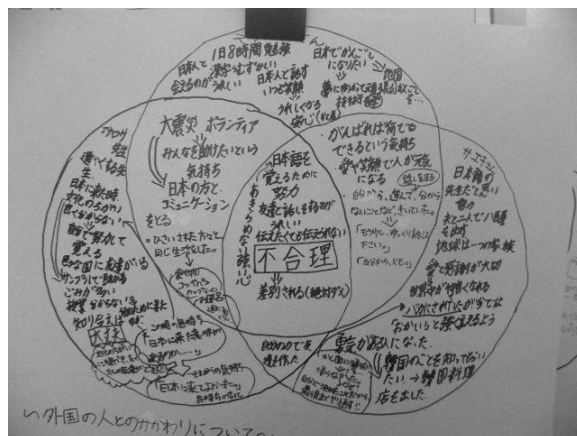
○実際に外国の方からも話を聞くことが大切

G Tに来ていただいた新聞記者さんが取材された中に、インドネシア出身の看護師Fさんの話があった。記事によると自らもスマトラ沖地震の被災者で、その時、助けられた日本の方に感謝する気持ちを忘れてないために日本で看護師を続けることを決めたいらしい。ぜひ子どもたちに話を聞かせていただきたいことから、県赤十字事務局にお願ひし、来校が実現した。Fさんをはじめ、3人の外国の方の話から、子どもたちは、「言葉を話せないつらさ」、「日本人の何気ない言葉に傷つくこと」、「異なる生活に慣れるまでの努力」等について理解できた。実際に会うことで、より理解を深めることができた。



【写真6 メキシコ出身の方の話】

○思考ツールで整理することがポイント



【写真7 ベン図で共通点をとらえる】

G Tから聞き取った話から共通点を考え、外国から来られた方とどのようにかかわることが大切なのかを考える場合、上の写真のようなベン図が効果的である。子どもたちは、この整理を通じて、外国から来られた方の「あきらめない強い心」や「努力」、そして「不合理」を感じたことに気づき、在籍する複数の外国籍の子どもたちの心に寄り添おうとする思いを強くすることができた。

3 おわりに

3年前から続ける朝の活用型学力向上タイムでの新聞記事をもとにした読み取り問題や、数社の新聞を読み比べ、構成の仕方や見出しづくりを学習することは、4年生以上の学年13クラスで継続的に行われている。今年は新たに「学びをつなぐ」ことを目的に、導入場面、深める場面での効果的な活用法を探ってきた。その結果、わかったことは、新聞は「読み取り」、「情報収集」に加え、「学習意欲の向上」、「思考する学びをつなぐ」などにも効果的であることである。

実践校、奨励校の3年間に得た学習効果をもとに、今後もさらに子どもたちの「考える力」を伸ばす授業づくりに取り組んでいきたいと思う。

【 中 学 校 】

「授業における効果的な新聞の活用について」

神戸市立鈴蘭台中学校 教諭 米谷浩実

1、学校の概要

神戸市立鈴蘭台中学校（こうべしりつすずらんだいちゅうがっこう）は、神戸市北区北五葉にある公立中学校。

鈴蘭台の住宅地造成による人口・生徒数増加により、1969年4月1日神戸市立山田中学校から分離し、開校した。通称は「鈴中」。

2、学校・生徒の様子

平成23年度在籍生徒数は、1年6学級207名、2年5学級178名、3年5学級188名、特別支援学級1学級3名の合計576名である。明るく素直で、自己表現の豊かな生徒が多く、毎日の授業や特別活動などに意欲的・積極的に取り組んでいる。



3、研究目標および研究計画

NIE実践2年目の本校では、第2学年の社会科の授業を中心に活動を行った。

本校2学年社会科では、今回の学習指導要領の改訂で言語活動の充実と関連して重視されている「適切に表現する能力」を育成するための学習指導の充実を目指しているところ

だが、表現する能力を育成するために「自分の意見・感想を書く」という活動を可能な限り取り入れてきた。以下、研究計画の概略を示す。

(1) テーマ

「授業における効果的な新聞活用」

(2) 目標

- ①多くの生徒に新聞に触れる機会を設けることによって、新聞の楽しさや面白さに気付かせる。
- ②授業で新聞記事を資料として活用することによって、教科書の内容をより実社会とのつながりの中で理解させる。
生きて働く知識の習得に努めさせる。
- ③保護者にもNIE活動への理解を深める。

(3) 対象生徒

第2学年178名

(4) 計画内容

①新聞配達予定表

新聞名	配達月
朝日	9～12月〔4カ月間〕
毎日	10～1月〔4カ月間〕
読売	4～6月、9月〔4カ月間〕
日経	6月、9～11月〔4カ月間〕
産経	4～5月、1～2月〔4カ月間〕
神戸	4～6月、2月〔4カ月間〕

②新聞コーナーの設置

北校舎4階および北校舎3階2年生教室廊下前



③授業の実践

期間：4月～翌年3月までの1年間

教科：社会科・総合的な学習の時間

内容：校外学習新聞・歴史新聞・地理新聞の作成やひょうご新聞感想文コンクールへの応募ほか

4、本校での取り組み

(1) 社会科での実践例

《歴史新聞づくり》

夏季休業中の宿題として、古代から江戸時代の終わりまでを範囲として、各自が好きな時代を1つ選んで、その時代を紹介したり、春季休業中には、太平洋戦争の沖縄戦に関する新聞づくりを課題とした。

《地理新聞づくり》

ゴールデンウィーク中に、6月に実施した

泊を伴う校外学習の活動先である滋賀県について、冬季休業中の宿題として、修学旅行先である沖縄県について、紹介する新聞づくりを課題とした。

《ひょうご新聞感想文コンクールへの応募》

夏季休業中の宿題として、神戸新聞社主催の「新聞感想文コンクール」に2年生177名が応募した。

《「平和」の尊さを感じたい(隊)》

- ①各生徒が最も関心のある平和の大切さを感じる新聞記事を選ぶ。
- ②記事や出来事の内容をまとめる。
(誰が・いつ・どこで・何を・どうした等)
- ③内容のキーワードを記入。
- ④読者に伝えたい内容をまとめる。
- ⑤感想を記入。
- ⑥記事に関する意見交換を行なう。

《「海外・地元(地域)」探検したい(隊)》

- ①自分が旅行してみたい国や地域の記事を選ぶ。
- ②記事の見出しを書き出す。
- ③旅行してみたいと考えた理由を記入。
- ④その国の観光親善大使になったつもりでPR記事を考える。
- ⑤ワークシートが完成したら、クラス内で発表。
- ⑥発表後、最もよかったPR記事について投票し、クラス内で最優秀賞を決定する。

《「環境」について調査したい(隊)》

- ①自分が環境について分かりやすいと感じた資料の添付している新聞記事を選ぶ。
- ②記事や出来事の内容をまとめる。
(誰が・いつ・どこで・何を・どうした等)
- ③資料があることによって、どのような点が分かりやすくなったのかを記入。
- ④資料の工夫されている点を記入。

《「安全・健康」について調べたい（隊）》

- ①安全や健康を話題にした新聞記事を選ぶ。
- ②記事を選んだ理由を記入。
- ③説明ができるように辞書等を活用し調べる。
- ④記事に関する生徒相互にインタビューを行なう。
- ⑤自分の意見をまとめ、感想を記入。



(3) 総合的な学習の時間での実践例

《校外学習新聞づくり》

6月17日～18日に行った泊を伴う校外学習での取り組みを事後学習として、テーマを「環境」と設定し、新聞という形式で実践。

《進路学習新聞づくり》

3学期に行った進路学習の総括として、各上級学校に関する特色を新聞形式でまとめた。

(4) 文化祭での展示・発表

例年10月下旬に行われる文化祭において、提出者全員の「校外学習新聞」を展示し、来校された方にも見ていただくことができた。

(5) 生徒の感想

①NIEに取り組む以前は、新聞を読むことが少なかったが、取り組み始めるとほぼ毎日新聞を読むようになり、少しでも自分が関心のある記事を見つけられるようになったので、新聞を読むことは楽しいと思うようになって、大切なことだと改めて思った。

②将来、私は保育士になりたいので、教育・生活や地域に関心を持つようになってとてもよかったと思う。

③新聞を読むことは、とても大切なことで、政治や経済について知らなかったことを知ることができるので、新聞は毎日読む必要があると思った。

④いつもはあまり読まない新聞だけど、これからは進学のこともあるので、テレビ欄やスポーツ欄ばかりでなく、経済面や政治面にも目を向けたいと思った。

⑤新聞は大人だけじゃなく、中学生である自分たちにも参考になるような「環境」や「平和」に関しての内容もたくさん載っているの、積極的に読んでいきたい。



5、成果と課題

(1) 成果

①個人差はあるが、生徒は社会の動向に関心を持つことが出来た。そして、日々の生活と政治や経済が関連していることに気付くことが出来た。また、多様な解説・評論等を読むことで、世の中への関心を深めることが出来た。

②生徒一人一人が、日ごろの学習を通して提起される問題や生活圏の中から、気付いた課題を取り上げて、まとめることが出来た。

③普段新聞をあまり読まない生徒も、新聞に興味を持ち、積極的に記事を読んでいた。

(2) 課題

①生徒にとって、ともすると煩雑で細かい活字が並び敬遠されがちな新聞。日常的に手にとる生徒はそう多いとはいえない。しかし、見出しに着目し、その紙面構成や表現を見直すことによって、生徒たちの新聞に対する見方に一石を投じることが出来たのではないかと考えている。それは、長期休業ごとに作成された歴史新聞や地理新聞と、その中の見出しの出来栄えに反映されている。また、こうした意識の変化を経て、生徒たちは記事を見返すことによって、徐々にその資料的価値にも気付いていけたと考える。そして、授業や学年だよりの発行等の中で、教師が日常的に、意図的に新聞を取り扱うことによって、深められていくものと思える。今回の実践を起点に、様々な場面や手法で一層新聞を活用していく機会を増やしていきたいと考える。

②N I E実践校の間は新聞が無料提供されるが、実践校期間が終了した後は、同様に新聞を活用できなくなる。研究推進校の期間を延長していただくこと（3年単位）や、研究推進校期間が終了した後も、新聞の提供を続けていただける方法が考えられないかと思う。

(3) 考察・感想

①ある芸能人が芸能界から引退するニュースは、生徒の中でも話題となり、生徒からも賛否両論の意見が出た。一連の報道から、新聞社により扱う記事のスタンスが異なることに気付いた生徒もいた。多様な意見の尊重と共に、差別はないか、人権は尊重されているかという問いかけも行なった。

②今年度の夏に内閣総理大臣の交代があり、関連施策の変更もあった。「子ども手当」や「高等学校の授業料無償化」等に関心を持つ生徒も多かった。

③変化する社会の動きを素早く報道し、その背景や問題点などを解説して伝えてくれる点で、新聞は格好の教材・資料といえる。

④広告も情報の1つである。広告を教材として授業で活用し、商品の全てが載っている訳ではないが、何が載っていないのかを考えることで、消費者教育の分野にも可能性がある。



6、おわりに

「N I E活動実践校」として2年目となる平成23年度は、昨年度の実践を生かしながら、活動を広げることにした。今年度は『新聞を読む』『記事について自分の考えをまとめる』『新聞を作る』という幅広い活動の実践を通して、生徒の新聞への興味・関心を高めることが出来たと思われる。また、今年度、サブ・テーマとした『思考力・判断力・表現力を鍛える新聞の活用』についても、これらの実践は有効であったと考えている。今後は、これまで2年間実践してきたことを、どのような形で平素の学校教育活動の中で活かしていくかが課題である。最後に、2年間素晴らしい実践機会を与えてくださった兵庫県N I E推進協議会の方々にお礼を申し上げ、報告とします。

新聞に親しむことから ～新聞から世界を広げる～

尼崎市立南武庫之荘中学校 教諭 中嶋 勝

1 はじめに

N I E実践指定校2年目を迎えた本年度も、昨年に引き続き、国語科、社会科、学級活動などで新聞を活用している。

本年度も、昨年の実践をふまえながら、さらにより多くの生徒に「新聞に触れる機会」を増やし、新聞に対する距離を縮め、新聞のおもしろさを体験させることを心がけた。本稿では、1年生で取り組んだ授業を中心に紹介する。

2 活動の概要

生徒たちが家庭で新聞に触れる機会がどの程度あるのかを知るため、年度当初にアンケートを実施した。その結果、新聞を定期購読しているのは全体の6割であり、テレビ欄を読む以外は、生徒自身はほとんど新聞を読まないということが分かった。

また、「新聞」に対するイメージは、「何でもすぐに知れてとっても便利」「インターネットに対して、比較的安全で正しい情報がついている」というプラスイメージを持つ生徒もいたが、「難しくて読んでも分からない」「見てもおもしろくなさそう」「あまり読まないもの」「こまこましていて、見るとイライラする。どちらかというとなんか嫌い」など、マ

イナスイメージを持つ生徒がほとんどだった。

このアンケート結果から、新聞を手にとることの少ない生徒たちが、まずは新聞を実際に手に取り、その楽しさを実感し、新聞を少しでも好きになることをねらいとした。

3 授業内容 第1学年 国語の授業



(1) 4コマ漫画を読む (2時間)

4コマ漫画の楽しさを実感することをN I E学習の導入とした。

① 4コマ漫画の順番を考え発表する。

② 4コマ目のセリフを考えて発表する。

4コマ目のセリフを空白にしておき、個人や班で考えた言葉を発表し合う。

4コマ漫画には、ダジャレやことわざなどを使った「言葉遊び」がふんだんにあり、生徒たちは初めて出会う言葉に驚き、「4コマ漫画は奥が深い」という感想を持った。

(生徒の感想)

「いろんなダジャレがあつてとてもおもしろかったです。けっこうニュースや季節に関

する話が多いんだなと思いました」

「4コマ漫画の穴埋めはとてもおもしろかったです。ギャグだったり、時事問題などもあって、楽しく学べました。意外と頭も使いました」

(2) 印象に残った新聞記事をクラスメートに紹介する (計5時間)

① 新聞の構成を学ぶ (1時間)

1面から社会面までに掲載されている内容を大まかに教えた後、新聞を手に取り、好きな記事を自由に読む。



② 記事選び (1時間)

気に入った記事、友だちに教えた記事ワークシートに貼り付け、記事の要約と記事を選んだ理由、自分の感想を記入する。

③ 記事を紹介する (1時間)

自分が選んだ記事をみんなの前に出て、1分間スピーチでクラス全員に紹介する。(時間のない場合は、班の中で紹介し合う)



(3) 写真から「喜怒哀楽」を読む (1時間)



① 新聞から「印象に残る写真」を選び、記事の内容と感想を記入する。

また、その写真が訴えているものは何か。

「喜怒哀楽」あるいはその他の漢字一字を考えてワークシートに記入する。

② 作成したワークシートを回し読む (1時間) 前時に作成したワークシートをクラス全員で回し読みし、評価と感想を記入する。優れた作品は廊下に張り出す。

(生徒の感想)

「NIEの授業を通して、いろんな人の好みとか、感想を読めていい授業だし、新聞の中から切り取った記事について、自分が思ったことを書くし、自分の頭で考えないといけないから書く力がつくと思います」

「ふだんはテレビ番組欄しか新聞を見ませんでした。でも授業でやってみると、新聞にはいろんな事が書いてあり、おもしろかったです。また、新聞記者の人がいかにわかりやすく記事を書いているかが、すごく伝わってきました。これからも新聞を読んでいきたいです」

「新聞を読んでみたら、世界のさまざまな事がわかってよかった。みんなの新聞を見ると、みんないい記事ばかりで「東日本大震災」や「なでしこジャパン」の記事が多かったです。新聞でこんなに勉強できるとは思ってなかったので、ぜひまたやりたいです。」

(4) 見出しを考える



① 新聞記事の見出しを考え、発表する。

どの見出しが記事の内容や記者の思いをよく伝えているか考え、投票する。

(生徒の感想)

それだけで「読むか読まないか」が決まる見出し。たった十数字を考えるのがとても難しいと思いました。クラスで考えると、人それぞれ違う意見を考えていたのもおもしろかったです。考えた人の個性がよく表れると思いました。

(5) 3年生が作った「検証新聞」を読み、感想を送る。(1時間)

3年生が社会の時間に作った「予想・検証新聞」(興味のある新聞記事をもとに「なぜ」そうなったのかというテーマ

を設定し、そのテーマに対する答えを、新聞やインターネットを使い導き出していき、最後にその内容を新聞の形にしてまとめる)を読み、手紙形式でまとめ、新聞を作成した3年生に返す。

(生徒の感想)

「先輩のTPP新聞を読ませていただきました。先輩の新聞はとてもカラフルで、きれいにまとめられていたので、読みやすかったです。

私もTPPについていろいろな疑問を持っていたので、すごくためになりました・・・

(後略)



4 新聞記者派遣



毎日新聞阪神支局の香取支局長から新聞記者の仕事について講演して頂く。

新聞記者の方を目にするのも、話を聞くのも初めての経験であり、学年生徒全員が真剣に耳を傾け、「記者の仕事」についてたくさんを学んだ。

また、翌日、毎日新聞の地域面にその様子が掲載され、生徒たちは大変喜んでいました。

(生徒の感想)

「新聞記者の仕事を教えてくださってありがとうございました。おかげでいろんな事を知ることができました。今は、インターネットがあり、たくさんの情報が得られる時代です。しかし、人の思いや真実、現状をより詳しく載せているのは新聞だと思います。だから私は新聞を読もうと思います」

5 その他の取り組み

- ① 「新聞のスクラップ1日分以上と新聞コラムの筆写5日分」を夏休みの課題とした。(購読していない生徒には7月分の新聞を配布)
- ② 読売新聞「編集手帳見出しコンテスト」に学年全員で応募。(1名が佳作に選ばれ朝礼で表彰された)
- ③ 3年生の総合の授業では、時事問題に取り組む授業を行っており、その一環として、希望者を募り本校で「ニュース検定」を実施し、職員を含む三十四名が受験した。

6 新聞置き場と整理方法

- ① 生徒が自由に新聞を閲覧でき、本校職員が気軽に授業で使用できるように職員室前に一ヶ月分の新聞を常時置いて



いる。また、その上にある掲示板には、みんなに関心を持って欲しいと思う記事を、係りの生徒が記事を選び張り出している。

- ② 新聞の使用方法は、主に国語科が使用しているので国語科担当教員が、話し合いながら決めている。

7 実践の感想と今後の課題

本年度の取り組みを通して、新聞に関心を持ち興味を持って記事を読む生徒が増えたと実感している。ま



た、今日の新聞1面を見せ、事件の内容に触れてから授業を始めることも大変有効であった。

ただ、国語や社会科では教科の中で使用することも可能であるが、それでも教科の時間の中で行うには一定の時間が確保されていなければならない。新聞を使って授業をするには、あまりにも時間が少ないことである。その時間確保と教科でどの場面で使用するかの工夫が今後の課題である。

本年度の取り組みは「新聞に親しむ」であったが、2年生、3年生では新聞を使って、「読む力」「考える力」「書く力」の育成を図るために、今後も研修を進めていきたい。



NIE 実践校 2年目の新聞を活用した様々な取組

明石市立野々池中学校 教諭 奥内正浩

1 はじめに

実践校としての取り組みも2年目となった。今年度は、様々な教科や総合的な学習の時間での活用をテーマに実践に取り組んだ。廊下に設置した新聞コーナーにも、昼休みなど、自然と生徒たちが集まり新聞を手にする姿が見られるようになった。また、教師もそこで新聞を閲覧するので、「先生、何読んでるん？」など、コミュニケーションの場にもなっている。まだまだ、新聞に興味を示さない生徒も多く、授業の中で新聞を活用することで、興味を持たせたいと考えている。



【廊下に設置した新聞コーナー】

2 1年生国語科での取組

本校は、各学年6～7クラスの中規模校である。校区3つの小学校があり、主に、そこから入学してくる。その内の1小学校は、規模が小さく、入学時はなじみの生徒が同じクラスに少ない現状がある。そのような中で、他校出身の生徒も含む生徒間の理解を深めるため、自分新聞を1学期に作成し廊下に掲示した。写真や表などを活用し、自分の趣味や

興味のあること、様々な情報を掲載し、生徒間の理解を深めさせた。



【生徒の作成した自己紹介新聞】



【廊下に全員の新聞を掲示】

3 2年生トライやる・ウィークでの取組

本校区では、多くの事業所がトライやる・ウィークに賛同・協力していただいている。先輩たちの体験を聞く中で、トライやる・ウィークを楽しみにしている生徒も多い。本校では、例年トライやる・ウィーク終了時に新聞を作成させ、それを冊子にしている。文集のように個人に記念として配布するのはもちろんのこと、事業所、図書室、下級生の教室にも配布している。

特に、事業所選びの時は、上級生の残した新聞を事業所選びの参考にしたり、事業所決定の後も、自分の体験させていただく事業所の仕事内容を理解するために冊子を手に行っている生徒が多かった。



【生徒の作成した新聞】

4 英語科での取組

1年生の英語の授業で who (誰) の学習時に、新聞を活用して授業を行った。例年、生

徒に実際に、絵や写真を紙に描かせて「Who is this?」とクイズ形式で生徒間で問答させたが、課題として、

- ① 同じ絵が多い(有名なキャラクターなど)
- ② 答えがすぐにわかってしまう

(同じような興味関心があるもの同士)があり、すぐに答えがわかってしまうので、言語活動としては盛り上がらない。

今回は、新聞に掲載されている写真を使ってクイズを作成させた。

ルール

- ① クラスの中に、一人くらいは知っている人物。
- ② 自分でヒントを3つ考えられる人物(例) 出身、職業、性別など
- ③ 最初から写真を見せるのではなく、ヒントを出してから、写真を見せる

生徒のクイズから

クイズ 1 He is in the USA.
He plays baseball.
He is in Seattle.

答え イチロー

クイズ 2 They are women.
They are African.
Nobel peace prize 2011

答え Ellen Johnson Sirleaf,
Leymah Gbowee,
Tawakkol Karman

(写真を見ても誰も名前を言えませんでした)

クイズ 3 They are singers.
They are from Korea.
Mr Okuuchi likes them.

答え Kara

生徒が使用した写真

知事、スポーツ選手、政治家、芸能人、漫画、俳優など

生徒の前でクイズを出させたので、プレゼンテーションの練習にもなった。新聞を授業で使うとなると、大変なように感じるのだが、このように写真を活用するだけなら、気軽にできるし、授業も様々な人物が登場してきてコミュニケーション活動としても盛り上がった。

5 1年生スキー実習での取組

例年スキー実習新聞を作成している。今年度も朝刊太郎というフリーソフトを使って、班新聞を作成させた。

スキー実習の生徒の係の中に、学習記録係という係を作成し、スキー実習前の事前学習では、新聞、インターネット、雑誌などからスキー、但馬などをテーマに事前学習レポートを作成させた。他人に自分の興味や関心をうまく伝えるには、ダラダラ長い文章を書くのではなく、限られた字数で内容を要約して伝えることが大事であると指導した。

そして、事前学習のレポートを全員分廊下



【事前学習のレポート】

に掲示し、他のクラスの生徒も含めて自由見ることができる状況にした。

スキー実習新聞は、学習係にデジタルカメラを配布し、食事、部屋の様子など、新聞作成に必要な写真を残せるようにした。また、デジタルカメラの操作を体験したことのない生徒も多く、スキー実習前に行った、王子動物園の班別行動時に班に1台デジタルカメラを持たせ操作に慣れさせた。

各クラスに6つの班があり、1日目、2日目、3日目と各班を2つずつ割り振り、内容が重ならないようにした。

指導したポイント

- ・ 見出しの工夫（読みたいとさせる）
- ・ 決められた字数の中で伝えたい内容を



【生徒の作成した班新聞】

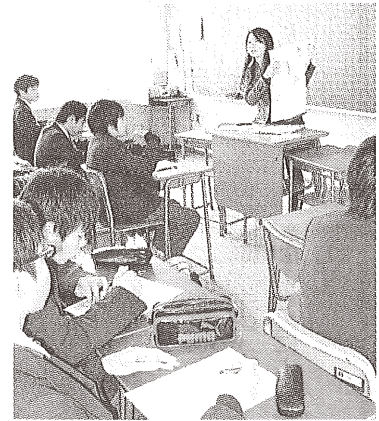
作成した新聞は、全班分廊下に掲示した。また、自分の班の新聞は、印刷して生徒にも配布した。何部でもコピーできるところが、デジタル化された新聞のいいところである。

教育現場で新聞を活用して新聞を読んでほしいとする「NIE」の実践指
定校、野々池中学校（沢
野）で28日、「先輩に学
ぶ」と題した特別授業が
行われた。スポーツ選手
や建築士、幼稚園教諭な
ど計9人が講師として参
加。神戸新聞明石総局の
中務庸子記者（25）は1年
生25人に、新聞の作り方
やインタビュのコツな
どを伝授した。

中務記者は「一面」「ト
ップ」「カタ」など新聞
の紙面構成を説明し、「何
が重要なニュースか意識

「なぜ？」を大事に
野々池中でNIE授業

紙・本
中務記者



新聞の作り方などについて説明する中務庸子記者
＝野々池中学校

トライやる・ウィークを来年度6月に控えた1年生は、様々な職業について学ぶ機会を持つために、様々な分野の講師を招聘し講座を開催した。

一講師の先生方一

- ・ 新聞記者
- ・ 青年海外協力隊OB
- ・ 土地家屋調査士・一級建築士
- ・ 旅行会社
- ・ 芸術家（美術）
- ・ プロスポーツチームのコーチ
- ・ 実業団スポーツ選手
- ・ 幼稚園の先生
- ・ 多国籍企業元職員

生徒の感想などから、実際にその場で働かないとわからない貴重な話を聴くことが出来たようである。また、講座も生徒の希望で選択させたので、より興味を持って聴けたようだ。

7 1年生国語科での取組

2年生への進級を控えた国語の時間、2年生への自覚を持たせるために、また、いろいろ不安を抱えて入学してくる新入生のために、学校を案内するパンフレットを作成し校内に掲示した。



【廊下に掲示したパンフレット】



8 おわりに

自由に廊下に新聞を閲覧できる環境を整えたが、それだけでは、生徒はなかなか新聞を読もうとしなかった。「ひょうご新聞感想文コンクール」に出品するなど、新聞を読まなければならない環境を作ることや、授業の中で新聞を活用することがきっかけでさらに新聞を読む習慣を生徒たちに身につけさせられたらと思い、今後も継続して新聞の授業での活用を進めていきたいと思う。

授業への効果的な新聞活用

神戸市立夢野中学校

教諭 山本 泰

1 はじめに

本校は、平家ゆかりの福原京や清盛塚などがある神戸市兵庫区の北部に位置しており、校区内には史跡や名所が数多くある。地元の歴史を紹介する新聞のコーナーがあったり、中学生が作成した野外活動新聞が新聞に掲載されたりと身近に新聞がある。

しかし、本校の生徒も「活字離れ」があり、週3回、朝の授業前に読書の時間を設けて活字離れを止めたいと考えている。

今回、NIEの指定を受け、新聞を授業に活用することで大きな効果があがると思い、取り組んできた。その取り組みを以下で紹介する。

2 新聞をより身近に

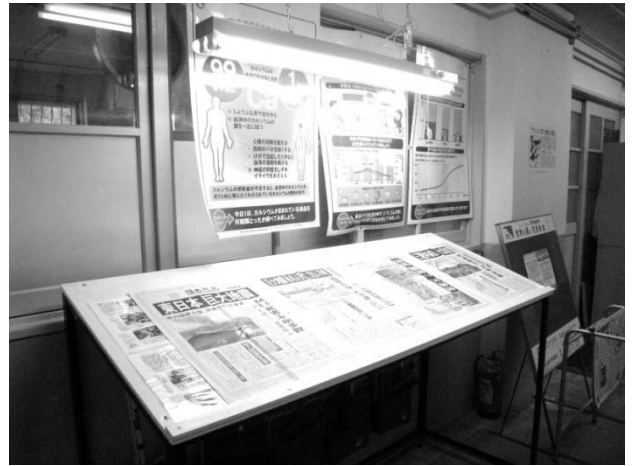
まず、いつでも読めるように新聞ラックと新聞閲覧台を準備した。閲覧台は新聞2紙を同時に広げて読める大きさ、読むための明るい照明、背が低い生徒用に台も準備し、1年生から3年生まで快適に読める環境を用意した。

次に、全校生徒が休み時間、放課後に自由に読めるように、また、教師が授業で活用できるように職員室前に設置した。新聞以外にも地域の情報紙や広報紙、修学旅行や野外活動で交流をもつことができるようになった地域の情報紙なども置き、自由に見ることができるようにした。

最初のころはもの珍しさで少し見る程度でしたが、しだいに新聞を広げ興味深く時間を忘れて読む生徒も出てきた。新聞購読

の期間が終了したあと、「先生、新聞は？」とたずねる生徒が意外と多く、知らず知らずのうちに身近なものになっていたことに気づかされた。

《職員室前の新聞閲覧台》



《2紙広げられる閲覧台》



3 新聞作成から

2年生の野外活動が1学期にあり、その締めくくりにはひとりひとりが野外活動新聞を作成した。この学年は1年次の野外活動後にも班新聞を作成し、3学期には国語の授業で個人新聞を作成していたため、スムーズに作成できた。読む人を引きつけるために「タイトルは?」「見出しは?」「表現方法は?」「色使いは?」「写真や絵、図などは?」など、さまざまな工夫をこらしたものが完成した。新聞社に生徒が作成した新聞を新聞紙面で紹介してもらった。作成した生徒は取材を受け、その内容が活字になり多くの人の目に触れ、さまざまな思いをいだかせることができる新聞の力を感じた。

《野外活動新聞》



《野外活動新聞が新聞に掲載》



《神戸新聞に生徒の野外活動新聞が掲載》



その後、新聞記者派遣授業を受け、現役の新聞記者から直接新聞について学ぶことができ、このあと作成した「トライやる新聞」の作成に大きな影響を与えた。生徒も

2度目の個人新聞のため、しっかりとしたもの完成した。

また、新聞社の特集で中学生が地元の歴史を取材し記事にするという企画があり、生徒会役員3名が参加した。兵庫区内の史跡をまわり、町の人々にインタビューし、記事を作成した。完成した記事を本物の新聞で見たときの生徒たちの表情は、充実感に満たされていた。仲間が書いた記事なので多くの生徒がその新聞を読み感想を述べていた。



《自分たちが取材したものが新聞記事に》

4 新聞を使って

夏休みの課題の中に新聞を使って行うものが2つあった。体育と社会である。

まず、体育の課題は新聞記事の中から「体育」に関する記事を選び、レポート用紙に貼り、感想を書くものである。生徒たちはさまざまな角度からスポーツに関する記事を選び、自らの思いを表現した。

次に社会の課題は「新聞読書感想文コンクール」への応募である。各自が新聞を読み、その中から記事を1つ選び原稿用紙にまとめるといふものである。全員とまでは

いかなかったが、多くの生徒が応募した。内容的には女子ワールドカップサッカー優勝関係の記事が多い中、「小さな命をすくうため」の移植手術の壁、「震災関連死と救命医療」に立ち向かう医師の姿、「鉄人ピアガーデン」という震災復興のシンボルなど幅広い角度から記事を選び感想文に臨んでいた。

また、「編集手帳」に見出しをつけるコンクールに1・2年生が応募した。朝の読書の時間に毎日「編集手帳」のプリントを読み、見出しをつけることを2週間行った。そのあと、ひとりひとりが再度、編集手帳の記事を読み、見出しをつけ直し応募した。

3年生は2学期の後半より早朝学習の中で、「天声人語」の書写に取り組んだ。まず、読み、書き写し、意見・感想を表現するという活動を卒業するまで続けた。漢字の力、読解力、表現力が身につくにつれて、国語だけでなく他教科においても力がついた。ただ、書くだけではなく、読んで理解する、表現することが重要である。

その他、3年生では「メディア・リテラシー」の授業を国語科・社会科の中で行った。新聞の活用、情報の取捨選択、自らの考えの構築などにおいて、冷静な判断ができるように心がけることを学んだ。常に違う角度から物事を考えてみることの重要性を知ることができた。

5 さまざまな活用

朝の読書の時間に事前学習のひとつとして、新聞記事を活用した。たとえば、防災・減災学習の実施前に東日本大震災関係の記事を読み、解説を加えて本番の学習に備える。紙面に大きく載っている写真や記事、現地の人々の生の声を通して得るものは、はかりしれない大きなものである。この大

きなものを持って、防災・減災学習にのぞむことで、その成果は大きく期待できるものになる。

社会科の授業では、できるだけ毎回、前日もしくはその日の新聞記事の話や、帰宅後の夕刊や翌日の朝刊に掲載されるかもしれない事柄を話し、興味・関心を持たせるようにしている。子どもたちの中には、保護者の前で新聞記事の内容やニュースの内容を解説する子もいる。

6 今後の課題

今年度、NIEの指定を受けさまざまな取り組みを行ってきた。すぐに効果が表れるものではないが、少しずつ子どもたちの力がついてきていることは確かである。NIEの指定を受けなくても新聞を教育の中に取り入れた学習をもっと自然に、さらに、あらゆる場面でできるようにしたい。そして、子どもたちが社会人となった時、新聞が読める大人に、新聞から多くの情報を得ることができる大人になってほしい。また、親になった時、自分の子どもに新聞を通して多くのことを伝える、教える、学ばせる親であってほしいと願っている。

そのためには、周囲の大人が新聞を読むことであり、生活の中に自然に新聞を取り入れることが必要である。インターネットの普及で簡単に情報を手に入れられるようになったが、簡単に手に入れられるものは消えるのも早い。新聞から得る情報は、目で見て頭の中で理解するのに文字という媒体を使う。これが思考力の育成、言語活動の充実、記憶の定着につながる。新聞はどんなに時代が変化し、進歩しても変わらない大切なもののひとつである。新聞が自分たちにとって当たり前で自然なものにした

い。平成24年度も教育の中に新聞を取り入れ、子どもたちの力を大きく伸ばせるように取り組んでいきたい。

《平成22年度文化祭 野外活動新聞》



《平成23年度文化祭 野外活動新聞》



「研究テーマ」

新聞を活用した多様な学習活動の展開

須磨学園中学校 常勤講師 吉田勝司

I はじめに

N I E実践の1年目にあたる今年度の最大の目標は、新聞ファンを増やすことである。そのためにはまず、一人でも多くの生徒に新聞の持つ良さや新聞の魅力を実感してもらうことが必要である。そこで今年度は、教科の授業のみならず、学校行事や長期休暇などいろいろな機会をとらえ、スクラップや新聞づくり、スピーチなどの多様な学習活動に取り組むことにした。

II 実践内容

1. 新聞コラムの書き写し（学年活動）

新聞コラムの書き写しの効果としては、漢字や語彙を覚える、文章の構成力や理解力が身につくなど様々な効果があると言われている。こうした「言葉の力」を身につけさせるために、本校では第1学年と第2学年の生徒に対し、新聞コラムの書き写しを以前から週課題としてきた。

第1学年では、今年度から新聞社が発行している専用ノートの使用をはじめた。第2学年では昨年から引き続き、2紙のコラムを原稿用紙ノートに書き写しさせている。

2. ICTを活用した新聞づくり（第2学年国語科）

本校では特色ある授業として「探求理科」、「ICT」と呼んでいる授業を行っている。これは土曜日の午後実施している特別授業

である。「探求理科」ではおもに実験を中心とした授業を行っている。また、「ICT」ではパソコンを活用した国語、社会、数学、英語の授業を行っている。次に紹介するのは、ICT国語で新聞作成ソフトを使った新聞づくりの実践である。

第2学年の国語科では、1学期に学習した『平家物語』の発展学習として、2月期のICTの授業で「神戸・兵庫ゆかりの文学と史跡」というテーマで新聞づくりを行った。生徒には、夏休み中に下調べとして、関係文献の調査、パンフレット類の収集、現地での取材等をしておくように指示しておいた。

2学期のICTの授業で、生徒が夏休み中に集めておいた資料をもとにして新聞づくりに取りかかった。その際に利用したのが新聞製作専用のフリーソフトである。本校では生徒一人一台のノートパソコンを持たせているので、生徒各自でソフトをダウンロードをして新聞づくりに取り組んだ。



【一人一台のノートパソコンで新聞づくり】



【 生徒作品の例 】

3. 新聞コーナーの設置

本校では図書室に新聞コーナーが設けられているが、生徒がより気軽に新聞を手にとって読めるようにするために、廊下に机を並べて新聞コーナーを設けた。机の上には6紙の朝刊と前日の夕刊を入れるファイルボックスを置き、机下には古新聞を入れる箱をおいた。古新聞は自由に記事を切り抜きスクラップしてもよいことにした。新聞の入れ替えや溜まった古新聞の回収などの仕事は、各クラスの社会科系の生徒の当番とした。



【 休み時間に新聞コーナーで新聞を読む生徒 】

4. 新聞記者派遣による講演会

第1学年を対象にしたN I E記者派遣講演会を10月24日に行った。ちょうど新聞週間の時期ということもあり、生徒に新聞に親んでもらうために、「新聞の魅力」というテーマで読売新聞神戸総局長の常松健一氏に講演していただいた。講演では、新聞速読法やインターネットにはない新聞の特性、新聞記事に込められた記者の思いなどを話していただいた。生徒は配られた新聞を広げながら、常松氏の話しに熱心に耳を傾けていた。



【 講演会で配られた新聞を広げる生徒たち 】

5. 社会科授業での新聞活用

(1) ワールドニュース・コレクション

(第1学年 地理的分野の夏休み課題)

第1学年の地理的分野の学習では、世界の国々の国名やその位置について学習した。そこで、復習と新聞活用を組み合わせさせた夏休み課題として考えたものが「ワールドニュース・コレクション」である。新聞には毎日外国のできごとの記事が載っている。「ワールドニュース・コレクション」は、新聞を読んで見つけた外国の記事をスクラップしていき、白地図にその国を着色していくという課題である。どれだけ多くの国の記事を「コレクション」することができるかということを目指

にしているの、生徒が意欲的に取り組めるのではないかと考えた。

2学期の最初の授業では、互いのスクラップノートを見せ合い、コレクションした国の数や感想を報告しあった。生徒の感想からは、多くの生徒がこの課題に楽しく取り組めた様子うかがえた。中には、国によって情報量に大きな差があることに気づいた生徒や外国のできことから日本をみつめる生徒もいた。



【グループでスクラップを交換しあう】

《生徒の感想から》

- ・全部で 43 か国見つけました。40 か国を目指していたので、まずまずです。
- ・世界のニュースは意外と多く新聞に載っていたり、記事になっている国がとても偏っていることに驚いた。また、ワールドニュース・コレクションは、他の記事を読むいいきっかけになった。
- ・今までは新聞を読むことなどなかったけれど、読んでいくうちに面白くなってきました。これをきっかけに外国のことをもっと知りたいです。
- ・私は、このワールドニュース・コレクションをして、国どうしの関係や事件を詳しく見ていくことができよかったですと思います。あまり知らない国と日

本の接点を見つけると、実はその国が重要だったと言うことに気がつき、知らないことがたくさんあるなと思いました。

- ・日本は物騒だと言うけれど、外国では毎日デモがあり、人がたくさん死んだりする。日本に生まれてよかったですなあと思えた。

(2) 新聞記事を使った1分間スピーチ (第1学年春休みの課題)

春休みには、「社会で起こっていることに興味、関心を持ち、自分なりの考え方を他人に伝えることができること」をねらいとした課題を考えた。そこで、一定のテーマを決めずに自分が興味や関心を持った新聞記事をスクラップすることに取り組ませることにした。さらに、スクラップした記事の中で特に強く関心を持った記事を取り上げ、感想や意見を 400 字程度にまとめ、1分間スピーチの原稿を書くことを課題とした。

新学期最初の授業では、まず、グループで各自のスピーチを紹介し合い、その中でグループ代表の選出を行った。学級全体では、各グループから選ばれた代表者による発表を行った。



【脳死の記事についてスピーチした生徒】

6. 行事新聞づくり（第1学年 宿泊研修）

本校では第1学年で長崎への研修旅行を実施している。最大の目的は平和学習であるが、そのほかにも九州の歴史や文化を学ぶことも目的としている。例年、平和学習では事前に原爆被害者の講演を聴き、長崎では慰霊と原爆碑めぐり、原爆資料館の見学などを行っている。また、歴史学習としては吉野ヶ里遺跡、太宰府、九州国立博物館の見学などを行っている。そして、文化祭で研修の成果を保護者や見学者に発表している。

今年度、第1学年では、事後学習としてパワーポイントを用いた発表資料作成と手書きの新聞作成を行った。概要は次の通りである。

（1）発表グループ

発表は長崎研修の時の班を二つに分けた24グループで行う。

（2）発表テーマと内容

テーマは文化、平和、歴史、人物のジャンルからグループで選択して決め、研修で学んだこと、その後に調べたことなどを発表する。

（3）発表方法

① パソコンでパワーポイントを使って発表する。

② B4サイズ用紙1枚の手書き新聞にまとめる。

①と②のどちらもグループ全員が協力してすすめる。ただし、作業場所や時間、効率を考えて、①の中心メンバー（2名）と②の中心メンバー（3名）で分担して進めていく。

（4）冊子作成と新聞コンクール

完成した新聞は印刷して冊子にして、生徒全員に配布した。また、教室にも掲示し、クラスごとにコンクールを行った。



【出島についてまとめた新聞】

III 実践の振り返りと今後の課題

冒頭でも述べたように、とにかく新聞ファンを増やすことを最大の目標にして、多様な学習活動を試みた1年間であった。どちらかと言えば広く浅い実践であったが、これらの実践を通して、生徒には、新聞というメディアの持っている良さや魅力を少しでも感じてもらったのではないかと考えている。

来年度もできるかぎり、各教科の授業や行事、特別活動などの教育活動の様々な場で新聞を活用する学習活動に取り組んでいきたい。来年度の具体的な課題としては、①スクラップやスピーチを恒常的に実施する、②生徒の自治的な活動として学級新聞あるいは学年新聞づくりを進める、③新聞コーナーの設置方法や掲示方法を工夫する等を考えている。他校の優れた実践に学びながら、これらの課題に取り組んで行きたい。

新聞を活用して 思考力・判断力・表現力を育てる

姫路市立白鷺中学校 教諭 佐伯奈津子

1、はじめに

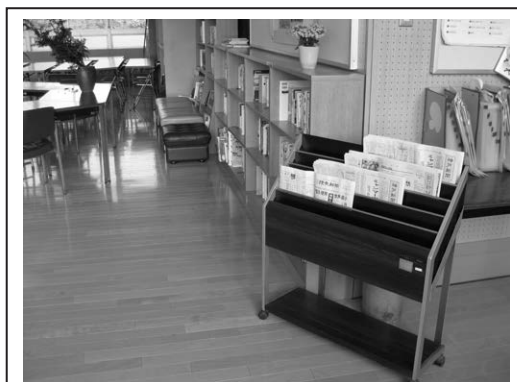
本校では、1学年2学級、特別支援学級1クラスの小規模校である。2011年度に初めてNIE実践校に指定され、国語科・社会科・学級活動などで新聞を使った学習に取り組んできた。

NIEの学習を始める前は、家庭で新聞を取っていない生徒もおり、新聞を手にとる機会も少ない中で、様々な記事を紹介し、新聞をより身近なものとしてほしいという願いをもとにスタートした。

また、新聞記事を読み、そこから自らの思考力・判断力・表現力もつけさせる授業や教材づくりも心がけた。



休み時間に自由に利用できるオープンルーム



新聞各紙をいつでも読むことができる。

2、新聞の活用

○ 新聞閲覧コーナーの設置

本校では、オープンルームという多目的のスペースがある。ここで集会や生徒会活動や委員会活動をしたり、休み時間には本を読んだり友達と話をしたりするのだが、その一角に購読させていただいている新聞を設置した。

休憩中にふと新聞を広げて見る生徒がいたり、次の授業のために移動している間にもふと新聞の見出しを見る生徒もおり、新聞にふれあう機会を増やすことができたと思う。

○ 新聞記事の紹介

また、本校で紹介された新聞記事や投稿した文章が掲載された時は、その新聞記事を印刷をし、全校生徒に配布したり掲示したりしている。

これにより、生徒間で友達が学習やボランティア活動に力を入れている姿を知ることができた。また掲載された投稿文から意外な一面を垣間見ることができ互いに高め合い、いきっかけになっている。

さらに、最近では教師間や保護者との会話の中にも、掲載された新聞記事が出てくるこ

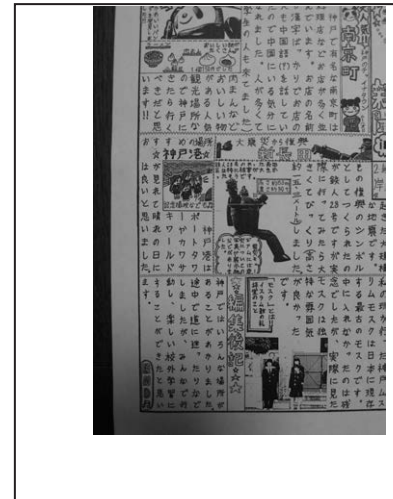
とが増えたように思う。



本校が取り上げられた新聞記事の紹介



生徒の投稿作品の紹介



神戸班別校外学習新聞

○ 楳の木タイムの取り組み

朝の10分間の学習時間である「楳の木タイム」を利用して、新聞の読みとりに取り組んできた。

新聞の内容は、その時々に取り上げられた地域の記事や読者投稿欄の文章を使った。その記事は下の通りである。

3、実践の内容

○ 行事新聞の作成

校外学習や修学旅行など行事の前と後に行事新聞の作成のための学習をしている。行事に行く前には、見出しのつけかた、記事の配置など新聞の紙面づくりの工夫についてや自分たちが書く記事の下調べ、調べてくる事柄の確認をしている。また、行事後は、写真やパンフレットを利用しながら、行事新聞の作成をしている。

新聞が完成すると、廊下に掲示し教師が審査員となって新聞コンテストをしている。優秀作品は表彰する取り組みをし、生徒の意欲向上を諮っている。

・ N I E ってなあに？の巻

(高松市屋敷小学校のN I Eの実践であるトライアングルノートを紹介)

・ 雨の詩を作ろうの巻

(投稿されていた中学2年生の雨の詩を紹介し、オリジナルの詩を創作した)

・ 熱中症を防ごうの巻

(スポーツドリンクの記事を取り上げ、上手な水分補給について考えた)

・ しかアイス復活の巻

(佐用町で鹿をつかったアイスが2年ぶりに復活したことを紹介)

・七草粥についての巻

(1月7日に食べる七草粥についての説明や歴史を学んだ)

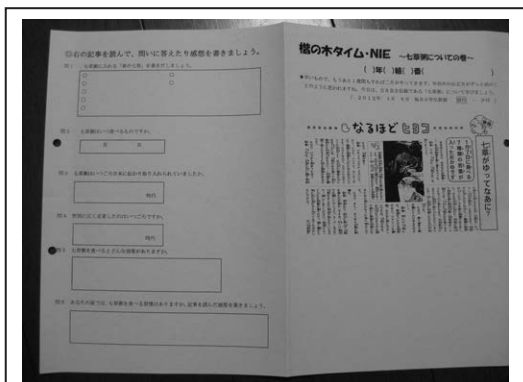
・落語についての巻

(1年の国語科で学習した落語をしたじきに加古川市で行われる寄席の紹介)

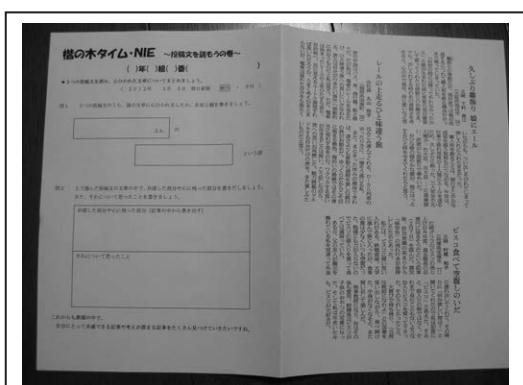
・投稿文の紹介

(新聞各紙の投稿文に掲載されたものをいくつか選び、自分の好きな投稿文についてまとめたり感想を書かせた。)

〈ワークシートの紹介〉



右の新聞記事を読み、左の問題に答えるようになっている



3つの投稿文から自分の心に残った部分を書き出し、感想を書く

○ 「ひょうご新聞感想文コンクール」への参加

夏休みの課題として、「ひょうご新聞感想文コンクール」の課題を出した。3年生では必修課題、1・2年生では自由課題とした。

課題に取り組むにあたって、権の木タイムでの学習を振り返りつつ、最近取り上げられているニュースについて話したところたくさん感想文が提出された。

生徒が感想文に選んだ新聞記事として多かったものは、野球やサッカーなどのスポーツ欄の記事や野田内閣についてのものが多く見られた。また、将来医師になりたいという夢を持った生徒が医師のインタビューの記事を取り上げ、感想を書いていた作品も興味深かった。

さらに、自ら進んで新聞記事を大学ノートに貼り付けスクラップブックを作った生徒もいた。感想文を書くだけに終わらず夏休み中の出来事をまとめた力作であった。

○ 投稿文をふまえて

～自分の意見はどちらだろうか～

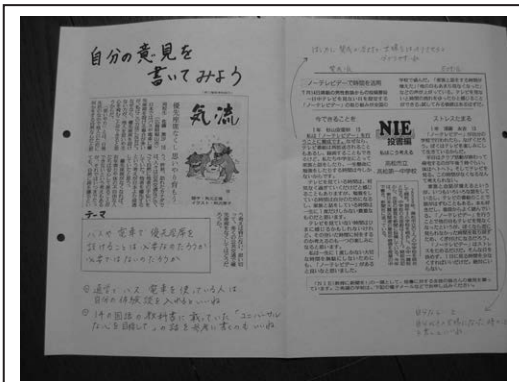
国語科で「ユニバーサルな心を目指して」という単元を学習したのを機に、身のまわりのバリアフリーやユニバーサルデザインについても学んだ。その際、新聞の投稿文で「優先座席」について必要か不必要かの是非について論じたものがあり、それについて、自分の意見はどちらの立場なのかを考えさせた。

本校では、電車やバスを利用し登校している生徒もおり「優先座席」は毎日目にする身近なものである。意見文を書くにあたって、自分の公共交通機関の利用の仕方を振り返ると共に、高齢者や妊婦、障害を持っている人やけがをした人など様々な人の立場に立って考えるいい機会にもなった。

4、実践の感想と今後の課題

〈学習展開〉

- ①「意見文」の書き方を理解する。(1時間)
- ②教科書の「ユニバーサルな心を目指して」の筆者の意見と自分の意見とを比べてみよう。(1時間)
- ③生徒の書いた意見文を紹介し、意見文の書き方について確認する。(1時間)
- ④新聞の投稿文を読み、「優先座席は必要かどうか」について考え、意見文を書く。(1時間)



優先座席の是非についてのワークシート

〈意見文の掲載〉



読売新聞にて3月3日に掲載された

○ NIEの実践の成果

NIEを実践したばかりの頃は、新聞を手にもあまりとらないという生徒が多かった。見てもテレビ欄やスポーツ欄だけという声も聞かれる中、新聞各紙の工夫や面白い記事を紹介すると、新聞のクイズに夢中になる生徒やテレビ欄・スポーツ欄以外の面も目を通すようになった。

また、初めは紙面の文章の配置の順が分からず読むのに苦労していた生徒も次第に慣れてすらすらと読めるまでになった。新聞を読むことにより新しい発見や自分の考えを深めることができるようになってきたと実感できたのは、生徒たちが書いた投稿文からである。様々な世代の人が書いている投稿文を読むことにより、色々な考えに触れることができたのであろう。自然の移り変わりに気づくことができるようになったり、親や教師に普段いえない感謝の気持ちを綴る者もいて嬉しく思ったものである。

また記事をきっかけに、七草粥はあまり食べないが、節分の時には豆まきをし、恵方巻きを食べている家庭が多いなど生徒たちの家庭での過ごし方なども知ることができ、生徒理解にも大変助かった。

○ これからの課題

今年度は、初めに比べ生徒たちが新聞に慣れ親しめたが、教師が一方的に新聞記事を選び生徒に投げかけることが多かったように思う。これからは、生徒たちが自分たちで新聞記事を選び、お互いに紹介しあったり、自学自習のための資料として活用していけるような授業作りや教材づくりをしていきたい。

「研究テーマ」

『自分で考え、自分の意志で行動できる生徒の育成』

～「伝え合う」力の育成を通して、「学びに向かう集団づくり」～

兵庫県加西市立泉中学校 主幹教諭 山田 明

はじめに

本校の生徒の特徴を表現すると、

- ・授業には真剣に取り組むが、基礎基本の定着が不十分な生徒もいる。
- ・真面目で素直ではあるが、自己の考えや判断で行動することが苦手である。
- ・自分の思いを表現する力が乏しく、思いを上手に伝えられない。

等があげられる。

そこで数年前から上記の研究テーマを設定し、「伝え合う力」は“学び合い”や“教え合い”の前提となる力、この「伝え合う力」を鍛えることで、わからないことを恥ずかしくらずに「わからない」といえる集団づくりを目指している。

平成23年度にNIE実践指定校に選ばれたのを機に、従来の研究推進にNIE活動を加え、「語彙力」を高め、「思考力」「判断力」「表現力」の育成を行う。その中で、“自己表現”“他者理解”を進め、「学びが自分だけにとどまらず、仲間を広がっていく状態」を目指すことにした。

1. 初年度の活動

【職員間の意識の高揚】

まず最初に取り組んだのは、“NIE”に対する教職員の意識を高めることである。本校では、総合学習の一環で“NIE”に取り組む計画であるため、全職員の共通認識のもとで実施しなければ効果はあがらない。

“NIE とは何か”という疑問を解消するため、「新聞授業ガイドブック」を教職員の目につく場所に置くとともに、“今なぜNIEなのか”というプリントを全職員に配布し“NIEの取り組み”についての理解を求めた。

その上で、「生徒に読ませたい」「読んで欲しい」「意見を聞きたい」または、「教師間で読んでもらいたい」という記事を共有するために、“NIE活用資料入れワゴン”を職員室に設置した。



《NIE活用資料入れワゴン》

【ワークシートの活用①】

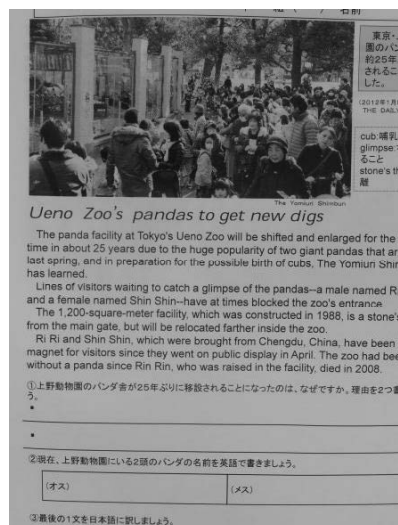
具体的な生徒への取り組みとしては、読売新聞の“学びのポータルサイト”「ワークシート通信」を活用した。

毎週5点の「ワークシート」をプリントアウトし、自由に選ばせ持って帰らせた。生徒が新聞記事に親しむ機会づくりと考え、チャレンジするのも自由であれば、提出するのも自由という気軽さが手伝ってか、毎週15～20枚程度の提出があり、そのつど意見コーナーに掲示した。



《回収箱はふたを持ち上げると投入口が現れる》

5点のワークシートの内、一番人気が高かったのは、英文ワークシートである。提出の



数こそ少なかったが、毎回15枚ずつ入れていたシートは常に空になるほどであった。

【職員研修の実施】

NIE 活動について十分な知識がない教職員が多いため、夏休みに2つの職員研修を行った。

(1) 「正確な情報を伝えるために」

講師 元神戸新聞社 NIE 推進室長

一木 仁 氏

一木先生には、新聞活用で身につく力をを説明いただくとともに、情報を正確に伝えるための基本を記者としての立場から講義いただいた。

特に「5W1H」を活用したワークショップを行い、文の深さやおもしろさは“WHY”と“HOW”であることが多いという言葉が印象に残った。

(2) 「話し合う力を磨く」

講師 NHK 放送教育センター

岡留 正嗣 氏

この研修会は、NHK 放送教育センターが主催する「先生のためのことばセミナー」を利用し、本年度で2回目となる。

昨年度は、「情報を整理し、わかりやすく話す」ためのスキルトレーニングを全職員で受講した。本年度は“話し合いで自分の考えを広げ、深め、

《研修風景》

新たな価値を見いだすための手法”を求め、実践トレーニングを実施した。



話し合いでのルールや役割を決めることの重要性や、アイデアを生み出すための話し合いでは、“質より量” 思いつくまま発言させること、意見の分類や整理の仕方について学ばせてもらった。

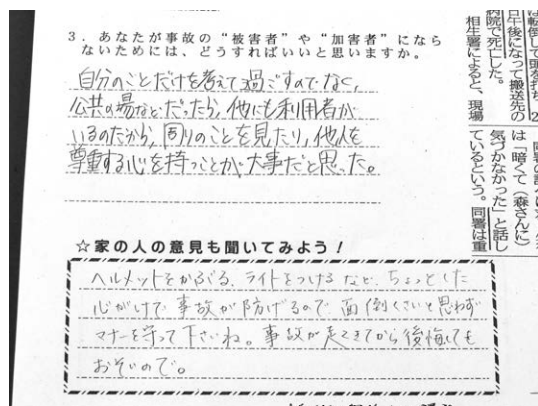
【見出しコンクール】

少しでも新聞に親しむ機会づくりの一環として、「新聞感想文」を国語科の夏休みの課題として設定してもらった。“最初は嫌々ながらも新聞を広げ眺めていたが、読んでみるとなかなか面白い記事もあった” という感想を持つ生徒も現れている。

また、新聞のコラムを利用した「校内見出しコンクール」を実施し、内容に適した面白い“見出し”を全校朝集で表彰した。

【NIE の日の設定】

「新聞は多様な意見に触れることができ、社会への視野を広げることができる PTA として NIE の活動に参加できないか」という PTA 役員の声で、毎月 21 日を“NIE（ニイ）の日”として設定した。“NIE の日”では、全校生徒に「ワークシート」を配布し、保護者へは、その下段に付け加えた「保護者の意見欄」への参加を呼びかけた。



《NIEの日ワークシート》

NIE の日に配布した「ワークシート」は、すべて回収し担任が目を通した。また、各クラス数点を職員室前の“意見コーナー”に掲示し、みんなが読めるようにした。



《意見コーナー》

生徒にとっては、一番身近な保護者の意見や考えに触れる機会となり、また、保護者にとっても、子どもと共通の話題で会話する場の提供に繋がるなど、家庭での交流にも役立っている

【教育講演会】（記者派遣事業の利用）

記者派遣事業を利用して、12月20日に神戸新聞社 編集委員 田中伸明 氏による、生徒と保護者対象の教育講演会を実施した。

演題

「命の重さ、助け合うことの素晴らしさ」
～ 2大震災を取材して ～

講師先生との意見交換会も含んだ「講演会」に向け、一週間前から事前学習会を計画した。2大震災に関連した新聞記事による「ワークシート」を一日2枚ずつ配布し（計10枚）、次の日に意見交換会を班内で実施した。この「ワークシート」には保護者の意見欄もあり、

多くの意見に触れることで“他者理解”を進め、自分の考えをまとめていく上でも、大変意義深い一週間となった。



《田中編集委員との意見交換の様子》

2. 成果と課題

本校においては、PTA 活動の一環としても“NIE の活動”に協力いただいているため、保護者の理解・関心度も比較的高い。

年度末に行ったアンケート結果では、約半数の生徒が「新聞記事を見る機会が増えた」と答えている。また、約7割の生徒が新聞記事について保護者と会話を持っているという結果が得られた。

本年度は、手探りの状態でスタートさせた「NIE の活動」であったが、“新聞に親しむ機会づくり”という点では、当初の目的を達成できたのではないかと思う。

「ワークシート」による意見交換会を実施したことは先に述べたが、意見交換会を重ねるごとに、「自分の意見と比べながら聞く」「情報を整理し、筋道を立てて伝えようとする」等の姿勢が見受けられるようになり、ある程度の手応えを感じた。

しかしながら、

『自分で考え、自分の意志で行動できる生徒の育成』

～「伝え合う」力の育成を通して、

「学びに向かう集団づくり」～

という、“研究テーマ”にせまるため、効果的な NIE 実践が行えたかどうかは疑問であり、まだまだ研究の余地が残っている。

NIE 実践指定2年目となる来年度は、地域や保護者の理解と協力のもと、“他者理解”を深め、“自己表現力”を高めていくための更なる取り組みに挑戦する。そして、自分一人が分かるのでなく、それが周りに広がっていく状態、すなわち「学びに向かう集団づくり」に向け研究を推進していく。

新聞のもつ力を様々な活動に活かす

兵庫県高砂市立高砂中学校・校長・神尾信作

1 はじめに

来年度から中学校においても新学習指導要領が本格的に実施される。基礎的な知識・技術を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成が求められている。いわゆる活用型学力の育成・向上が重要視される。その基盤となるのが「言語力」である。「言語力の育成」は国語科をはじめ、全ての教科・領域において取り組まなければならない。1月末のマスコミ報道によると、「文科省は12年度から始める『学校図書館整備5カ年計画』などで、全国のすべての小中学校と特別支援学校に新聞1紙を置く予算(15億円)を確保した」とあった。NIEが学校教育に占める役割は年々増加していると実感している。

本校は各学年2学級、特別支援学級2クラス、生徒数227名の小規模校である。NIE実践指定校としての活動は3年目である。今年度1回目の「NIE推進委員会」では、前年度までの取組内容を振り返りながら、今年度の具体的な活動内容を考えた。特に新聞記事をはじめ文字に親しむこと、より多くの体験活動を行い、その印象・感想を文章にまとめたりクラス内や全校生徒の前で発表したりすることを組み込んだ計画作りをした。新聞コラム読み取りシート、新聞スクラップ、新聞感想文コンクールとHAPPY NEWSへの応募、弁論大会の実施、エコバッグ作り等、大まかな予定を立てた。

2 具体的な実践内容

2月にNIEに関する生徒対象のアンケートを実施した。

(1)新聞閲覧コーナーの設置

◆あなたは1週間に何日ぐらい、新聞を読んでいますか？

	1年	2年	3年
読まない	41%	38%	28%
1~2回	50%	32%	41%
4~5回	6%	9%	6%
ほぼ毎日	3%	21%	25%



上記の集計結果から明らかなように、学年毎の違いは顕著である。特に、「読まない」と回答した生徒は学年が上がる毎に減少している。その逆に「ほぼ毎日」新聞を読んでいる生徒は、2年生以降に大幅に増加している。ただし、気になる数字も散見される。

- ① 1年生の9割は新聞を読まないか、読んでも週に1~2回である。
- ② 2、3年生では新聞を読もうとする生徒の数は増えてはいるものの、あまり読まない生徒が7割程いること。
- ③ 受験直前の3年生だが、「ほぼ毎日」新聞を読んでいるのは25%に過ぎないこと。

文部科学省から、図書館に新聞がある学校は2010年に、小学校17%、中学校15%にとどまっている、との調査結果が発表され

たのは1月末であった。上記の報道や本校の現状を考え、新聞紙を手に取り、読むスペースの設置を行った。



場所は、全校生が最もよく行き来する2階職員室前の踊り場とした。生徒会の文化委員が朝刊と夕刊を新聞ラックに吊り下げたり、長机に広げたりする。昼休みの時間や放課後には、数人の生徒が連れ添って新聞記事に見入っている姿が見られるようになった。

(2) 読み取りシートで言語力の育成

毎朝 15 分間の「読書タイム」の時間を使って毎週火曜日に「読み取りシートの日」を設けた。実施内容は以下のとおりである。

[ねらい]

- ・文章を読み取る力や表現する力をつける。
- ・身近な存在である新聞コラムにふれ、要約文や感想文を書くコツを知る。

[学習の流れ]

- ① 毎週火曜日の15分間を使い「読み取りシート」に記入する。
- ② その日の内に提出し、国語科教師がチェックする。

③ 良く書けている生徒の「読み取りシート」は校内に掲示する。

④ 学期ごとに全生徒の「読み取りシート」のファイルを点検し、優秀者を表彰する。

高砂中学校国語力アップへ向けて
新聞コラム『読み取りシート』への取り組み

文章を読み取る力は、国語学習にとって一番大切なことです。その力は、人生をより良く、豊かなものしてくれます。ぜひ、自分で学び取り、身につけてください。
文章にはさまざまなものがありますが、まず、生活に最も身近な存在である新聞のコラムを読み取るトレーニングをしましょう。
新聞のコラムには、ニュースや記者の意見などがきれいにまとめられています。そのコラムを読んで要約文を書き、感想文を書きましょう。

【参考】
《要約文の書き方》
① 本文を読むときに、**事実**と**意見**を分ける。
(たとえば、**事実**は直線を引き、**意見**は波線を引く。)

② キーワード(重要語句)を三つくらい見つけ、○でかこむ。

③ 要約文を書くときは、キーワードに関する**事実**の部分をつないでいく。筆者の**意見**は、最も重要だと思われるものを書く。

④ 要約文が書けたら、もう一度本文と読み比べ、筆者が伝えたいことと合っているかを確認する。

*注意
・コラム中の語句を使用すること。
・できるだけ、コラムの流れと同じようにまとめること。

《感想文の書き方》
① 思ったことを素直に書く。
② 一文をできるだけ短くして、まとめる。
③ 書き終わったら、必ず読み直す。

読み取り力は国語の基本！
継続こそ力なり！
全校挙げて学力アップ！
(このプリントはファイルの表紙の内側に貼る。)

平成 23 年度高砂中学校 継続こそ力につながり、自らの思考を豊かにする
新聞コラム読み取りトレーニングシート No. _____ 月 _____ 日 実施
下記の記事を読み、記事の要約も含めて感想を書こう。 学年 _____ 組 氏名 (_____)

1 要約 *1年生は、まず要約をしよう。最後に時間があれば 感想も書こう。

2 感想

3 印象的な表現

4 読みづらい書きづらい漢字語句練習

5 一日一語

(3)スクラップブック作成で読解力の育成

昨年は10月から1月まで4ヶ月連続で実施したが、今年は4ヶ月間の新聞購読期間を6月の1ヶ月と10月から12月の3ヶ月間とした。これは、年を越すと3年生が多忙となるという昨年度の反省を受けて実施期間を変更したものだ。ただし、月ごとにテーマや新聞社を変えて、「表現力、読解力」の基礎作りをする、という目標は昨年度と同様である。

[ねらい]

- ・新聞記事を通して、友だちと意見交換する中で読解力や表現力の向上を図る。

[学習の流れ]

- ①文化委員が正門に届けられた新聞を教室に持ってくる。
- ②日替わりのスクラップ当番は新聞を読み、その中からテーマにあった記事を探しだしスクラップブックに切り貼りをする。そして、その記事を選んだ理由を記入し、クラスの4人から意見を聞く。最後に、自分の意見と感想を書いてまとめとする。
- ③スクラップ当番は完成したスクラップブックを職員室に持って行く。
- ④クラス担任とNIE担当者はその日の内にチェックし、返却する。

[新聞割り当て表]

	6月	10月	11月	12月
1-1	読売	毎日	神戸	産経
1-2	毎日	読売	産経	神戸
2-1	朝日	神戸	日経	読売
2-2	神戸	朝日	読売	日経
3-1	日経	産経	朝日	毎日
3-2	産経	日経	毎日	朝日

[工夫など]

- ①月ごとにテーマを変える
 - ・自分の好きなテーマ
 - ・総合的な学習のテーマ
 - ・社説をまとめる
- ②6紙のトップ記事の違いを知る
各クラスの担当者がトップ記事を切り取り生徒玄関に張り出す。その記事を比較し、同じ内容の記事でもその表現方法や切り口の違いを認識するとともに表現力向上のヒントにする。
- ③ハッピーニュースを探す
新聞の中には必ず「ハッピーなニュース」が書かれている。それを探し出すことで、読者に喜びを与える新聞の力を再確認をさせる。

[生徒の感想]

- ・新聞を読む機会が増えた
- ・自分の意見を持つことができた
- ・社会で起こっていることが分かった
- ・国語や社会科の授業に役立った

(4)発表体験で表現力の向上

表現力の育成を求めて、文字にまとめるだけでなく、人前で発表する機会を多く持った。

①新聞感想文発表会

国語の授業で取り組んだ。新聞記事を選んで、400字詰め原稿用紙3枚以内に感想をまとめた。各学年から代表作を1名ずつ選抜し、その新聞記事と感想を全校集会で朗読披

露した。

② 弁論大会を開催

新聞やテレビ、インターネット等の報道から印象に残った題材をテーマにして弁論大会を行った。

まずクラスで代表者を選び、次に学年集会で発表し学年代表2名を選抜した。審査は教師と生徒が担当した。本番の校内弁論大会は外部審査員にご協力いただき、緊張感のある雰囲気の中で行うことができた。外部審査員には講評もしていただき、表現力の向上に役立った。



③ 体育祭川柳の創作と発表

体育祭終了後に全員が体育祭を題材とした川柳を創作し、各クラスの代表者がクラスの優秀作品7～8句を全校生の前で暗唱した。

(5) 体験学習で知識の定着

体験学習は学習者の興味関心を高める効果が期待できる。併せて、学習者同士のふれ合いの絶好の機会にもなる。

① 新聞工場での体験学習

1年生は校外学習で朝日新聞社の阪神工場を訪れ、新聞のできるまでの過程を学習した

り施設の見学をした。

② エコバッグ作り



隣接する小学校の3年生や地域の方々をお招きして、新聞紙を使ったエコバッグ作りに取り組んだ。小中連携の一助にもなった。終了時には朝日新聞社より「号外」も出していただき、新聞の情報力を生徒に実感させることができた。

3 まとめ

本校は3年間のNIEの実践を通して、新聞を使った授業実践、コラムを活用した朝の短時間の有効利用方法など、様々な学習ツールを手に入れた。それ以外にも、新聞感想文コンクールやHAPPY NEWSコンクール等の応募を目的とした活動、NIE実践指定校としての講演会やエコバッグ作り等、総合的な学習とリンクした教育活動など、多くの成果を上げることができたと自負している。

ただ、今後の課題もある。新教育課程では授業内容が大幅に増える。その中で、今年まで取り組んできた体験的な学習や講演会が同様に実施できるのか。新聞を手に取り読むだけでなく、読んだ記事の背景にはどんなことがあるのか、そこまで踏み込んで考えさせる丁寧な学習ができるのか。一つ一つの課題に向き合い、全校を上げて計画的に且つ継続的に取り組む必要がある。

【 中学・高等学校 】

NIEを通じて、中高生の社会への興味・関心を高め、学力を身につける

武庫川女子大学附属中学・高等学校 社会科教諭 田村 肅

1. はじめに

本校は、平成22年度からNIE実践校の指定を受けた。以下に、社会科を中心とした1～2年目の取り組み(主として2年目)と3年目への課題についてまとめる。

2. 学校全体としての取り組み ～NIEコーナー(新聞閲覧室)の開設～

平成22年2学期～ 新聞購読開始
(6紙;朝日・読売・毎日・産経・神戸・日経)

購読開始と同時に、食堂の一角を利用し、「新聞閲覧室」を開設

(目的)生徒が集まり易い食堂に設置することで、新聞に親しむ機会を増やしていく

(現状)閲覧室に入る生徒が増えない

*閲覧室活性化の活動

- ・日経写真ニュースの掲示
(写真で生徒の注意・関心をひく)
- ・生徒の活躍が掲載された新聞記事を、掲示板を作り掲示
- ・放送部の協力のもと、昼休みに全校放送で宣伝
- ・興味深い記事の特集をつくって掲示
(東日本大震災など)
- ・神戸新聞の「週刊まなび～」にジュニア記者として中学生4名が参加
- ・中学2年生の総合的な学習の一環として、共同通信社から記者派遣を受け、講演会を実施
- ・中学3年生でスクラップノートを作成
新聞をとっていない家庭の子どもはNIEコーナーでコピーをとらせる

本校のNIEコーナー



- ・平成23年度より、コピー機を設置、バックナンバー保管用の棚を設置することで、使い勝手を向上させた

3. NIE実践校の指定を受けるメリット

①. 無料で新聞が購読できる(原則2年間)

A型…教師が1人、もしくは2人で実践
新聞1銘柄につき1部を延べ2カ月

B型…3人以上の教師による実践

(本校が該当)

新聞1銘柄につき1部を延べ4カ月

新規校の場合は、指定を受けた年の9月から実施可能

継続校の場合は、4月から実施可能

本校は、生徒数が多く、中高一貫校でもある。社会科の教員全員で取り組むため、B型で申し込んだ。

②. 新聞記者の派遣

注意事項

- (1) 派遣要請は希望日の1カ月前までに
- (2) 派遣希望日は第1希望から第3希望まで伝える

- (3) 希望する話のテーマと目的を明確に
- (4) 授業の時間、児童・生徒の人数、場所を明確に
- (5) 授業する場所でパワーポイント、ビデオ（DVD）が使用可能かどうかを明らかに

③. 「めぐる君」をよぶことができる

「めぐる君」とは、取材・編集・印刷機能を備えた神戸新聞社の「新聞製作カー」のことで、マイクロバスなどを改造し、パソコン・プリンター・コピー機・自家発電機・デジタルカメラ・通信設備などを搭載している。

「めぐる君」は、A3判で毎時2,000枚印刷可能な高速カラープリンターを車載しており、NIE活動や各地のイベント現場を駆けめぐっている。

本年度は、準備の時間が非常に限られていたため、「めぐる君」をよぶ機会はなかった。来年度は本校の「体育大会」や「文化部発表会」などの学校行事に来てもらい、生徒が取材した記事を新聞にしてもらい配布するなど、色々と検討していきたい。

④. その他

各新聞社やNIE協議会などからの、NIEに関する、様々な情報の提供

4. 中学3年生の取り組み～公民・LHRの授業を通して～

①. 公民の授業において

(1)スクラップブックの作成

毎週新聞スクラップブックの提出を義務づけ、定期的に新聞に触れる機会をつくった。また、皆の前で記事についての要点、自分の考えを述べさせた。

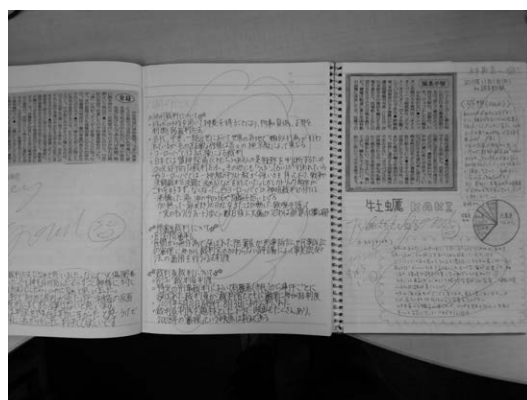
<新聞スクラップの概要>

- ・毎週、気になった記事を1週間ごとに1つ選びスクラップさせる。また、自分なりに補足することなどを調べさせ、まとめを書かせる。順番に発表もさせる。
- ・学期ごとにスクラップする記事のテーマを決める
- ・スポーツ新聞、小学生新聞は不可とする

- (例) 1 学期；自分の気になった記事
- 2 学期；各新聞のコラム
- 3 学期；経済に関する記事

なお、3学期の「経済に関する記事」は、実践後の生徒の反応を見る限り、少々難しいと思われたため、途中で「各新聞のコラム」に戻した。

生徒の作成したスクラップブック



教師側の気になる記事や、授業に関わる内容の記事なども配布し、生徒の興味・関心を促した。

(2)朝日新聞スクラップコンクールへの応募

1学期に培ったスクラップブック作りのノウハウをもとに、夏休みの宿題として、1つのテーマに沿った7日分の記事をまとめたスクラップブックを作成させた。(結果 → 佳作1名)

(3) 裁判所見学の企画

夏休みの特別講座として、社会科で裁判所見学を企画したところ、中学・高校で予想を上回る応募があったため、中学・高校で見学時期を分けて実施した。

(警報発令のため、中学は実施できず)

このような講座に多数の応募があったということ自体、社会的事象に関しての生徒の関心が高まってきているといえる。

②. LHRや総合的な学習の授業において修学旅行のまとめを新聞形式で作成(作成・発表時に読売新聞社の取材を受ける)

3泊4日の熊本・長崎への修学旅行について、新聞形式でまとめた。(個人新聞と、班新聞の二種類を文化部発表会で展示)

読売新聞社による取材風景



生徒の作成した修学旅行新聞



5. その他の学年の取り組み

・中学1年…地理の授業で新聞記事を紹介、夏休みの課題で、自分の興味のある外国についての個人新聞を作成

・中学2年…共同通信社の塩田記者をお迎えし、新聞記者の一日や、印象に残った記事、新聞記者になったいきさつなどについて興味深い話を伺った。生徒達からも、「現役の女性記者の方から具体的な話を聞けて大変参考になった」、との声が聞かれた。

塩田記者による講演会



・4名の生徒が、神戸新聞に掲載中の「週刊まなび〜」の子ども記者として、モロゾフ社の取材を行った

モロゾフ社の取材風景



・LHRや総合的な学習の時間を使い、1学期に行った合宿研修の班新聞を模造紙で作成、文化部発表会で展示を行った

展示された班新聞



- ・高校1年…教科担当から、その時々ニュースについての解説を行った
- ・高校2年…日本史の授業で、歴史に関する新聞記事をスクラップさせて提出
(夏・冬休みの自主課題)
- ・高校3年…政治経済の授業で、新聞記事をスクラップにして、月に2～3度提出
優れた内容のものは、コピーをとり、対象生徒全員に配布

6. おわりに

1年目に目標にしていた、「生徒たちが新聞に定期的に触れることで、新聞を身近に感じ、新聞を通して社会の出来事に興味関心を持たせること」については、継続して取り組んできた結果、ある程度の成果が出たように思う。特に、中学3年生は毎週のスクラップの宿題や、折にふれて新聞を使った授業の取り組みをしていたので、かなり社会的な事象に対する関心が高まった。例えば、社会科の授業で時事問題を話題にする際も、生徒から活発な意見が出るようになった。

また、2年目の目標としていた、「NIEを中学3年生以外の他学年にも広げ、中

高一貫校として中学1年から高校3年まで6年間を通じて系統的な取り組みを行い、社会科だけではなく、他教科とも連携して取り組んでいく」ということに関しては、特に中学2年生を、中学3年生への事前学習期間とすることで、結果が出てきた。そのために、中学2年生で新聞を使った取り組みを、かなり積極的に行った。また、家庭科でも食に関する新聞記事を授業で積極的に取り上げていくなど、様々な教科で新聞は活用されている。このような取り組みを、来年度につなげたい。

3年目の目標は、「本校の中学3年生を終了した時点で、皆が新聞を読めるようになり、高校生でも継続して新聞を読める生徒を育てていく」こととした。

本校の高校1年生では、世界史Bを学習しているが、複数の生徒が「昨年度と同じようにスクラップノートを作って提出し、自主学習したい」と教科担任に申し出てきている。

学校全体で、新聞を活用し、生徒の力を伸ばしていくという目標は、着実に結果を出している。今年度は、その集大成として、さらに徹底した指導を行いたい。

新聞記事から討論テーマを探し、憲法を学ぶ

甲子園学院中学校・高等学校 教諭 鎌田 隆

本校における実践の概要

【NIE ノート】(中3・高1)

各対象クラスに1冊ずつの新聞スクラップ用のノートを用意して順番に生徒に回した。このノートに新聞記事の切り貼りと感想・意見の記入をさせた。そして、現代社会(高1)あるいは、公民(中3)の授業時に記入者本人に記事の紹介を行わせた。

家庭で新聞をとっていない生徒に対しては、担任手持ちの新聞を渡したり、各教室に配布した新聞を利用させたりした。(資料1参照)

【新聞投稿】(高1・高3)

新聞各紙の読者投稿欄とりわけ若者向けのスペースの存在を確認し、積極的な投稿を促した。その際、過去に掲載された本校生徒の投稿文も紹介した。

実際に複数の生徒の投稿が掲載されたことで、新聞を身近なものに感じさせることができたと思う。(資料2参照)

【「HAPPY NEWS 2011」への投稿】(高1)

夏期休暇中の宿題として、日本新聞協会が実施している「HAPPY NEWS 2011」への投稿文の作成を課した。

7月の現代社会の補習授業時に、前年度の「HAPPY NEWS」を紹介し、実際に新聞を生徒に配布して「心が温まる記事」「ちょっと嬉しい記事」を探させてみた。生徒たちは、新聞を交換したり、相談したりするなかで、課題についてイメージを掴むことができたと思う。

この取り組みについては、本校を含めて兵庫

県下の4校に特別賞が日本新聞協会から授与された。

【新聞活用セミナー】(中1～3・高3)

6月から9月にかけて朝日新聞の「新聞活用セミナー」のモニター校として出張講座が開催された。いずれも朝日新聞大阪本社の江原健大氏が講師を務めてくださった。

中学生には、DVDやスライド、当日の朝刊などを用いて新聞を読む面白さについて分かりやすいお話があり、高校3年生には、ご自身の様々な体験談を交えて大学受験に役立つ新聞の読み方を伝授してくださった。中学生の最終講義には、朝日放送の元アナウンサー・羽谷直子さんがゲスト参加してくださり、朗読の実演などを交えながら楽しく新聞とテレビ・ラジオの違いについて学ぶことができた。(資料3参照)

【NIE ディベート学習】(高1)

ディベートの情報源として新聞を活用させることを試みた。具体的には、ディベートのテーマ(論題)を、新聞記事から材料を探して設定させた。ある問題に対する認識が、より深まるようなテーマの設定に注意を喚起してグループで検討させ、発表させた。(資料4参照)

次いで、発表したそれぞれのテーマ(論題)に基づくディベートを各班に課した。

これらの取り組みは、主に土曜日や長期休暇中の補習授業(現代社会)を活用して一部クラス(特別進学コース)で行なった。

※授業案の詳細は、朝日新聞発行の「新聞授業ガイドブック」(p.22)を参照して頂きたい。

【新聞記者の派遣講座】

記者の方の講義を聴くだけではなく、「新聞記事から憲法を学ぶ」と題して授業を行って生徒に発表させ、記者の方に講評して頂くという形で講座を企画した。

日時) 平成23年12月22日(木)
午前10時30分～12時00分

場所) 本校4階視聴覚室

講師) 朝日新聞阪神支局長 堀江泰史 記者

対象) 高校1年4組・5組生徒全員

教材) 平成23年12月21日(水)朝刊

*新聞社のご好意で生徒人数分を提供していただいた。

内容)

第1部「新聞記事から憲法を学ぶ」

・生徒の意見発表

⇒全体を6つの班に分け、日本国憲法の条文に関連付けて新聞記事を紹介する発表をさせた。

・堀江記者の講評

⇒最初に、憲法について、とても勉強になったとお褒めの言葉があり、続いて、ご自分が注目した前日の記事について、お話があった。

第2部「新聞記者から社会を学ぶ」

・記者の講演

⇒社会部記者としての様々な取材体験に基づく実感のこもったお話があり、生徒たちは熱心に耳を傾けていた。

・質疑応答

⇒生徒たちからの以下のような質問の一つ一つに丁寧に回答して下さった。

「これまでで一番印象に残っている出来事は何ですか。」

「これまでの取材で危険な思いをしたことはありますか。」

「新聞が他のメディアより優れているところはどこでしょうか。」

全体講評

当日、授業参観に来てくださった兵庫県NIE推進協議会の梶尾研三氏(NIEコーディネーター)に、全体を通しての講評を頂いた。

総括)

翌日の事後学習で感想を四択で尋ねたところ、

とてもよかった [23人]

まあまあよかった [7人]

あまりよくなかった [0人]

まったくよくなかった [0人]

という結果であった。総じて大変好評であった。生徒たちは、一見華やかに見える記者の仕事の大変さを知り、また、職業人としての使命感に感銘を受けたようである。

また、事前学習と事後学習を設定したことで、より密度の濃い学習ができたと思う。記者の方も生徒たちの態度、発表内容をととても高く評価して下さった。

【資料5】授業を紹介した新聞記事

平成23年12月23日(金)の朝日新聞朝刊

朝日新聞を教材に発表する生徒 西宮市の甲子園学院高校

H.23.12.23(金) 朝日新聞朝刊

記事から憲法考える

NIE 教育に新聞を

西宮市瓦林町の甲子園学院高校で22日、新聞を教材に使った授業があった。高校1年の女子生徒約40人が、「新聞記事から憲法を学ぶ」などのテーマで発表した。

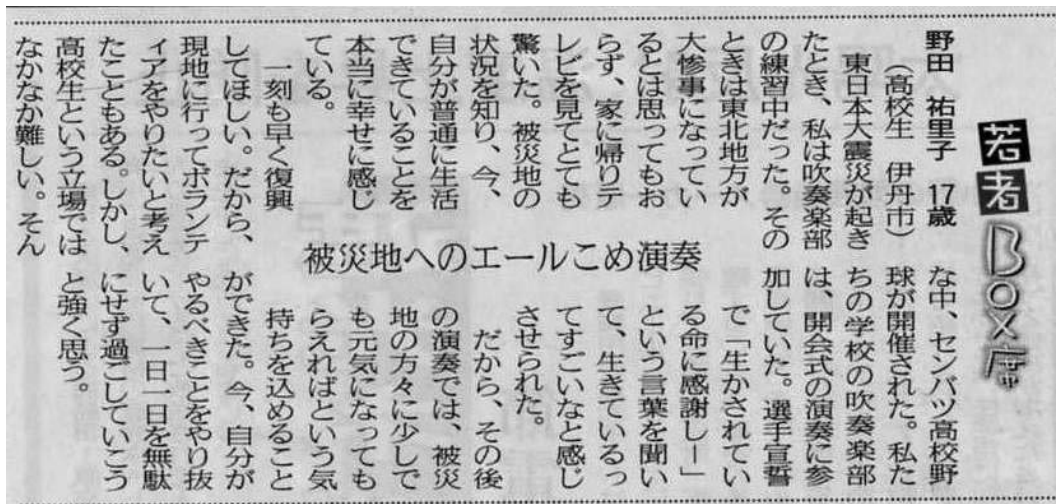
生徒は5〜6人ずつ6班に分かれ、21日付の朝日新聞に載った記事が憲法とどう関連しているかについて考えた。「消費増税 年の瀬攻防」という記事を選んだ班は憲法第30条の「納税の義務」を取り上げ、「増税で困る人が大勢います。高価な品物の消費税だけを上げるような工夫はできないか」と意見を発表した。授業には、県NIE推進協議会コーディネーターの梶尾研三さんと朝日新聞阪神支局の堀江泰史支局長も参加した。梶尾さんは「発表する人の笑顔がすばらしかった。これを機会に新聞をもっと好きになってください」と講評。授業を受けた岡田真歩さん(15)は「授業が新聞をよく読むきっかけになりました。新聞が身近になり、とっつきやすくなったように思います」と話した。

【資料1】新聞の教室配置

クラス	11月の新聞	NIE係
中学3年	毎日新聞	
1年1組	神戸新聞	
1年2組	産経新聞	
1年3組	読売新聞	
1年4組	朝日新聞	
1年5組	日経新聞	

※上記の表のように、新聞各紙を一部、月ごとに各クラスに配布する。月によって、配布する新聞を変えるようにした。日々の新聞は、毎朝NIE係の生徒が職員室に取りに来て教室の所定の場所に重ね置きした。新聞の教室配置は、6・7・10・11月の4ヶ月にわたって行なった。

【資料2】掲載された生徒の投稿文（平成23年5月12日の神戸新聞・朝刊に掲載）



【資料3】新聞活用セミナーの実施日程

中学校3学年合同

	日時	内容
1回目	6月22日（水）6限・7限	新聞に慣れ親しむ
2回目	7月28日（木）3・4限	新聞読み書き術
3回目	8月23日（火）3・4限	文章を書いてみよう！
4回目	8月24日（水）3・4限	メディアを比較してみる

高校3年4組

	日時	内容
1回目	6月24日（金）5限・6限	新聞に慣れ親しむ
2回目	7月28日（木）5限・6限	小論文対策実習
3回目	8月1日（月）5限・6限	小論文対策実習
4回目	9月9日（金）5・6限	まとめと質疑・個別指導

【資料4】NIE ディベート学習で使用したプリント

現代社会・NIE学習「新聞記事から論じる」報告用プリント

クラス _____ 番号 _____ 氏名 _____
 第 _____ 班 / 授業日時： _____ 月 _____ 日 () 限実施

新聞名・日付 記事の見出し	() 新聞 () 月 () 日付 (朝 夕) 刊 『 _____ 』
討論のテーマ	『 _____ 』
担当班の役割分担	進行係 () 肯定側 () 否定側 ()
討論前の自分の立場・意見とその理由	肯定 (賛成) _____ 否定 (反対) _____ (理由: _____)
主な肯定意見	・ _____ ・ _____ ・ _____
主な否定意見	・ _____ ・ _____ ・ _____
討論後の教室での肯定・否定の人数	肯定: _____ 人 否定: _____ 人
討論の評価 (5段階で)	主張の明確さ⇒ 5 4 3 2 1 応答の適切さ⇒ 5 4 3 2 1 進行の円滑さ⇒ 5 4 3 2 1

【 高 等 学 校 】

「研究テーマ」

新聞を活用して「書く」力を身につける ～読み手に伝わる文章を書くために～

兵庫県立柏原高等学校 北川昌生

1 はじめに

授業の中で、小論文を書かせたときに、しっかりと文章を書くことのできる生徒はどれほどいるだろうか。

本校では、国語や総合的な学習の時間において小論文を書かせているが、読み手に伝わりやすい文章を書ける生徒は非常に少ない。

では、なぜ読み手に伝わる文章が書けないのだろうか。実際に生徒たちの書いた小論文を見ていく中で、いくつかの課題がわかってきた。まず、自分の意見が曖昧である、ということである。小論文の中で、自分の意見を明確に示すことができず、論点がはっきりしない。そのため、自分の考えがあったとしても、読み手に十分に伝わらないのである。次に、意見に対する根拠が不十分である、ということである。意見があっても、それを支える根拠が十分に書けず、読み手を納得させる文章にならないのである。最後に、文章の構成がしっかりとしていない、ということである。構成がしっかりとしていないために、支離滅裂な文章になってしまい、意見や根拠があったとしても、読み手に伝わりにくい文章になってしまっている。

このような現状を踏まえ、何とか読み手を意識して文章を書けるようにすることはできないのだろうか、と考えた。

そこで、意見や根拠、文章の構成などをもとに学習できる教材として新聞が有効であると考え、NIEの実践の中で、書く力を身につけさせる実践を行った。本稿では、その実践内容とその実践を通して見えてきた成果と課題について報告したい。

2 実践の概要

対象・時期

今回の実践は、2年生の2学期の総合的な学習の時間で行った。

本校は、この時期の総合的な学習の時間に各教科でそれぞれ講座を開講し、生徒の希望によって講座を受講する形をとっている。

その中で、「新聞を活用して書く力を身につける」ことを目指した講座を開講した。

対象生徒は、この講座を希望した17人の生徒（2クラス開講だったので、9人のクラスと8人のクラス）を対象に実践を行った。

新聞の配置

新聞6紙は、実践時期に合わせて9月から12月の間、学校に配置された。

配置場所は、新聞6紙とも教室棟から職員室を結ぶ渡り廊下に配置した。この渡り廊下は、職員室や図書館へ行く際に閲覧できる場所であり、実践の該当学年である2年生だけでなく、全校生徒が閲覧できるように配置した。

また、廊下の広さもゆったりとしていて、日当たりもよく、気軽に生徒が閲覧できる環境でもあった。

単元とねらい

新聞を活用して「書く」力を身につける
～読み手に伝わる文章を書くために～

- ①新聞記事を読み、読み手に伝わりやすい文章を書くために必要な事項を学ぶ。
- ②読み手を意識して、書き手の意図がわかりやすく伝わるように新聞を作成する。

単元計画

- ①新聞記事の比較読みを通して、記事作成の基本事項（5W1Hなど）や新聞による表現の違いを学ぶ。（3時間）
- ②元新聞記者の方の講義を通して、構成や見出しについて学ぶ。（1時間）
- ③記事の見出しを隠し、内容や写真から見出しを考える。（1時間）
- ④社説を参考にして、意見と根拠を明確にして意見文を書く。（1時間）
- ⑤漢詩を手がかりにして、文章の構成（起承転結）を学ぶ。（1時間）
- ⑥これまでの学習を踏まえて、学校新聞を作る。（2時間）

各時間の授業展開

第1時

【学習目標】

- ・記事の比較読みを通して、同じ内容を扱った記事でも、新聞社ごとに共通点と相違点があることに気づく。

【授業展開】

導入	<p>・ 本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時から、新聞を活用して学習していくことを告げる。</p>
展開	<p>・ 新聞記事の比較読みをする。</p> <p>①ワークシートと新聞記事のコピーを配布する。</p> <p>②新聞記事を見ながら、共通点や相違点がないかを探し、ワークシートにまとめさせる。</p> <p>③各自でまとめたものを全体で発表させ、自分のものと比較させ確認させる。</p>
まとめ	<p>・ 本時のまとめをする。</p> <p>①同じ内容を扱った新聞記事でも、新聞社によって共通点と相違点があることを確認する。</p>

第2時

【学習目標】

- ・新聞記事の共通点の比較を通して、新聞記事の中に5W1Hが含まれていることに気づく。

【授業展開】

導入	<p>・ 本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時は、前時にまとめた共通点にはどのような特徴があるのかを考えていくことを告げる。</p>
展開	<p>・ 共通点の比較をする。</p> <p>①前時にまとめた共通点を見直して、どのような共通項目があるのかを考察させる。</p> <p>②各自で考察したものを全体で発表させ、自分のものと比較させ確認させる。</p> <p>③新聞記事には基本的には5W1Hが含まれていることを確認し、自分の抜き出した共通点の中に5W1Hが含まれていたかどうかを確認させる。</p>
まとめ	<p>・ 本時のまとめをする。</p>

- ①新聞記事の共通点として、5W1Hがあることを確認する。



第3時

【学習目標】

- ・新聞記事の相違点の比較を通して、それぞれの記事には書き手の意図があることを理解する。

【授業展開】

導入	<p>・ 本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時は、第一時でまとめた相違点の比較をしていくことを告げる。</p>
展開	<p>・ 相違点の比較をする。</p> <p>①第一時にまとめた相違点を見直して、どのような違いがあるのかを考察させる。</p> <p>②各自で考察したものを全体で発表させ、自分のものと比較させ確認させる。</p> <p>③同じ内容を扱った記事でも、どの部分に注目しているのか、など書き手の意図によって違いがあることを確認する。</p>
まとめ	<p>・ 本時のまとめをする。</p> <p>①書き手によって表現方法や意図があることを確認する。</p>



第4時

【学習目標】

- ・講義を通して、新聞の文章についての基本事項を理解する。
- ・講義を通して、新聞の共通点や相違点について理解する。

【授業展開】

導入	<p>・本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時は、元新聞記者である屋敷宏明氏の講義を聞くことを告げる。</p>
展開	<p>・新聞の文章についての講義を聞く。</p> <p>①5W1Hや文体、構成、言葉遣いなど新聞を書く上で必要なことを聞く。</p> <p>②新聞記事の書き方に共通すること、また違いがあることなどについて聞く。</p>
まとめ	<p>・本時のまとめをする。</p> <p>①新聞の文章についての基本事項などの話の内容を確認する。</p>

第5時

【学習目標】

- ・効果的な見出しについて理解する。

【授業展開】

導入	<p>・本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時は、見出しについて学習していくことを告げる。</p>
展開	<p>・見出しについての基本事項を確認する。</p> <p>①見出しには次のような内容が必要であることを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○記事のポイントをつかむ ○短い言葉で的確に表現する ○読者をひきつける工夫するなど <p>②上記の内容を踏まえて記事の見出しを比較し、どの見出しがよいかを考えさせる。</p> <p>・記事から見出しを考える。</p> <p>①生徒にワークシートと見出しを隠した記事のコピーを配布し、どのような見出しがよいかを考えさせる。</p> <p>②各自でまとめたものを全体で発表させ、自分のものと比較させる。また、本来の見出しも提示し、自分のものと比較させる。</p>
まとめ	<p>・本時のまとめをする。</p> <p>①記事の内容を効果的に伝える見出しとはどのようなものか、ということについて学習したことを確認する。</p>

第6時

【学習目標】

- ・意見と根拠を明確にして意見文を書くこ

とができるようにする。

【授業展開】

導入	<p>・本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時は、社説を参考にして、意見文を書くことを告げる。</p>
展開	<p>・事実と意見を見分ける。</p> <p>①ワークシートを配布し、それぞれの段落が事実を書いているのか、意見を述べているのか、見分ける。</p> <p>②社説などには、事実だけではなく意見が書かれていることを確認する。</p> <p>・意見文を書く。</p> <p>①社説にならって、事実をもとに自分の意見をまとめ、意見文を書かせる。</p>
まとめ	<p>・本時のまとめをする。</p> <p>①意見文を書くときには、意見と根拠を明確にして書くことが必要であることを確認する。</p>

第7時

【学習目標】

- ・文章の構成について理解する。

【授業展開】

導入	<p>・本時の学習内容を知る。</p> <p>①本時は、文章の構成について学習していくことを告げる。</p>
展開	<p>・文章の構成についての基本内容を学ぶ。</p> <p>①三段構成、四段構成の説明をし、本時は四段構成について勉強していくことを確認する。</p> <p>・グループごとに「静夜詩」、「勸酒」の一句ごとの訳詩のカードの並べ替えをする。</p> <p>①グループ内でしっかりと意見を交換して考えさせる。</p> <p>②どのような「起承転結」になっているのか理由を考えて書かせる。</p> <p>・「静夜詩」、「勸酒」の本来の並べ方の説明を聞く。</p> <p>①プリントを配布し、二つの詩のカードの本来の並べ方と、その「起承転結」の構成を説明する。</p>
まとめ	<p>・本時のまとめをする。</p> <p>①カードの並べ替えを通して文章の構成について学習したことを確認する。</p>

第 8 時

【学習目標】

- ・見出し、構成など読み手を意識して新聞を作成する。

【授業展開】

導入	・本時の学習内容を知る。 ①これまでの学習を踏まえて、新聞作りをすることを告げる。
展開	・新聞作りに取り組む。 ①さまざまな新聞を参考に、新聞の1面を作る。 ②記事の内容は、「柏原高校」に基づくものとする。 ③記事だけではなく、コラムや社説を掲載してもかまわない。
まとめ	・本時のまとめをする。 ①新聞作りには、これまで学習した内容を踏まえて作成する必要があることを確認する。

第 9 時

【学習目標】

- ・見出し、構成など読み手を意識して新聞を作成する。

【授業展開】

導入	・本時の学習内容を知る。 ①前時に続いて、新聞作りをすることを告げる。
展開	・新聞作りに取り組む。 ①さまざまな新聞を参考に、新聞の1面を作る。 ②記事の内容は、「柏原高校」に基づくものとする。 ③記事だけではなく、コラムや社説を掲載してもかまわない。 ④本時で新聞を完成させる。
まとめ	・本単元のまとめをする。 ①本単元で学んだことを生かして、読み手を意識した文章を今後も書いていくように告げる。

3 成果と課題

今回、新聞を活用することで、読み手を意

識して文章を書く力を身につけさせる実践を行った。その中で、新聞を活用したり、参考にしたりすることで、意見や根拠の曖昧さや文章構成などの課題がいくらか克服されたように感じられる。特に、読み手を意識して、自らの意図をいかに伝えるのか、という意識が生徒の中に芽生えたことが大きな収穫である。

しかし、今後の課題となる部分も多く残った。

まず、単元の時数が限られていたことである。今回の実践は2学期の「総合的な学習の時間」という限られた時間の中で行った。そのため、当初の予定通りに進める必要があり、生徒が理解しきれていない部分があっても、次に進んでいかなければならず、生徒が理解できない部分に多くの時間を費やすことができなかった。全体の計画をもう少し工夫する必要があった。

次に、最終的な取り組みについてである。限られた授業時数などから新聞作りを単元のまとめという位置づけにした。確かに、読み手を意識して文章を書く意識を生徒たちに持たせることにはつながったが、その意識を小論文の作成などに生かすことができなかった。生徒にとって、より身近で進路に関係するものは小論文である。そのため、新聞作成にとどまらず、小論文技術につながるまで実践を行えばよりよい実践になったであろう。

最後に、今回の実践は、2年生の2学期の総合的な学習の時間で行ったもので、時期にしても、対象生徒にしても、非常に限定的な取り組みになってしまった。今回この講座を選択した生徒だけではなく、他の多くの生徒も読み手を意識して文章を書くことはできていない。また、講座を選択した生徒であっても今回の実践だけで終わってしまえば、意識が薄れていってしまうことは明白である。そのため、普段の授業の中で、今回の実践のような取り組みを入れていき、継続的に行うようにしなければならない。そうすることで、学習者自身の表現活動につなげていくことができる。

以上、今回の実践の成果と課題である。今回の実践は、手探りではじめた部分も多く、成果よりも課題が多く残る結果となってしまった。しかし、今回の実践を読み手を意識した文章作成の第一歩と捉え、生徒の表現力を伸ばす授業を今後も続けていきたいと考える。

「研究テーマ」

新聞を活用した総合的な学習の時間「探究入門」の取組

～対話と熟議による言語運用能力の向上と科学的リテラシーの育成～

兵庫県立三田祥雲館高等学校 教諭 宮下巨樹

1 はじめに

本校は全日制による単位制普通科の高等学校として、平成14年4月に開校した。単位制とは、平たく言えば、生徒一人一人が自分の学習内容をデザインして履修科目を選択し、自分オリジナルの時間割を作り、進路実現を目指して勉強に取り組むシステムである。

単位制が本校教育活動の一つの柱だとすれば、開校当初より学校全体で取り組んでいる「探究活動」がもう一つの柱である。生徒たちが自らの興味・関心や進路希望に応じてテーマを設定し、グループ研究や個人研究を通して問題解決能力を身に付ける、本校独自の学習プログラムである。1年次では週に1時間（「探究入門」）、2年次・3年次では週に4時間を探究活動に配当して、全職員が授業を担当している。

この学習プログラムを通して、研究テーマの内容理解を深めると同時に、生涯にわたって活用できる「学び方」を学ぶことを目標としている。具体的には、新学習指導要領が発表される以前より「言語力」の重要性に着目し、「言語運用能力の向上」と「科学的リテラシーの育成」を目指している。また、この学習を通じて、自己の将来を社会との関係性の中で捉えなおし、キャリア意識を育てることに主眼を置いている。

このようなねらいをもって学習プログラムを展開している本校にとって、NIE実践指定校となることの意義は大変大きい。活字で

書かれた情報コンテンツを活用して社会に対する認識や知識を充実させるとともに、新聞記事を、批判的・客観的に読むことを通して「言語運用能力」と「科学的リテラシー」を涵養できる教材として活用できるからだ。

以下に、取組の概要を記すとともに、今後の課題を付記して、本年度の実践報告としたい。

2 新聞活用のための「探究入門」年間計画

「探究入門」は1年次生全員がHR単位で学習する、本校の「総合的な学習の時間」の一部である。1年次の7クラスに2名ずつ担当者を配置し、計14名の教員が授業を担当する。担当者が各クラスの様子や学習への取組の状況等を把握しながら、ある程度学習内容への裁量をもって授業づくりができるよう、下記の「新聞（NIE）を活用した探究入門グランド・デザイン」（以下、グランド・デザイン）を示し、共通理解を図った。

新聞(NIE)を活用した探究入門グランド・デザイン

目標

- (1) メディア（新聞）が発信する情報を正確に読めるようになる。（受信型メディアリテラシーの育成・向上）
- (2) 説明的・実用的かつ客観性の高い文章の書き方を学ぶ。
- (3) 新聞を題材に今日的で討論のテーマになりうる課題について討論することで、討論のしかたや

ルールを学ぶとともに、言語はもとより、人間関係形成能力を含むコミュニケーション能力を向上させる。

概観的単元計画

1st term [高校ではどのように学べばよいのだろうか]

(6h 4月) HR単位で実施

- a. 従来どおり実施 (OR合宿とも関連させて)
- b. 情報編集スキルの育成 (ブレインストーミング、KJ法、討論、ポスター作成・発表)

2nd term [探究活動の学び方]

(1~2h 4~5月 G.W.前後) 大講義棟で実施

- a. 教員の側から、探究入門 (及びその他の探究全般) の学び方についてレクチャー=学びの要求を高める。
- b. 生徒に学び方を『教える』。
- c. 家庭学習や予習と授業との関わりを説明し、祥雲館での学習の仕方の一貫性を強調する。

3rd term [情報読解・客観性の高い文章の書き方]

(15h 5~10月) 20人×14講座で実施

- a. 新聞記事に関する疑問や課題を教員と討論。
 - ・教員と討論→グループ討論に発展できるとなおい。
 - ・なぜその記事はわかりにくいのか?・わかりやすくするには?などを討論。
 - ・記事の中のデータや数字の真実を見抜く。
 - ・新聞記事を書き直してみる。
- b. 自分たちで、事実を伝達するような客観性の高い文章を書いてみる。(夏休み)

4th term [議論・討論で学びを深める]

(15h 11~2月) 20人×14講座で実施

- a. 新聞記事を題材に、教員主導で討論を実施する。
 - ・討論で学びが深まることを実感する。
 - ・討論のルールを学習する。
 - ・モラルジレンマを含むような討論の題材を設定する。
- b. グループで討論に移行していく (題材・テーマは教員が設定)。

- ・討論の結果を全体に報告する。
 - ・グループでの討論結果の報告には、祥雲館論理構成メソッド (「事実→結論→論証」) を活用する。
- c. 最終的には、グループで題材・テーマを選択・設定し、討論する。
 - ・グループでの討論結果の報告には、祥雲館論理構成メソッド (「事実→結論→論証」) を活用する。
 - ・題材の選び方、問いの立て方を学ぶ。
 - ・グループが選んだ題材について、当該グループ主導で全体討論会をしても良い。
 - d. a~cまでの内容のうち1つを選択し、「記事」と「社説 (自分の意見)」を新聞記事風を書く。
 - e. 発表会等で学習結果の共有を図る。

このグランド・デザインを具体的な教材にするため、担当者のうち7名による教材作成のためのプロジェクト・チーム (以下、PT) を発足させ、年間20回に及ぶ会議を行った。NIEにより提供される新聞等を担当者が読み込み、新聞記事の選定、指導方法の確定、評価の在り方等を具体的に検討した。

3 授業づくりの基本方針

(1) 「新聞記事」の位置付け

「新聞記事」は、本校独自の学びを深める中心的な教材と位置付けて活用した。つまり、「新聞を学ぶ」ではなく、「新聞で学ぶ」もしくは「新聞から学ぶ」スタンスで新聞を扱うこととした。

(2) 記事・テーマ選定の方針

上記(1)を達成するため、記事は難易度、分量ともに、高校1年生にとっては読み応えのあるものを選定することとした。また、思考や考察を深めさせられるよう、モラルジレンマが含まれるものを教材とした。

(3) 対話型授業の重視

新聞記事を個人で読み込んだ後、生徒と担当教員、もしくは生徒同士で対話や熟議、議論をする機会を多く設定した。今話題の「マイケル=サンデル教授」の手法を、少しでも取り入れようと試みたのである。具体的には、一人ではわからないことをグループで解決したり、一人一人が持つユニークな視点をクラスで共有するなど、記事の内容を深く読み込み、考察することを期待した。また、教員が発問したり、生徒の疑問にヒントを与えたりすることで、高校生だけでは到達できない思考や考察を得ることを目指した。

4 具体的な授業展開

本章では、実際の授業の展開例を、上記ブランド・デザインに沿って紹介する。ブランド・デザインを適宜、参照願いたい。

(1) 3rd term [情報読解・客観性の高い文章の書き方]の展開

①学習のテーマ

上記「3 授業づくりの際の基本方針」に従い、教材を作成した。PTでは、昨年3月の東日本大震災を受け、3rd termの大テーマを「命の大切さ」とすることで一致した。

②使用した教材（新聞記事）

- ・東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故に関する記事（複数）
- ・こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）設立者へのインタビュー記事
- ・子どもが脳死した場合の臓器提供の是非に関する記事（複数）

上記の3種類の記事（学習課題）について、各3～4時間かけて内容を深めて行った。

③授業展開と成果

いずれの場合も、はじめに個人ワークとして記事の精読を課した。わからない語句を調べ、疑問点を書き出し、データなどのあいまいな部分に気づいた場合はその点も記録するように指導した。

次に、個人ワークを受けて、クラス全体やグループ（4～5名）内での討論を通して、記事への理解や疑問点、様々な視点について共有した。また、他者の疑問について、クラス全員で意見を交換し、ある一定の「答え」を見出すことも多くあった。生徒は、チームで考えることの強みを体験することができた。



複数の新聞を広げて記事と比較するグループワーク

同じ事柄に対する複数の記事と比較することも、内容理解を深めるために有用であることも認識できた。新聞社ごとのスタンスやデータの相違点等を比べることで、一つの事柄に対していろいろな視点を持つことの大切さが理解できた様子だった。

④授業展開の課題とその克服

上記のような授業を展開する中で、最

も大きな課題が、いかに生徒に発言させるか、ということであった。おとなしく、まじめに授業に取り組むが、自分の考えを発言するのは苦手な生徒が多いのは、本校に限ったことではないだろう。

そこで担当者たちは、ロールプレーや問答法ゲームなど必然的に発言しなければならないような様々な手法を考え出した。

当初は戸惑っていた生徒たちも、回を重ねるごとに快活に発言するようになっていった。また、その発言からは、記事を理解した上で、自分の考えをしっかりと構築できていることが推察できた。

(2) 4th term [議論・討論で学びを深める]の展開

①テーマ・記事の選定

前述の(1)では、主に教員主体でテーマや使用する新聞記事の選定を行ったが、生徒たちが新聞記事を使った学習に習熟してきたため、テーマや記事の設定の段階から生徒主体で実施することを試みた。



図書館で自由閲覧できる新聞 記事を読み込みテーマ設定

クラスごとに様々なテーマが設定された。原発問題をさらに深めようとするクラス、北朝鮮問題に関連する国際情勢を題材にするクラス、元旦発売の各紙の社会情勢予測記事から自分たちの生きていく社会を読み取ろうとするクラスなど、様々なテーマが設定された。

②授業展開と成果

生徒主体で設定されたテーマに沿って、3rd termでの学習方法を用いて授業を展開した。

筆者が担当したクラスでは、激動する現代社会を考察し、その中でどのように生きていけばよいかを討論し、考えを深めていった。最終的には「自分社説」として自己の目指す在り方生き方を文章化し、それに対する意見交換をして学習を締めくくった。

他にも、担当教員対生徒でディベート形式の公開討論会を行ったクラスなど、生徒の特性を生かした、クラスごとに裁量ある授業展開がなされた。

5 次年度以降の課題と取組

生徒たちは、様々なことを考えるための材料とその機会（時間）が与えられれば、本当に生き生きと主体的に学習に取り組むことがわかった。また、社会で起る出来事に対して、柔軟に捉える能力と可塑性も非常に高く、それを伸ばす教育の有用性も、担当者全員が認識しているところである。そのための教材として、社会の出来事をつぶさに伝え、様々な視点を提供してくれる新聞は、効果的で、適切なものであったと考えている。

このことを踏まえ、次年度以降は、NIEとキャリア教育を有機的にさらに連関させた取組を充実させたい。つまり、社会を客観的に考察することはもとより、社会を形成する者として、社会の中に自己を位置付けて在り方生き方を考え、主体的に社会に参画する態度を育成できるようなプログラムを一層発展させようと考えている。

「研究テーマ」

学校設定科目・特別活動における新聞を使った授業の実践

兵庫県立氷上西高等学校

教諭 能地 敬典

1 NIE 導入の背景

本校は、兵庫県丹波市北部に位置する各学年1クラスの小規模高等学校で、平成24年度より、丹波市立青垣中学校及び氷上中学校と連携型中高一貫教育を導入する学校である。

小規模校としての特性を生かし、特色ある教育内容の実践を目指しており、そのような背景の中で、地歴公民科の学校設定科目として「時事問題」(高校2年生就職類型選択科目、2単位)を設置し、NIE推進事業による新聞配布が行われる1学期の間に月1回程度、新聞を使った授業を実践することになった。

なお、推進事業中の新聞置き場としては、生徒の進路資料閲覧コーナーを利用した。

■氷上西高校の歩み

～地域に支えられた「特色ある学校」に！

昭和23年10月	県立柏原高等学校佐治分校開設
昭和37年 4月	県立柏原高等学校青垣分校に改称
昭和51年 4月	県立氷上西高等学校として独立
昭和51年 6月	開校記念式典
昭和60年11月	創立10周年記念式典
平成 7年11月	創立20周年記念式典
平成17年11月	創立30周年記念式典
平成21年 4月	全学年1学級規模に
平成21年 4月	地域連携支援事業(～23年3月) 地域連携支援協議会(2カ年で8回開催)
平成23年 1月	市教委「連携型中高一貫教育」発表
平成23年 3月	県教委「連携型中高一貫教育」発表
平成23年度	「連携型中高一貫教育」の試行
平成24年 4月	「連携型中高一貫教育校」に改編



〔図1 氷上西高校の歩み〕



〔図2 連携型中高一貫教育看板の設置〕



〔図3 新聞置き場の様子〕

2 学校設定科目「時事問題」における実践

平成23年度は、NIE推進事業に基づく新聞配布(朝日・毎日・読売・日経・産経・神

戸の各朝刊)が、5月～8月にかけて行われたこともあり、実践機会を1学期に設けた。

実践形式としては、各社の新聞を読み、自身が関心を持った記事を抜粋し、200字程度に要約して、報告するという形式を取った。実践は合計3回行い、選択者10名が全員発表を行った。実践を重ねるごとに、要約内容・報告形式ともに向上が見られ、プレゼンテーション能力の向上につながったと考えている。



〔図4 新聞切り抜きの様子〕



〔図5 新聞要約中の様子〕

3 特別活動におけるNIE教育の実践

当初は、学校設定科目における実践のみを考えていたが、平成23年7月に行われた全国高等学校野球選手権大会兵庫大会において、本校野球部が歴史的な大敗を喫したことにより、様々な角度から注目されたことに起因し、出場した部員達を生かしたNIE教育の実践ができないかを模索した。

その過程で、出場した部員達と野球部部長である私がタイアップして、模擬記者会見に近いことができないかという案が浮上し、2学期の特別活動(LHR)の時間において、実践を試みた。

NIEを活用したLHR指導案

- 1 日時 9月16日(金) 6限
- 2 対象 2年生28人
- 3 授業担当者 能地敬典
- 4 展開
 - ①NIEについての説明を行う。〔5分〕
 - ②全国高等学校野球選手権大会兵庫大会に関する本校の記事を取り上げる。
(全生徒にコピー配布、取り上げる新聞社は複数)〔10分〕
 - ③実際に出場した生徒3名に新聞記事を踏まえた上での感想を述べてもらう。
(1人1分程度)〔5分〕
 - ④その他の生徒・教員は、模擬記者になり、出場生徒に質問をする。〔10分〕
 - ⑤担当者総括を行う。〔5分〕

⑥まとめの感想文を全生徒に書かせる。(記者側や取材を受ける側の立場を踏まえて、書く。)[15分]

実践中の生徒の様子を要約すると以下の2点が挙げられる。

①模擬記者側の生徒からは、様々な質問や感想が出たが、出場生徒側は応答に苦慮する場面が見られた。

②1名の生徒が意見を言うと、他の生徒も追隨して発表する側面が見られた。

実践に取り組んだ上での成果と課題は以下の通りである。

- ・成果・・・本校がNIE活動に参加していること、新聞記事に取り上げられていることを実感することにより、メディア全般に関する興味・関心を広げることができた。
- ・課題・・・学習課題として挙げていた、プレゼンテーション能力の向上という点については、今後も継続指導が必要である。



〔図6 実践中の様子〕



〔図7 生徒による質問①〕



〔図8 生徒による質問②〕

4 兵庫 NIE セミナーでの発表とまとめ

当初の予定から発展した形で、特別活動においても NIE 活動を行ったことを、幸いにも平成 23 年 11 月に兵庫 NIE セミナーにて発表する機会を頂き、実践者である私と本校校長である加藤昌宏で、参加させて頂いた。

報告内容は、特別活動における NIE 教育の実践や、本校の概要、特別活動における実践を試みるきっかけとなった試合の様子、試合での生徒の様子、本取り組みを行った成果と課題などについて、報告させて頂いた。

特別活動での NIE 実践は、高校ではあまり例がない取り組みの方法であるが、生徒の自尊感情の育成のために、今後も様々な形での実践を模索していきたい。



〔図 9 セミナーでの様子①〕



〔図 10 NIE セミナーでの様子②〕



〔図 11 セミナーに関する記事

(平成 23 年 11 月 6 日付 毎日新聞)〕

新聞を読んで「自分と社会をつなぐ」

兵庫県立武庫荘総合高等学校 教諭 川村道雄

1 はじめに

本校は、県立武庫工業高校と県立武庫荘高校との発展的統合によって平成 15 年度に設置された総合学科高校である。平成 22 年度奨励枠での実践校指定をいただき、「まなび支援部」が窓口となってN I Eの取り組みを始めることになった。「まなび支援部」とは、本校独自の分掌組織であり、生徒の「目に見えない学力」に働きかけながら意欲喚起を促すことを使命として立ち上げられた部である。実践 2 年目となる 23 年度は、私以外の 2 人が入れ替わった。Manabee Morning（朝のSHRで新聞記事を読む活動）や新聞課題（生徒が記事を選び、切り抜いて感想を書く課題）をどのように展開したか、また新たにどのような試みに取り組んだかを中心に、23 年度の活動を報告する。

2 本校生の実情と課題

「まなび支援」の対象は全年次にわたるが、特に低学年（1・2 年次生）への働きかけに力を入れている。入学生徒の半数（160 名）は推薦入試合格者で、彼らには入学前に新聞記事を選んで感想を書く課題を出している。また、「自分の個性についてあれこれ考えてもしょうがない」という挑発的な文章に対する賛否を考えさせる国語の課題を与え、自分のことばで意見が言える生徒の育成に力を入れている。だが、入れる学校を探したところたまたま本校だったという一般入試組が近年増

えてきており、新聞課題に対しても、入学後は、提出しさえすればそれでいいという安易な方向に流される生徒が増加傾向にある。その一方で卒業時には、総合学科ならではのさまざまな体験を通して「自分の成長が実感できる 3 年間だった」と誇らしげに語る生徒が多くいるのもまた事実である。新聞活用をきっかけに、武庫総生が「自分と社会をつなぐ」意識を持ち続け、卒業後は社会に寄与する人材となることを願って、私たちはN I E実践を進めている。

3 指定校推薦組に対する「まなび」課題

23 年度の初めての試みとして、3 年次生の秋以降の取り組みの報告から始める。これは、学校での指定校推薦が内定した生徒を対象に、卒業まで高い意識を保たせたいという思いから、新聞課題に取り組ませたものである。担当の 3 年次副主任井上教諭による総括を以下に記す。（文責 川村）

【内容と提出状況】

10 月から 1 月まで、月 2 回（計 8 回）、関心を持った新聞記事を切り抜き、それについての感想を 400 字でまとめる。対象生徒は 40 名。締切日に遅れる生徒が若干名いたが、毎回全員が提出した。

【成果】

①新聞への関心が社会への関心につながり、それが学びの深まりをもたらした。

・自分の知らないことがいかに多いかに気づ

き、それが学びの原点になると自覚した生徒が複数いた。

- ・記事を選んで疑問があれば調べ、その探求活動を通して問題への関心がより深まったという実感をもつ生徒がいた。

②進学先で学ぶ専門領域に関する記事を毎回選択することで、結果として大学での学びの準備となっていた。

- ・保育系の大学や短大への進学者で、待機児童の問題や、虐待その他教育をめぐるさまざまな取り組みについての特集記事などに関心を向け、回を追うごとに問題意識が高まっていく生徒がいた。
- ・外国語大学への進学者で、ヨーロッパの債務危機の問題、日本のTPPへの参加など、難しい問題を積極的に考えてみようとする生徒がいた。

③震災の記事を通して、自分に何ができるのかを真面目に考え、人と人とのつながりをもっと求めようとする意識が生徒たちに芽生えてきているのを感じる。

④身近な暮らしの中での心温まる小さな事件を意図して選んでくる生徒がいた。こうした生徒は概して震災の記事を選ばない傾向があったようだ。

- ・「自分はこの課題で一切震災の記事を選ばなかった。それは被災者の苦しみが自分の身の丈をはるかに超えていると感じられ、それにもかかわらず震災に関して言葉にすると、自分の言葉が軽薄になるように感じるからだ」という意味のことを書いている生徒がいた。言葉に対する繊細な感覚が育っているのがうかがえる感想であった。

【課題】

①スポーツ関連の記事やセンセーショナルな話題といった、目を奪われやすいトピックスに引きずられ、その問題を通して自分が何を

考えたのか、何を考えようとしたのか、といった意識の希薄な生徒が、毎回必ず見受けられた。(例 箱根駅伝での柏原選手の活躍→すごい→自分も頑張りたい、で終わるっている感想など。)

自分の思考(言葉)を深めきれないこうした生徒にはコメントでその旨を指摘するよう努めたが、なかなか改善されなかった。

②記事に内在している問題の取り上げ方にはセンスが感じられるのに、そこから自分の思考を深める段階で、ステレオタイプな価値観を持ち出したり、ありきたりなモラルで自分を収めてしまったりするケースが見られた。たとえば、はっとする出来事に遭遇した筆者の体験の記述を読んで、「やっぱり人は見かけで判断してはいけない」という感想でまとめてしまう、などの例があった。

③自分の興味関心に応じて記事を選択するのは悪いことではないのだが、自分の幅を広げられず、選ぶ記事も感想もワンパターン化してきて、そこから抜け出せない生徒がいた。

上記の【課題】は、小論文指導の際にも頭を悩ますところである。月2回のやりとりで劇的な変化をもたらすのは難しいが、感想に添えられたコメントが生徒の表現意欲を引き出していった今回のようなある種の対話が、教材の宝庫ともいえる新聞を介して繰り返される意味は大きいと考える。

4 年3回実施の「新聞課題」

昨年度、1年次生(8回生)に課した新聞課題(記事の切り抜きと感想)は2年目も引き続き実施したいと考え、23年度、1・2年次生に新聞課題を課すことにした。(1)5月の連休課題、(2)夏休み課題、(3)冬休み課題の計3回実施。少しずつやり方を変えて

おこなったそれぞれの内容を報告する。

(1) 5月課題

各自の興味関心にそって選んだ記事を貼り付け、400字で感想を書くというオーソドックスな課題を出した。年次の協力で、最終の一人まで課題を出しきらせた。「まなび支援部」の部屋を放課後開放し、随時コピーができるようにしている。全員の提出が完了した時点で、各クラス3名ずつを選び、支援室日より(Manabee)で生徒感想を紹介した。生徒はけっこうバラエティーに富んだ記事を選んでくる。ここでは2年次生の選んだ記事の一部を紹介する。

- ・大学生の就職内定率、最悪80%～高校生も低迷
- ・就活に出遅れる3つのパターン～自分の道見つけて抜け出せ
- ・平泉、小笠原 世界遺産へ
- ・百景を歩く 京都祇園
- ・世界人口2100年には101億人
- ・東日本の被災地に、スリランカから紅茶、モルディブからツナ缶が贈られたことを記事にした読売新聞の編集手帳
- ・被災地の学校にヨット贈呈「総体で会おう」

若者をとりまく状況から、文化、社会、国際政治、東日本大震災など、話題は多岐にわたる。地元尼崎で起きた「JR福知山線脱線事故から6年 家族が支え」という記事を選んだ生徒は、小学生だった当時、授業中に外に出てヘリコプターや煙を見てみんながざわめいていた当時を思い出、「JRに乗るたびに私は現場のマンションが目につきます」と他人事にはできない思いをつづっている。

(2) 夏休み課題

テーマを「HAPPY NEWS 2011」とした。新聞からは、事件や事故のニュースだけでなく、読む人にHAPPYな気分を届けてくれる記事が見つかる。「ひとついいな」「こんなおとなになりたいな」「勇気がふっとわいてきた」「心があったかくなかったな」—このような感想を抱いた記事を選ばせることにした。これは、日本新聞協会の「HAPPY NEWS 2011」に応募することをもくろんでのことである。

応募の第1回締め切りが9月30日。夏休み明け、1年次生全員を対象に応募を前提で、切り抜きと400字感想の提出を課した(2年次生で応募に了承した生徒の文章も一緒に送った)。

「なでしこジャパン世界一」のニュースで日本中がわきかえっていた頃でもあり、話題が集中したり、深く読みもせず一面のスポーツ記事ですませたりする傾向も見られたが、すみずみまで読んでいないと見つからないような記事に目をつけた生徒もいて、生徒の若くてしなやかな感性にうならされることが多かった。

年度末に、日本新聞協会から「HAPPY NEWS 2011」特別賞をいただくという思いがけない通知があり、学校や年次全体で取り組むことの意義を再確認できたのは嬉しい限りである。

(3) 冬休み課題

冬の第3回課題は、「自分と社会をつなぐ」意識を高めることをねらって、「心にずしんと響く記事を見つけて、社会とつながっている自分を実感し、2012年をスタートさせよう」と呼びかけた。そして、今回はじめて教員側からも記事を提供することにして、次のどちらかを選択させた。

- ・配布する13の記事から選ぶ。

・前回と同じように、自分で記事を選ぶ。

生徒が探求活動を進める上で、教師の介入は慎重でなければならない。生徒の依存を高めてしまうことも想像できたが、安易に記事を探そうとする生徒が目立ち始め、現状打開策として、ボリューム感のある、新聞ならではのじっくり向き合い考えることのできる記事に触れる機会を与えてみようと考えた。そこで3人の教員で13の記事を選び、生徒に提示することにした。

1・2年次とも、約9割は添付の記事に対して感想を書いてきた。こだわりをもって記事を探す生徒の割合がもっと増えてほしいと思うが、感想の中身は前回よりもグレードアップしている。ありきたりの表現だが、やはり「よいもの」を読ませることは大切だと再認識した。

下の写真は、このとき選んだ記事を素材に、1年次の新聞委員が総合学科発表会展示部門で発表した作品である。「絆」をテーマに、自分たちが共感した記事を取り上げ、グループで考えたことを模造紙にまとめていった。



5 Manabee Morning

～朝のSHRに新聞記事を

昨年に続き週2回、朝のSHRで読ませたい記事を届けた。用紙はA5に統一し、1回の分量が多くなりすぎないように配慮している。1・2年次の担当を分けたため、記事は重複しないことが多く、多彩な記事を選ぶことができた。ここでは1年次の活動を振り返っておきたい。

第1号は6月3週、「合格喜ぶ声に『おめでとう』』という、主婦の方の女子高生との会話を素材とした投書からスタートした。しばらくの間は、心を解きほぐし、気持ちが温かなるような記事選びを心がけている。そのため投書欄に載った記事を選ぶことが多かった。前期(9月)末の時点で11号を配布している。後期は科目「産業社会と人間」でディベートが始まることもあり、徐々に、少し長めで読み手の思考にゆさぶりをかける記事を入れていくようにした。

年が明けて、2月の推薦入試以降は、家庭学習課題と合わせて「おうちDE Manabee Morning」を持ち帰らせ、毎日1枚、心に残った言葉を書きとめるスペースを設けて長い記事にも取り組ませた(下図参照)。SHRの時間の制約がない分、読ませたい文章を思い切って載せることができる利点もあった。こうして、年間50号まで出し続けることができた。



6 おわりに

活動2年目を振り返って、昨年度の課題として挙げた「感じたことを広げ、深める」にはまだまだやるべきことが多いと感じている。しかし、ManabeeやManabee Morningに対する好意的な感想を同僚の先生方から頂戴する機会も増えている。24年度は、授業や総合的な学習で新聞を積極的に取り入れた実践を積み重ね、学校をあげて取り組みの充実を図りたいと思っている。

【 大 学 】

新聞を通して社会とつながり、主体的に考える力を育てる — 大学での初年次教育での取り組み —

神戸山手大学 准教授 飯嶋香織

I はじめに

神戸山手大学は、神戸市中央区に位置し、一学部からなる小規模な大学である。

建学の精神として「自学自習」、「情操陶冶」を掲げている。これは神戸山手学園創立の最大の功労者である杉野精造が提唱したもので、「学校とは教校ではなく学ぶ所であり、自力的学習の場である」として、「自学自習」は自力的で積極的な、自ら進んで学習する姿勢である。

II NIE を大学で実施する意義と目的

1) NIE を大学で実施する意義と目標

本年度、兵庫県内では大学の実践指定校は2校あり、神戸山手大学はその一つである。本学はNIE実践の1年目で、手探りの中での実践となった。

本学では、NIEの実践を1年生の初年次教育の時間に行った。大学の初年次教育でNIEを実践することは、以下のような意義と目的があると考えている。

※初年次教育とは「教員から一方的に教えられることが多い高校までと異なり、大学では自主的な学習が求められる。入学直後にその移行がうまくいかず、ドロップアウトしていく学生が多い。そのためにレポートの作り方や資料の収集方法など、大学での学習に必要な基本的な作業について教える。導入教育ともいわれる。」(知恵蔵 2011)

大学に入学した1年生は、高校までの受け身の勉強から、大学での自立的、能動的な学びへと転換が必要であるが、どのようにすればよいのかわからないことが多い。

一方、NIEのホームページによれば、NIEの目的は二つあるとしている。「第一が、効果的な教育プログラムを通じて読み書き能力を向上させること。第二は、新聞を読むことを奨励し民主主義社会を構成する市民を育成することである。(中略)子どもたちは社会の窓である新聞を通じて世の中により一層興味をもつようになっていることも明らかである。」

引用 <http://nie.jp/about/started/index.html>

本学での初年次教育は、大学での自立的、能動的な学びを目的として、1年生対象に少人数クラスで「基礎演習」(必修)で行われている。「基礎演習」の内容は、「1年生が戸惑うことが多いレポートの書き方を少人数の対話式授業で身につけていく。(中略)質の高いレポートが書けるように資料を手早く読み取り適切な要約を作るコツや、そこから自分の意見を論理的に展開させる方法などを身につけていく」ことである。

引用 神戸山手大学『平成24年度 学生便覧』

本学の「基礎演習」の目的とNIE教育の第1の目的は重なっている部分が多い。さらに、NIEの第二の目的である、「社会の窓である新聞を通じて世の中により一層興味をもってもらうこと」は、本授業の特色の一つである対話式授業の中で、新聞に書かれていることを、他人事ではなく自分の事(自分につながっている)問題として捉える視点を重視することである。そして、主体的に新聞に関わることを通して、自分

の意見を論理的に展開させる方法などを学ぶことにつなげることを目標にした。

2) NIE と学習指導要領との関係

今回、NIE 教育を実践するにあたり、NIE の第二の目的である「民主主義社会を構成する市民を育成すること」を目標の一つにすることも考慮することにした。

平成 20 年の中学校学習指導要領の改訂で、社会科公民的分野「現代社会をとらえる見方や考え方」で、「人間は本来社会的存在であることに着目させ、社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義について考えさせ、現代社会をとらえる見方や考え方の基礎として、対立と合意、効率と公正などについて理解させる」が追加された。

その点について、江口は「物事の決定の仕方やきまりがその紛争解決過程では深くかかわってくることから、(中略)『対立と合意』は、一つの社会の諸事象をとらえる場合の方法的視座であるが、改訂ではそれらを利用して『公共的事柄』や『社会的調整』などに積極的に参画する資質の育成を、最終的には求めているのではないだろうか。」としている。

引用 江口勇治、2010 「「対立と合意、効率と公正」による学習の意義と指導のあり方について」『中学校 社会科のしおり』2010 年 1 月号 帝国書院

本実践では、新聞を通して社会生活に見られる具体的な事例を取り上げ、物事の決め方、その決まりが妥当なものかなどを学生自身が考察することを通して、社会の問題を解決するために社会に参画する力を身につけさせることを目標の一つにした。こういった力を育てることが、民主主義社会を構成する市民を育成することにつながると考えるからである。

Ⅲ NIE 教育実践の具体的内容(1)

1) 新聞の配置

本学は小規模大学であり、可能な限り、全ての学生に新聞で親しんでもらえるようにと、多くの学生が利用するコミュニティホールの一角に長机を並べ、新聞を置き、誰でもいつでも閲覧できるようにした。



2) 記者派遣

2011 年 11 月に記者派遣事業で、日本経済新聞神戸支社長大塚敏生氏にきていただき、「若年層の雇用—大学生の就職と新聞の活用」について、講義をしていただいた。

大学生の就職状況が厳しいことは学生の共通認識であり、学生はまだ 1 年生であったが、自分の将来のことであり、真剣に聞いていた。さらに新聞が就職活動で大変役に立つことを知り、学生の NIE への取り組みへ意欲につながった。



日本経済新聞 大塚敏生氏

Ⅳ NIE 教育実践の具体的内容(2)

— 授業での実践 —

1) 授業のねらい

授業では、以下のことをねらいとした。
a) 新聞に書かれていることは、他人事ではなく自分の事(自分につながっている)問題として捉える。

- b) 同じテーマの複数の記事を読んで、比較し、同じテーマであっても新聞によって新聞記事の扱う量、内容にも違いがみられることを学ぶ。
- c) 「社説」「解説記事」について考える。「出来事、事実の説明」と「意見、主張、感想」の違いに気がついて読み取る。新聞に書かれている「意見、主張、感想」に対しての自分の意見を考える。それによって情報の理解をより深いものにする。
- d) 新聞を通して社会生活に見られる具体的な事例を取り上げ、物事の決め方、その決まりが妥当なものかなどを学生自身が考察することを通して、社会の問題を解決するために社会に参画する力をつけさせる。

2) 新聞記事の選定

前述の授業のねらいと、新聞を読むことの興味を持ってもらえるような内容という2つの視点から、学生にとっても身近な出来事である以下の記事を選んだ。

2011年10月26日(水)の各紙の朝刊に「自転車は車道走行」という趣旨の記事があった。そこで、以下の6つの記事を選び、教員が、コピーして配布した。

- ① 2011年10月26日(水) 読売新聞朝刊「自転車は車道 徹底」
- ② 2011年10月26日(水) 毎日新聞朝刊「『自転車は車道』徹底」
- ③ 2011年10月26日(水) 毎日新聞朝刊(クローズアップ 解説記事)「利用者への浸透課題」(記事の中に図がある)
- ④ 2011年10月26日(水) 毎日新聞朝刊(解説記事)「なるほドリ 自転車レーンって何なの？」
- ⑤ 2011年10月26日(水) 朝日新聞朝刊社説「危ない自転車 歩道は歩行者に返そう」
- ⑥ 2011年10月26日(水) 神戸新聞朝刊

「マナー無視、事故多発で指示 自転車の車道通行徹底」

3) 授業での実践

授業名 基礎ゼミ(授業時間 90分)
 実践者 杉本健三 飯嶋香織
 学年 1年生 10名

4) 授業の展開

a) 新聞記事と自分の経験を結びつけ、新聞記事により興味を持ってもらうために新聞記事を読む前に、以下のことについて話し合う。

- ・自分が自転車に乗っていて怖かった経験はあるか。車とぶつかりそうになるなど
- ・自分が歩行者だった時、自転車のぶつかりそうになるなど怖かった経験はあるか

学生の多くが自転車に乗っていて事故に遭いそうになった経験、歩行者であったときに、自転車と事故になりそうになった経験があった。

b) 前述の新聞記事①～⑥までを読んで、以下のことを書いて、発表する

- ・新聞記事①～⑥全体を通して共通する点
- ・自転車の何が問題となっているのか。
- ・自転車の問題に対して、どのような対策をとろうとしているのか。

ここで以下のことを学生全員で確認した。今回の問題は、警察庁が歩道を走る自転車の危険走行や歩行者の事故が目立つので、対策として自転車は車道を走行することを徹底するという内容である。自転車と歩行者のいずれの安全を重視した対策かであるかについては、「歩行者」である。

c) 現在、解決策として望ましいのはどうであるかについて、新聞を読んで考える。自転車レーンについて(④の記事)「なるほドリ 自転車レーンって何なの？」

を再度、全員で読む

歩行者と自転車の両方の安全を考えると最もよいのは「自転車レーン」を設置する。しかし、時間がかかり、費用もかかる。すぐには対策が出来ない。

d)では、現時点でどうするのか望ましいか、について、以下のテーマで議論する。

「歩行者を優先する→自転車は車道を走るので自転車が危ない」

VS

「自転車は歩道→歩行者が危ない」

の問題についていずれが望ましいかを学生同士で議論する。

学生の意見

- ・ 自転車は歩道の場合、歩行者が危険である（現在の状況）。

しかし、路上駐車は荷物や送り迎えのためなくならないので、車線が狭くなっている箇所があり、自転車が車道を走るとは危ない。

- ・ 自転車のルール徹底は可能か。

自転車に乗る人の意識を変えることは難しいとの意見が大勢を占める。

- ・ 取締りの強化は可能であるか。

取締りの強化には警察官の増員など多額の費用がかかる。

では、どちらを選択するか？

→ 学生の意見は「自転車は歩道」

さらに、学生から、道路の幅を広げずに自転車レーンを作った場合、自動車道が狭くなり、自動車が正面衝突の恐れがあるとの意見が出た。

短期的に対策を考えた場合、自転車レーンを含めて、「歩行者」、「自転車」、「自動車」の三者で現状は限られた面積の道路を取り合う形になっている。

そして私たちは、歩行者でもあり、自転車にも乗り、自動車にも乗る事を考えると非常に難しい問題であることがわ

かる。

社会生活での決まりの意義や必要性、その決まりが妥当なものか、さらに決まりを作る過程での「対立」があり、その中でもっともよい決まりを選んでいく「合意」の過程があり、決まりは変えていくことができることなどを学生は理解したようである

※ここでの議論は歩行者、自転車、自動車の数が一定であることが条件である。例えば、自動車数や自転車に乗る人を制限するなどのきまり(政策)を作ることにも可能である。また長期的に考えれば、道幅を広げるなどの政策もありえるが、ここではそれを考えない。

e)社説ではどのように言っているのかを丁寧に読む。

⑥朝日新聞「歩道は歩行者に返そう」を使って、社説の読み取りについて、「出来事や事実」と「意見、主張、感想」の違いに気がついて読み取る。「意見、主張、感想」に対しての自分の意見を再度考える。

V 成果と課題

複数の新聞を読み比べることを通して、身近な問題であっても多くの視点があることを学生は実感し、多面的に物事を考えることができた。さらに、物事の決め方、その決まりが妥当なものかなどを学生自身が考えることができた。本学の初年次教育の目標である、自分の意見を論理的に展開させる方法などを身につけることについても、成果があった。

課題としては、教材となる記事の選定が難しい点が上げられる。今回の教材では、受講生は「自動車」、「自転車」、「歩行者」と、どの立場にもなるので、「対立」があってもこの3者の立場に理解と共感を示しながら議論をすることができた。しかし、別のテーマで実施した時は、異なった立場に立つという想像力の欠如などにより、相手の立場への理解がなく、切り捨ててしまうこともみられ、課題として残った。

新聞を身近な学習材に —大学における NIE 活動の可能性—

関西国際大学 教育学部
教育福祉学科こども学専攻
准教授 中西一彦

1. はじめに

今、大学4年生もすでに平成生まれである。ゆとり教育の申し子であり、活字離れを危惧された世代でもある。NIE（教育に新聞を）活動が各地で開始された頃から学校生活を始めた子どもたちである。

大学入学後、国語 I の授業で、新聞を丸ごと1部配布する。1面から順にめくらせる。何とも手つきがぎこちない。中には「コラムを見て」の指示に、思わず「コラムって何ですか？」と尋ねてしまう学生もいる。

日本新聞協会の調査によれば、2011年度のデータでは、購読者は1世帯あたり1部に満たないそうである。「家に新聞がある」のが、あたりまえの状況ではないのである。新聞にほとんど触れることなく、日々の生活を過ごしてきた者も多くいるのである。ニュースや情報は、携帯やパソコンのインターネットで知ることが、逆に日常化している。

自主性が重んじられ、ICT教育が重視されてきた中で育った学生は、新聞とはあまり縁がない存在なのである。

実践対象は教育学部の学生である。近い将来教員として、教壇に立つ。新聞の読み手として社会に出てほしい。新聞活用の担い手として子どもたちの指導支援にあたってほしい。切にそう願う。

まずは新聞の存在そのものを意識させることから始めよう。新聞は身近にあり、とても重宝するものであることを実感させよう。大

学における NIE は、このような思いから始まった。

2. 投書に挑戦

読者が直接自らの思いを伝える場として投書欄がある。若者 BOX 席（神戸新聞）、十代の声（産経新聞）、U-25（読売新聞）、若い世代（朝日新聞）など、各紙若者の投書を優先的に紹介するコーナーもある。字数にすれば、400字前後、原稿用紙1枚程度である。

投書活用には、次のような利点がある。

- 話題・問題・課題を発見することができる。
- 文章力を試す場となる。
- 意欲を喚起する契機となる。
- 社会との接点を得ることができる。
- 繋がりや広がりを実体験できる。

なによりも字数の短さが書くことへの抵抗を和らげるものである。毎日数多くの投書が掲載されており、範とする文章がある。書く材料も多く提供されている。

投書に挑戦し、たとえ自らの文章が採用されなくても、仲間の投書が掲載されることにより、投書は身近な情報発信の場として認識される。最初2、3人の投書が載ると、次に続く者の意欲が俄然高まる。結果として、半年のうちに10数人の投書が活字となり、紹介されることになる。

3. 新聞記事からスピーチ

毎回5~6人のペースで受講生全員一度はスピーチを経験させることにしている。テーマの一つとして「新聞記事から」を設定して

いる。2 分間スピーチとしているので、分量的には原稿用紙 2 枚（800 字程度）になる。このテーマでは、次の 3 つの目が必要となる。

- 話題を見つける目（探す）
- 要約する目（絞る）
- 社会への目（注ぐ）

他のテーマ、例えば「思い出に残る授業」や「私の好きな言葉」といったものと比較すれば、かたい感じのスピーチになる。しかし、個人的なほのぼのとした内容のものとは違い、聞き手にも考えさせる、いわゆる問題提起スピーチになる。これが発展すれば、意見交換から議論へととなる。

4. はがき新聞の活用

ハガキ大の新聞作成用紙がある。用途は多用である。活動やイベントのまとめとして用いると使い勝手がよい。学級通信的な発行物にするなどである。

実際に活用して感じる利点は以下の通りである。

- 抵抗感を持たずに取り組める。
- シンプルなレイアウトである。
- 体裁を整えることができる。
- 掲示しやすい。

マス目をうめることは、意欲を喚起するようである。推敲することへの煩わしさも消してくれる。ここは漢字に、ここは言い換えようと、読みやすさ、見やすさを意識し、自然と文章が書き直される。

今回は、自らお薦めの本を「学生選書」として紹介するための選書カードとして利用した。「学生選書」を決定する際のエントリーカードとして作成された。実際に「学生選書」として図書館のコーナーにお薦め本が設置されたあとは、本貸し出しの参考カードとして有効活用されている。その影響か、「学生選書」コーナーの書籍は、他の棚よりも多く貸し出

されている。

「学生選書」カード例



5. 小学生新聞の比較

2011 年度は、子ども向け新聞が全国で次々と産声をあげた年である。

一般紙と小学生新聞を比較することで、学習教材化へのヒントを得ることができるかもしれないという思いから、こちらは 2 年生以上が受講する国語Ⅱでとりあげることにした。

実践指定校として講読できる期間に、毎日と朝日は小学生新聞の購読をお願いした。

学生たちの気づきは以下の通りである。

- ・カラフルである。
- ・ルビがふってある。
- ・マンガ、イラストが多い。
- ・子どもの周辺（学校など）の話題が多い。
- ・学習関連の記事が多い。
- ・本の広告が多い。
- ・わかりやすく説明している。

当然のことながら、子どもたちの興味・関心を引く工夫がなされているわけである。

学生たちが感心した点を列挙してみる。

- ・子どもへ？や疑問文で投げかけている。
- ・時事問題を取り上げられている。
- ・ニュース解説で対話式にしている。
- ・キーワードのことは説明がわかりやすい。
- ・豆知識が得られるようになっている。
- ・親子で読める。
- ・写真が多く用いられている。

6. 教材新聞の作成

「初等国語科教育法」という2年生受講科目においても、新聞を意識する活動を行った。授業を行うまでの過程を実際に体験させる中で、教材研究の一環として教材新聞づくりに取り組ませた。

『世界一美しいぼくの村』（東京書籍「新しい国語四下」）を題材として用いた。

作成条件は3つ。

- ①具体的な授業時の資料として使えるものにする。
- ②レイアウトを工夫する。
- ③手書きによる文字の丁寧さを意識する。

具体的には、次の新聞を例示した。



実習も含めて、授業を行う際の資料作成の訓練である。読ませることへの関心を高めるにはどのような工夫が必要かを体験するものでもある。

今回は、100名を超える受講生でもあったので、5~6人のグループで1枚の教材新聞作成とした。その結果、どのようなレイアウトにするか、だれがどの記事を担当するか、という編集会議が開かれた。個人で新聞を作成する段階でもレイアウト工夫は必要な過程である。グループワークとしたことで意見交換ができ、今後のためにも参考となった。

学生の作成した教材新聞



7. HAPPY NEWS への応募

新聞を読むことに少し慣れてくると、妙な錯覚に陥ることがある。暗い殺伐とした記事が新聞には多いという感覚である。読むことを習慣化することの妨げの要因の一つになるかもしれない。

実は、新聞には生活面、文化面だけでなく、探せば明るい、心温まる記事も多く掲載されているのである。大きな出来事や事件に注意が向き、読み落としてしまっているのが現状である。

そこで、心を和ませ、いわゆる HAPPY NEWS 探しに取り組ませた。

まずは新聞紙面を広げ、とにかく見つめることに専念させた。



見つけ次第、スケッチブックに貼っていく作業に続く。



次に、なぜ HAPPY なのか、どこに心が和むのかを意見交換、情報交換する。



最後に、一つの記事を各自が選び、日本新聞協会が行っている「HAPPY NEWS2011」に応募した。

応募は、意欲付け興味付けであるが、この作業を通じて、新聞紙面には必ずホッとすることが掲載されていることを知り、新たな読み方を実感することになった。

8. 出前授業

実践指定校にしていただいて、新聞が提供されることは勿論のこと、出前授業をしていただけることも大きな魅力である。

新聞に関わる方が、実際の体験経験を、新聞社の現状を踏まえ、語って聞かせてくださる。この事実は大きい。説得力がある。具体的な作業が伴うと、さらに効果は大きくなる。現実に行われる過程をおさえての出前授業はインパクトが強い。

産経新聞 2011(平成23)年12月23日 朝刊

NIE 教育に新聞を
学生ら事件記事作成に挑戦
関西国際大で出前授業

「神戸市独自の『方法』を学んだ学生は、産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。

産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。

産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。産経新聞記者の指導のもと、事件記事の作成に挑戦した。

関西大での出前授業です。

9. おわりに

実践指定校1年目の活動の概略を報告した形になった。大学でのNIE活動ということで、目新しいことがあるのではと期待された向きには、意外な内容かもしれない。小中の現場で行っている活動となんら変わらないではないかという感想をお持ちになる方も多だろう。

「はじめに」で述べたように、NIE初心者といえる学生を対象にしていることも確かにあるが、それ以上に、実際に学校現場に出た時に、NIEを実践してみたいという思いを持たせたいという願いの方が強い、今回の取り組みである。

2年目は、取材インタビューといった新たな要素も加えた取り組みを報告できるようにしたいと考えている。

2011(平成23)年度
『兵庫県NIE実践報告書』

—2012(平成24)年6月発行—

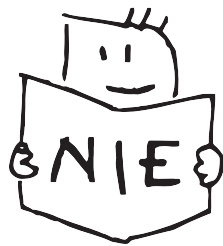
兵庫県NIE推進協議会 編

〒650-8571

神戸市中央区東川崎町1-5-7

神戸新聞社読者サポートセンター内

TEL 078(362)7054 Fax 078(362)7424



Newspaper in Education